



Agile Product Lifecycle Management

インポートおよびエクスポート・ガイド

v9.2.2.3

部品番号: E06152-01

2008 年 4 月

著作権および商標について

Copyright © 1995, 2008, Oracle. All rights reserved.

このプログラム(ソフトウェアおよびドキュメントを含む)には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバースエンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段(電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、Agile は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることができます。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行(製品またはサービスの提供、保証義務を含む)に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

著作権および商標について	ii
インポートの基礎.....	1
[インポート] ウィザードについて	1
Product Collaboration	1
Product Cost Management	2
Product Service & Improvement	2
Product Governance & Compliance	2
Product Portfolio Management.....	2
データ インポートの新機能.....	3
[インポート] ウィザードを使用する前に	3
[インポート] ウィザードの使用に必要な権限.....	4
データ インポートの推奨手順.....	4
プロダクト コンテンツをインポートする手順.....	4
公表価格をインポートする手順	5
製品サービス依頼をインポートする手順	5
品質変更依頼をインポートする手順	5
サプライヤの製造元提示をインポートする手順.....	5
Product Governance & Compliance オブジェクトをインポートする手順.....	5
任意の手順でインポートできるオブジェクト.....	6
インポート設定の永続化.....	6
大容量ファイルをインポートするタイミング	6
[インポート] ウィザードを開始する	7
[インポート] ウィザードの手順	7
インポート前にソース データを検証する.....	9
概要	9
サポートされるファイルタイプ	9
サポートしているテーブル	9
Agile SDK および Agile Integration Services の検証サポート	11
検証結果ログ ファイル	11
データ検証の手順と例.....	13
データ検証の例.....	13

ソース データを準備および選択する	15
サポートされているファイルフォーマット	15
フィールド Agile PLM について	16
Agile クラス レポートを印刷する	16
データ タイプ	16
フィールドの最大長の値	17
親フィールドと子フィールド	17
データ値に対してサポートされているフォーマット	17
推奨日付フォーマットと推奨タイム ゾーンを設定する	17
サポートされている日付フォーマット	18
タイム ゾーンを指定する	19
aXML および PDX パッケージの日付フォーマット	19
通貨の値をインポートする	20
インポートされた通貨値の設定	22
質量をインポートする	23
地理的な場所をインポートする	23
動的リストに値をインポートする	23
カスケードリストをインポートする	24
BOM 参照指示を使用する	24
参照指示の範囲	25
参照指示の範囲で先行ゼロを使用する	25
aXML および PDX パッケージから参照指示をインポートする	26
Excel ファイルおよび区切りテキストファイルのガイドライン	26
改行およびラインフィード文字を削除する	28
BOM コンポーネントを並び替える	28
Microsoft Excel ファイルからデータをインポートする	29
Excel で区切りテキストファイルを編集する	30
区切りテキストファイルを Excel にインポートする	30
[インポート] ウィザードで Excel データをパースする方法	31
Excel ファイルの設定を指定する	31
区切りテキストファイルからデータをインポートする	32
区切りテキストファイル設定を指定する	33
PDX パッケージおよび aXML ファイルからデータをインポートする	33
PDX パッケージからインポート可能なオブジェクト	35
aXML ファイルからインポート可能なオブジェクト	35
テンプレートを使用してデータをインポートする	37
レベル テンプレートを使用する	38
関係テーブルにオブジェクトをインポートする	42

製品コンテンツをインポートする	43
インポートする製品コンテンツのオブジェクトを選択する	43
アイテムをインポートする	44
部品およびドキュメントをインポートする	45
BOM または AML を含む親アイテムをインポートする	45
複数のリビジョンを持つアイテムをインポートする	45
部品構成表 (BOM) をインポートする	46
存在する BOM コンポーネント、および存在しない BOM コンポーネントをインポートする	47
見出し番号をインポートする	47
一部の BOM をインポートする	47
製造元と製造元部品をインポートする	48
アイテム番号と見出し番号が重複した BOM をインポートする	48
承認済み製造元リストをインポートする	48
子製造元部品の自動作成	49
一部の AML をインポートする	49
見積履歴、公表価格、および価格ラインをインポートする	49
主な価格フィールド	49
主な価格ラインフィールド	50
一部の価格ラインをインポートする	51
顧客および製品サービス依頼をインポートする	51
顧客をインポートする	51
製品サービス依頼をインポートする	52
品質変更依頼をインポートする	54
レッドラインまたはオーサリングモードを使用する	56
設計変更を選択する	56
BOM、AML、および価格ラインのロールバック	57
拠点別の BOM と AML をインポートする	58
Agile Product Governance & Compliance データをインポートする	59
デクラレーションタイプ、サポートされているテーブル、およびインポート可能なオブジェクト	59
特別なエクスポートおよびインポート コマンドを使用してデクラレーションを完成する	61
aXML および PDX パッケージから添付ファイルをインポートする	62
インポート可能な添付ファイルのフィールド	62
添付ファイルの最新バージョンをインポートする	63
URL 添付ファイル	64
添付ファイルと親アイテムのロールバック	64
添付ファイルの値を変換する	64
複数ファイル (フォルダ) を持つ添付ファイルをインポートする	64
添付ファイル レッドライン	65

Agile パッケージから添付ファイルをインポートする	65
サプライヤおよびシステムデータをインポートする	67
サプライヤをインポートする	67
サプライヤ製造元および部品分類提示をインポートする	68
サプライヤの見積依頼回答をインポートする	69
Web サプライヤ以外のサプライヤの回答をインポートする	70
サプライヤの回答フィールドを編集する際のガイドライン	70
提示された代替部品を回答ファイルに追加する	72
回答を価格算出ケースにインポートする	73
サプライヤからの回答フィールドの有効な値	74
通貨換算テーブルをインポートする	75
ソーシングプロジェクトへデータをインポートする	77
ソーシングプロジェクトについて	77
ソーシングプロジェクトから [インポート] ウィザードを開始する	77
レベルテンプレートおよび親一子テンプレートをソーシングプロジェクトにインポートする	78
ロールアップ数量を計算する	79
プロジェクトにインポートできるデータタイプ	79
プロジェクトからアイテムマスターへ AML を公表する	79
数量割引と目標コストをマッピングおよびインポートする	79
プロジェクトでのリビジョンの処理方法	80
インポートフィールドを Agile フィールドにマッピングする	81
マッピングファイルについて	81
キー フィールドと必須フィールド	81
BOM のマッピング要件	85
見積履歴および公表価格のマッピング要件	86
マッピングクラスとサブクラス	86
設計変更とマッピングファイルを選択する	86
新規マッピングファイルを作成する	87
[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] フィールドをマッピングする	88
[マッピングファイルを編集] ウィンドウでのフィールドの並び替え	88
マッピングファイルを再利用する	89
マッピングファイルを編集する	90
PDX および aXML パッケージをマッピングする	91

変換定義ファイルを作成する	93
変換定義ファイルについて	93
必要なカラムおよびカラム ヘッダ	94
PREFIX、SUFFIX、または REPLACE の操作を使用する	95
ソース パターン フィールドで正規表現を使用する	95
空白フィールドをデフォルト値で置き換える	96
変換テンプレートを作成する	97
異なるタイプのデータを変換する	97
アイテム番号を変換する	98
マルチリストの値を変換する	98
製造元名を変換する	99
AML データを変換する	99
変換定義ファイルを再利用する	100
インポート プリファレンスを設定する	101
プリファレンスについて	101
ペースと検証オプションを設定する	101
ビジネス ルール オプションを設定する	102
デフォルト タイプを設定する	104
デフォルトの自動採番ソースを設定する	105
インポート後の作業	107
インポート セッションのステータスを確認する	107
インポート処理をキャンセルする	107
インポート ログを読み取る	108
トラブルシューティング	108
一般的なエラー メッセージ	108
空白のフィールドをインポートする	110
必須フィールドすべてをマッピングする	110
親/子フィールドを構成する	110
サプライヤ提示をインポートする	110
スマートルールを管理する	111
保留中またはリリース済みのアイテムと価格を更新する	111
ハンドル重複記録のインポート方法	112

データをエクスポートする.....	113
[エクスポート] ウィザード	113
データのエクスポートに関する新機能	113
エクスポートの権限と役割.....	114
エクスポート可能なオブジェクトクラス	114
エクスポートファイルのフォーマット	116
Microsoft Excel ファイルおよびテキストファイルへのエクスポートに関するガイドライン	117
aXML および PDX パッケージについて	118
aXML および PDX パッケージへのエクスポートに関するガイドライン	118
[エクスポート] ウィザードを開始する	119
[エクスポート] ウィザードのステップ	119
フィルタを指定する.....	120
保存されたフィルタを使用する	120
BOM フィルタ	121
カスタム フィルタを作成する	121
デフォルトのカスタム フィルタ	122
添付ファイルのエクスポート時にフィルタを指定する.....	123
PLM オブジェクトをエクスポートする	123
PSR、QCR、およびサプライヤ オブジェクトをエクスポートする.....	123
対象アイテムのレッドライン BOM と AML をエクスポートする	123
オブジェクトの関係テーブルをエクスポートする.....	124
同じアイテムの複数のリビジョンをエクスポートする.....	124
見出しを指定する.....	124
ファイルをダウンロードする.....	124
エクスポートしたファイルを表示する	125
FileLoad を使用する	127
概要	127
FileLoad クライアントを選択する	128
作業を開始する前に.....	129
ファイル サイズとバッチ制限	129
同期全文インデックスを無効にする	129
ウィルスソフトを無効にする	130
必要とされる Agile PLM 権限	130
ローカル ドライブからファイルをアップロードする	130
リモートからファイルをアップロードする	130
カスタム ファイル格納庫の設定	131

プロセスの概要	131
インデックス ファイルを準備する	132
インデックス ファイルの構造	133
オブジェクト タイプ キーワード	135
プライマリおよびセカンダリ キー	135
アイテム リビジョン	136
インデックス ファイルの例	137
複数のファイルを同じファイル フォルダにロードする	138
ファイルマネージャによる INPLACE ファイル検出方法	138
添付ファイルの処理	139
結果を評価する	141
Java クライアントで FileLoad 結果を評価する	141
Web クライアントで FileLoad 結果を評価する	141
ログ ファイル出力の例	142
却下された添付ファイルを修正して再ロードする	142
エラー メッセージ	143

はじめに

Oracle|Agile マニュアルセットには Adobe® Acrobat™ PDF ファイルが含まれます。[Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) には、Oracle|Agile PLM の最新版の PDF ファイルがあります。この Web サイトのマニュアルは、その場で表示することもダウンロードして使用することができます。また、使用しているネットワーク上の Oracle|Agile マニュアル フォルダに Oracle|Agile マニュアル (PDF) ファイルが格納されている場合もあります。詳細は、Agile 管理者にお問い合わせください。

注意 PDF ファイルを表示するには、Adobe Acrobat Reader™ のバージョン 7.0 以降 (無料) を使用する必要があります。このプログラムは、[Adobe 社の Web サイト](http://www.adobe.com) (<http://www.adobe.com>) からダウンロードできます。

[Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) は、Agile Web クライアントと Agile Java クライアントのいずれの場合も、[ヘルプ] > [マニュアル] の順に選択してアクセスできます。さらに疑問点がある場合やサポートが必要な場合は、[サポート](http://www.oracle.com/agile/support.html) (<http://www.oracle.com/agile/support.html>) にお問い合わせください。

注意 Oracle|Agile PLM マニュアルに関する問題について Agile サポートにお問い合わせいただく前に、タイトルページにある完全な部品番号をご準備ください。

Oracle サポート サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800) 446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

Readme

Oracle|Agile PLM の最新情報は、すべて [Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) にある Readme ファイルに記載されています。

Agile トレーニング支援

Agile トレーニングの講義内容詳細については、[Oracle University Web ページ](http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html) (http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html) にアクセスしてください。

ドキュメント内のサンプル コードのアクセシビリティについて

スクリーンリーダーは、ドキュメント内のサンプルコードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーンリーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

インポートの基礎

扱うトピックは次のとおりです。

■ [インポート] ウィザードについて	1
■ データインポートの新機能	3
■ [インポート] ウィザードを使用する前に	3
■ [インポート] ウィザードの使用に必要な権限	4
■ データインポートの推奨手順	4
■ インポート設定の永続化	6
■ 大容量ファイルをインポートするタイミング	6
■ [インポート] ウィザードを開始する	7
■ [インポート] ウィザードの手順	7

[インポート] ウィザードについて

Agile の [インポート] ウィザードは、データを Agile PLM システムへインポートする際に使用するツールです。次のタイプの情報をインポートできます。

Product Collaboration

- アイテム - アイテム マスター
- 製造元
- 製造元部品
- 部品構成表 (BOM) - アイテム マスター
- 承認済み製造元リスト (AML) - アイテム マスター
- 拠点 - アイテム マスター
- 添付ファイル
- 関係 - アイテム
- 製造元
- 製造元部品
- 部品グループ

Product Cost Management

- アイテム - ソーシング プロジェクト
- 部品構成表 (BOM) - ソーシング プロジェクト
- 承認済み製造元リスト (AML) - ソーシング プロジェクト
- 見積履歴、公表価格、および価格ライン
- サプライヤおよびそのライン カード
- サプライヤからの見積依頼回答
- 通貨換算テーブル

Product Service & Improvement

- 製品サービス依頼
- 品質変更依頼
- 顧客

Product Governance & Compliance

- デクラレーション
- サブスタンス
- 含有基準
- 製造元部品の組成と BOS (サブスタンス構成表)
- アイテムの組成と BOS (サブスタンス構成表)
- アイテムのサプライヤと含有基準
- 製造元部品のサプライヤと含有基準
- 部品グループのサプライヤと含有基準

Product Portfolio Management

- プログラム、アクションアイテムおよびディスカッション
- ユーザーとユーザー グループ

データインポートの新機能

今回のリリースの Agile PLM では、インポートコンポーネントに新機能や拡張機能は導入されていません。関連する変更が加えられているのは、このマニュアルの「通貨の値をインポートする」のセクションのみです。通貨は、Agile PLM システム内で、それぞれの記号に従って昇順にリストされるようになりました。20 ページの「[通貨の値をインポートする](#)」を参照してください。次に、リリース 9.2.2.2 で公表された新機能と拡張機能を参考までに示します。

- 検証結果ログファイル - ソースデータを PLM データベースにインポートする前に検証する機能が、リリース 9.2.2.1 で導入されました。「[インポート前にソースデータを検証する](#)」(9 ページの「インポート前にソースデータを検証する」) を参照してください。ただし、import.log ファイルのマッピング定義セクションの変更に関する情報が、リリース 9.2.2.1 のマニュアルには記載されていませんでした。import.log のマッピング定義セクションは、ログファイルを簡潔に保つために削除され、組み込み XML Document Type Definition (DTD) ファイルで置き換えられました。11 ページの「[検証結果ログファイル](#)」を参照してください。
- サービス依頼(PSR)オブジェクトのインポートサポート - インポートモジュールでは、追加の PSR オブジェクトのインポートおよび検証をサポートしています。これらのオブジェクトは、aXML ファイル、および [カバーページ(P.1)]、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[関連PSR]、[関係]、[添付ファイル] を含むテーブルです。52 ページの「[PSR オブジェクトをインポートする](#)」を参照してください。
- 品質変更依頼(QCR)オブジェクトのインポートサポート - インポートモジュールでは、aXML ファイル形式、区切りテキストファイル形式、Excel ファイル形式、および [カバーページ(P.1)]、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[対象アイテム]、[関係]、[添付ファイル] を含むテーブル内の QCR オブジェクトのインポートおよび検証をサポートしています。54 ページの「[品質変更依頼をインポートする](#)」を参照してください。
- Product Quality Management (PQM) オブジェクトのインポート検証サポート - PC オブジェクトと同様に、インポートモジュールでは、PQM オブジェクトデータの PLM データベースへのインポート前の検証をサポートしています。「[サポートされるファイルタイプおよびオブジェクト](#)」(9 ページの「サポートされるファイルタイプ」) を参照してください。

[インポート] ウィザードを使用する前に

[インポート] ウィザードを使用する前に、必要なソフトウェアと権限があることを確認してください。

- データを Agile PLM システムにインポートするには、適切な Agile PLM 権限が必要です。次のセクションの 4 ページの「[\[インポート\] ウィザードの使用に必要な権限](#)」を参照してください。
- PDX パッケージを作成するには、Agile Content Service (ACS)、Agile Web クライアント、または Agile Integration Services を使用します。

注意 PDX パッケージの作成は、aXML ファイルの作成と類似しています。

- PDX パッケージを表示するには、Agile eXpress を使用します。次の Web サイトから Agile eXpress をダウンロードするか、または Agile PDX パッケージを aXML ファイルに展開します (XML ビューアを使用して表示できます)。

<http://www.myagile.com/eservices/express/>

- aXML ファイルを作成するには、Agile Web クライアント、Agile Content Service (ACS)、Agile Integration Services (AIS) を使用するか、またはデクラレーションの [アクション] メニューの [aXML をエクスポート] コマンドを使用します。aXML ファイルは、インターネットエクスプローラなど任意の XML ビューアで表示できます。

- 大容量 PDX パッケージと aXML ファイルをインポートするために、Agile PLM システムに必要なディスク容量があることを確認します。
- テキストファイルからデータをインポートする場合は、ソースデータをチェックし、適切にフォーマットされているかどうかを確認します。この手順は省略しないでください。ここで少し時間を割くことによって、最終的にかなりの時間を節約することができます。20 ページの「[通貨の値をインポートする](#)」を参照してください。

[インポート] ウィザードの使用に必要な権限

Agile データをインポートするには、インポートする Agile オブジェクトの各タイプについて、作成、ディスカバリ、読み取り、および修正の権限が必要です。また、設計変更の作成と修正、または設計変更の検出と読み取りもできる必要があります。変更は、BOM、AML、および公表価格をレッドラインする場合に必要です。さらに、インポート権限も必要です。

権限について質問がある場合は、Agile PLM 管理者に問い合わせるか、『Agile PLM 管理者ガイド』を参照してください。

インポートを開始するには、個人ユーザー プロファイルの役割、[読み取り (ユーザー)] 権限、および [インポート] 権限が必要です。

データ インポートの推奨手順

オブジェクトはどの順序でもインポートできますが、子データをインポートする前に親オブジェクトをインポートするほうが効率的です。

プロダクト コンテンツをインポートする手順

プロダクト コンテンツをインポートする場合は次に推奨されるインポート手順を使用します。

1. 製造元
2. 製造元部品
3. アイテム
4. 部品構成表 (BOM)
5. 承認済み製造元リスト (AML)

注意 aXML または PDX パッケージからデータをインポートする場合は、これらのオブジェクトを 1 つのセッションでインポートできます。

この推奨手順に従ってデータをインポートすると、前のリストの手順 4 および手順 5 を実行するときには親アイテムや製造元、製造元部品がすでに存在し、データも挿入されています。推奨手順に従わない場合は、[インポート] ウィザードによって、インポートデータに参照用のオブジェクトが作成されます。前の手順(アイテムのインポートなど)に戻ることにより、[インポート] ウィザードで作成したオブジェクトにデータをインポートできます。

公表価格をインポートする手順

価格オブジェクトは、アイテムまたは製造元部品、サプライヤ、および顧客を参照します。したがって、これらのオブジェクトは価格の前にインポートする必要があります。

製品サービス依頼をインポートする手順

製品サービス依頼は顧客とサプライヤを参照します。したがって、製品サービス依頼の前に顧客とサプライヤをインポートする必要があります。

1. 顧客
2. サプライヤ
3. 製品サービス依頼

品質変更依頼をインポートする手順

品質変更依頼は顧客とサプライヤを参照します。したがって、品質変更依頼の前に顧客とサプライヤをインポートする必要があります。

1. 顧客
2. サプライヤ
3. 品質変更依頼

サプライヤの製造元提示をインポートする手順

サプライヤの製造元提示で参照される製造元は、提示がインポートされる前に存在していなければなりません。したがって、サプライヤの製造元提示の前に製造元をインポートしておく必要があります。

Product Governance & Compliance オブジェクトをインポートする手順

Product Governance & Compliance データをインポートする場合は、次に推奨されるインポート手順を使用します。

1. サブスタンス
2. 含有基準
3. デクラレーション

任意の手順でインポートできるオブジェクト

次のデータは、任意の手順でインポートすることができます。

- 添付ファイル
- プログラム
- サプライヤとサプライヤの部品分類提示(前述の「サプライヤの製造元提示をインポートする手順」を参照)
- サプライヤからの見積依頼回答
- 通貨換算レート

インポート設定の永続化

Agile Web クライアントで[インポート] ウィザードを使用するとき、その設定はセッションを維持するかぎり保存されます。保存された[インポート] ウィザード設定には、以下が含まれます。

- インポートプリファレンス
- ソースファイル設定(ファイル名やパスは含みません。これらは保存されません)
- インポートするために選択されたコンテンツ
- 選択されたマッピングファイル
- 選択された変換ファイル

ソースファイルの異なるタイプを選択する場合、[インポート] ウィザードは選択したコンテンツ、マッピングファイル、および変換ファイルをリセットします。Agile Web クライアントをログアウトしてから再びログインする場合、[インポート] ウィザードはデフォルト設定にリセットされます。

大容量ファイルをインポートするタイミング

Agile インポートサーバでサポートされている aXML ファイルおよび PDX パッケージには、無数のオブジェクトが含まれている可能性があります。たとえば、PDX パッケージから数百のアイテムをインポートすることができる、また各アイテムに数百の BOM コンポーネントが含まれていることがあります。このような大容量のソースファイルの場合は、インポートセッションを実行するタイミングが重要になります。

大容量のデータを1回のインポートセッションでインポートする場合、夜間や週末など、システムの使用率が低い就業時間外に行う必要があります。

大容量と見なされるデータの大きさは、使用している Agile PLM システムやデータベースのサイズによって異なります。それらの状況を元に判断してください。大容量のデータをインポートする場合は就業時間外に行います。

インポートセッションが完了したら、ログファイルをブラウザで表示したり、それをファイルに保存したりすることができます。

注意 結果をより早く取得するには、大容量のファイルをインポートする前にログ変換プリファレンスのチェックを解除しておきます。詳細は、101 ページの「[インポートプリファレンスを設定する](#)」を参照してください。

[インポート] ウィザードを開始する

[インポート] ウィザードを使用すると、データを Agile PLM システムに簡単にインポートすることができます。

- Java クライアントまたは Web クライアントで [インポート] ウィザードを開始するには、[ツール] > [インポート] の順に選択します。
- 見積依頼回答、またはソーシングプロジェクトに対するアイテム、BOM、および AML をインポートする場合は、見積依頼またはソーシングプロジェクトから [インポート] ウィザードを開始することができます。詳細は、「サプライヤおよびシステムデータをインポートする」および「ソーシングプロジェクトヘデータをインポートする」を参照してください。
- レベルテンプレートを使用してアイテムをインポートするには、[アイテム] > [アクション] > [Microsoft Excel] > [Excel からインポート] の順に選択します。

注意 [インポート] ウィザードは、パッケージの [添付ファイル] タブの [インポート] ボタンをクリックして開始することもできます。詳細は、「Agile パッケージから添付ファイルをインポートする」を参照してください。

[インポート] ウィザードの手順

データを Agile PLM システムへインポートする場合、[インポート] ウィザードでは次の手順を使用します。

- インポートソース - インポートファイルとファイルタイプを指定します。
- インポートするコンテンツの選択 - インポートするデータのタイプを指定します。
- 設計変更とマッピングファイルの選択 - アイテムまたは価格をレッドラインモードでインポートする場合は、インポートセッションに対する変更を指定します。また、インポートデータのフィールドを Agile フィールドにどのようにマップするかも指定します。
- 変換定義ファイルの選択 - インポート先の Agile PLM システムに合わせてインポートデータを修正する方法を指定します。修正方法には、フィールドの置換や接頭辞または接尾辞の追加があります。これはオプションの手順です。
- 設定を確認してインポートを開始 - 選択した内容を確認し、インポートプロセスを開始します。

インポート前にソース データを検証する

扱うトピックは次のとおりです。

■ 概要	9
■ データ検証の手順と例	13

概要

インポートの検証を使用すると、ソースデータを PLM データベースにインポートする前に、Agile PLM サーバルールへの準拠を確認できます。この機能を起動すると、検証プロセス時に発生したエラーを表示するレポートが生成されます。このレポートを使用して、必要な修正を加えた後、データを PLM データベースにインポートできます。検証の起動では、データのインポートは実施されません。データがサーバルールに準拠しているかどうか確認されるのみです。

サポートされるファイルタイプ

ソースインポート検証は、aXML、PDX、CSV(区切りテキストファイル)、および Excel ソースファイルに適用可能です。CSV と Excel 形式については、インポートと同様にマッピング定義を提供する必要があります。aXML と PDX については、デフォルトのマッピング設定が用意されているため、マッピング定義は必要ありません。

検証は、次のグループ内のオブジェクトに属するデータフィールドに対して実行されます。

- パースと検証オプション
- ビジネスルールオプション
- デフォルトタイプ
- 自動採番ソース

サポートしているテーブル

検証は、次のクラスおよびテーブル内のデータに対して実行されます。

- アイテム
 - タイトルブロック
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 部品構成表 (BOM)
 - 承認済み製造元部品

- 関係
- 添付ファイル
- 製造元
 - カバー ページ
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 関係
 - 添付ファイル
- 製造元部品
 - カバー ページ
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 関係
 - 添付ファイル
- 部品グループ
 - カバー ページ
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 関係
 - 添付ファイル
- 製品サービス依頼 (PSR)
 - 対象アイテム
 - カバー ページ
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 関連 PSR
 - 関係
 - 添付ファイル
- 品質変更依頼 (QCR)
 - 対象アイテム
 - カバー ページ
 - ユーザー定義 1
 - ユーザー定義 2
 - 関係
 - 添付ファイル

Agile SDK および Agile Integration Services の検証サポート

Agile Integration Services (AIS) および Agile Software Developer Kit (SDK) も、ソース データ検証をサポートしています。

- AIS - ソース インポート データを検証するために、importer.ValidateData という新規操作を提供します。
- SDK - インポートと検証を実行するために、IImportManager.importData() および IImportManager.validateData() という 2 つのインターフェースを提供します。

検証結果ログ ファイル

次の検証後情報を提供するために、XML Document Type Definition (DTD) ファイルが import.log に組み込まれます。

- 重大度に基づいて分類およびソートされます。
 1. コメント
 2. 警告
 3. エラー
 4. 致命的
- 検証プロセス時に発生した警告、エラー、および致命的エラーの数を示す要約検証結果。

検証ログ ファイル出力の例

```
<?xml version='1.0' encoding='UTF-8'?>
<!DOCTYPE import-log [
  <!ELEMENT import-log
    (begin-import, (note|warning|error|fatal)*, validate-summary?, record
    -summary*, end-import)>
  <!ELEMENT begin-import (#PCDATA)>
  <!ATTLIST begin-import timestamp CDATA #REQUIRED>
  <!ELEMENT note (#PCDATA)>
  <!ATTLIST note
    context CDATA      #IMPLIED
    line CDATA        #IMPLIED
    type CDATA        #IMPLIED
  >
  <!ELEMENT warning (#PCDATA)>
  <!ATTLIST warning
    context CDATA      #IMPLIED
    line CDATA        #IMPLIED
    type CDATA        #IMPLIED
  >
  <!ELEMENT error (#PCDATA)>
  <!ATTLIST error
    context CDATA      #IMPLIED
    line CDATA        #IMPLIED
    type CDATA        #IMPLIED
  >
  <!ELEMENT fatal (#PCDATA)>
  <!ATTLIST fatal
    context CDATA      #IMPLIED
    line CDATA        #IMPLIED
    type CDATA        #IMPLIED
  >
]
```

```
>
<!ELEMENT validate-summary EMPTY>
<!ATTLIST validate-summary
      warning NMTOKEN #REQUIRED
      error NMTOKEN #REQUIRED
      fatal CDATA #REQUIRED
>
<!ELEMENT record-summary EMPTY>
<!ATTLIST record-summary
      accepted NMTOKEN #REQUIRED
      ignored NMTOKEN #REQUIRED
      import-type CDATA #REQUIRED
      rejected NMTOKEN #REQUIRED
>
<!ELEMENT end-import (#PCDATA)>
<!ATTLIST end-import
      fatal NMTOKEN #REQUIRED
      timestamp CDATA #REQUIRED
>]>
<import-log>
<begin-import timestamp="27/04/2007 07:45:49 AM BST">検証を開始します。
</begin-import>
<note line="6">¥プロパティ &apos;タイトル ブロック.番号&apos; の値¥は大文字小文字検証の間に変更されました; 値 &apos;a2&apos; は &apos;A2&apos; になりました。</note>
<note line="6">¥プロパティ &apos;BOM.アイテム番号&apos; の値¥は大文字小文字検証の間に変更されました; 値 &apos;a2&apos; は &apos;A2&apos; になりました。</note>
<error
type="com.agile.imp.pc.adapter.ImportProductContentAPIException"
line="7" context="Part - Number:A2; BOM:Item Number:A21">アイテム
&apos;A2&apos; のBOMまたはAML、あるいはその両方を処理できませんでした。BOM、
AML、添付ファイルは却下されます：
参照指示/数量の不一致： 参照指示の数は 10 で数量は 5 です。</error>
<error
type="com.agile.imp.pc.adapter.ImportProductContentAPIException"
line="5" context="Part - Number:A12; BOM:Item Number:A123">アイテム
&apos;A12&apos; のBOMまたはAML、あるいはその両方を処理できませんでした。BOM、
AML、添付ファイルは却下されます：
参照指示/数量の不一致： 参照指示の数は 8 で数量は 5 です。</error>
<error
type="com.agile.imp.pc.adapter.ImportProductContentAPIException"
line="4" context="Part - Number:A1; BOM:Item Number:A12">アイテム
&apos;A1&apos; のBOMまたはAML、あるいはその両方を処理できませんでした。BOM、
AML、添付ファイルは却下されます：
参照指示/数量の不一致： 参照指示の数は 7 で数量は 3 です。</error>
<error
type="com.agile.imp.pc.adapter.ImportProductContentAPIException"
line="3" context="Part - Number:A0; BOM:Item Number:A1">アイテム
&apos;A0&apos; のBOMまたはAML、あるいはその両方を処理できませんでした。BOM、
AML、添付ファイルは却下されます：
参照指示/数量の不一致： 参照指示の数は 6 で数量は 2 です。</error>
<validate-summary warning="0" error="4" fatal="0"/>
<end-import timestamp="27/04/2007 07:45:50 AM BST" fatal="false">
検証が完了しました。</end-import>
</import-log>
```

データ検証の手順と例

[インポート] ウィザードを起動すると、[インポート ソース] ページに [インポート] ウィザードが開きます。ソースデータを検証するには、[プリファレンス] ダイアログを使用してオプショングループを選択する必要があります。次の手順と例で、[プリファレンス] ダイアログ、およびソース aXML ファイルの検証方法について説明します。

各グループのパラメータおよび設定を表示するには

1. Agile PLM で、[ツール]>[インポート] の順に選択します。[インポート ソース] ページに [インポート] ウィザードが開きます。
2. [プリファレンス] をクリックします。[パースと検証オプション] グループに [プリファレンスの設定を指定] ダイアログが開き、このグループに設定できるデータ要素が表示されます。
3. ドロップダウンリストを使用して、[ビジネスルール オプション]、[デフォルト タイプ] および [自動採番 ソース] に対するデータ要素を表示し、設定できます。

データ検証の例

次の手順は、ソース aXML ファイルが BOM および AML に準拠しているかどうかを検証する例です。

ソース aXML データ ファイルを検証するには

1. Agile PLM で、[ツール]>[インポート] の順に選択します。[インポート ソース] ページに [インポート] ウィザードが開きます。
2. [参照] を使用してインポート ソースを選択し、[ファイル タイプ] に [Agile XML (aXML) パッケージ] を選択します。
3. [プリファレンス] をクリックし、[ビジネスルール オプション] を選択します。選択可能な他のオプションは、[パースと検証オプション]、[デフォルト タイプ]、および [自動採番 ソース] です。
4. [ビジネスルール オプション] ページで、[変更 モード] を [新規作成] に設定します (レッドライン モードにも適用可能です)。
5. [次へ] をクリックします。[インポートするコンテンツを選択] ページが開きます。
6. [アイテム]>[部品構成表 (BOM)]>[承認済み製造元リスト (AML)] の順に選択します。
7. [次へ] をクリックします。[設計変更とマッピングの選択] ページが開きます。
8. [検証] をクリックします。検証結果が画面に表示されます。

ソース データを準備および選択する

扱うトピックは次のとおりです。

■ サポートされているファイルフォーマット	15
■ フィールド Agile PLM について	16
■ データ値に対してサポートされているフォーマット	17
■ 通貨の値をインポートする	20
■ インポートされた通貨値の設定	22
■ 質量をインポートする	23
■ 地理的な場所をインポートする	23
■ 動的リストに値をインポートする	23
■ カスケードリストをインポートする	24
■ BOM 参照指示を使用する	24
■ Excel ファイルおよび区切りテキスト ファイルのガイドライン	26
■ Microsoft Excel ファイルからデータをインポートする	29
■ 区切りテキスト ファイルからデータをインポートする	32
■ PDX パッケージおよび aXML ファイルからデータをインポートする	33
■ テンプレートを使用してデータをインポートする	37
■ 関係テーブルにオブジェクトをインポートする	42

サポートされているファイル フォーマット

[インポート] ウィザードを使用すると、以下のデータ フォーマットでデータをインポートすることができます。

フォーマット	説明
区切り文字テキスト ファイル	標準的なフラットテキスト ファイル。データの各フィールドがカンマやタブなどの特殊文字で区切られます。
Excel ワークブック	マイクロソフト Excel のワークブック ファイル。[インポート] ウィザードは、Microsoft Excel 2000、2002 および 2003 で作成したファイルをサポートします。
Product Data eXchange (PDX) パッケージ	XML (eXtensible Markup Language) 技術に基づいた、製品データの業界標準フォーマット。
Agile XML (aXML) ファイル	Agile が独自に開発した XML 形式。PDX ではサポートされないデータ (デクラレーション、サブスタンス、価格、サプライヤなど) が含まれます。

フィールド Agile PLM について

ソース ファイルから Agile PLM システムへデータをインポートする前に、データをインポートする各フィールドの要件を理解しておく必要があります。いくつかのフィールドは必須であり、このようなフィールドは[インポート] ウィザードでマップする必要があります。フィールドにはデータ タイプが定義されています。これは、データをどのようにフォーマットするか、および最大長をどのくらいにするかを決定するもので、Agile PLM システムによってインポート時に検証されます。

Agile のそれぞれのオブジェクトには複数のフィールドが定義されています。これらのフィールドは、オブジェクトのクラスまたはサブクラスに対して定義されている属性のインスタンスです。Agile には多数のクラスとサブクラスがあり、Agile 管理者は、拠点に適用可能な追加のサブクラスを使用してシステムをカスタマイズできます。

Agile クラス レポートを印刷する

データをインポートする前に、Web クライアントから Agile クラス レポートを印刷します。レポートを読み、Agile データ モデルに慣れておいてください。ソース データが、レポートで指定されているデータ要件に準拠していることを確認してください。

Web クライアントから Agile クラス レポートを実行するには

1. ナビゲーション ウィンドウで[レポート]をクリックします。
2. [管理者レポート]>[Agile クラス レポート]の順に選択します。
3. [実行]をクリックします。
4. レポートの実行に使用するパラメータを指定します。[完了]をクリックします。数秒後に、[ファイルのダウンロード] ウィンドウでファイルを保存または開くよう要求されます。
5. レポートをコンピュータに保存します。

Agile クラス レポートはカンマ区切りのテキスト ファイルです。このレポートには、各クラスの各テーブルで使用できる属性が記載されています。また、[インポート] ウィザードに対してフィールドが必須かどうかも示しています。[インポート] ウィザードでフィールドが必須の場合は、ソース データをターゲット フィールドにマップする必要があります。それ以外の場合は、オブジェクトをインポートできません。

データ タイプ

読み取り / 書き込みの各 Agile PLM フィールドには、次のいずれかのデータ タイプが定義されています。

データ タイプ	説明
テキスト	文字列の値
マルチテキスト	テキスト (複数行にわたることも可)
日付	日付の値
数値	小数点第 2 位に丸めた数値
通貨	数のデータ タイプに類似していますが、デフォルトで小数点第 4 位まで表示され、単位は特定の通貨になります。
リスト	有効値のリストから選択された文字列の値
マルチリスト	有効値のリストから選択された 1 つ以上の文字列の値 (カンマ区切りのフォーマット)

データ タイプ	説明
単位 (UOM)	数量の測定。値は標準単位(グラム、オンスなど)で乗じた数で表現されます。

フィールドの最大長の値

Agile PLM の多くのフィールドには最大長が定義されています。値がフィールドの最大長を超えた場合は、不正な値となりインポートできなくなります。[インポート] ウィザードにはプリファレンスが設定されており、これによって、長さの検証で不当とみなされた値を処理することができます。これらの値は却下するか、またはインポートできるように切り捨てるかのいずれかを選択できます。詳細は、101 ページの「[バースと検証オプションを設定する](#)」を参照してください。

すべてのテキストフィールドには、最大長が定義されています。テキストフィールドの中には、数文字に限定されているものもあります。また、[部品クラス]>[BOM]>[BOM メモ]などのフィールドはかなり長くすることができます。

日付フィールドには最大長が定義されていませんが、日付の値は必ず、Agile PLM システムでサポートされている日付フォーマットとなるようにします。詳細は、17 ページの「[データ値に対してサポートされているフォーマット](#)」を参照してください。

親フィールドと子フィールド

いくつかの読み取り専用フィールドには、他の親フィールドと子の関係にあるものがあります。子フィールドには、親フィールドの値が反映されます。子フィールドの例には、「BOM.Item List02」や「BOM.Item Text01」などの BOM テーブルの属性があります。これらの親フィールドは [ユーザー定義 1] にあります。

Agile PLM 管理者は、すべての子フィールドの設定が親フィールドと同じになるようにします。異なる場合には、データのインポート時に問題が発生することがあります。

データ値に対してサポートされているフォーマット

[インポート] ウィザードでは、ユーザー プリファレンスやロケールなどの異なる基準に基づいた、様々な日付フォーマットがサポートされています。

注意 日付の上限は今日から 150 年後の日付です。この値よりも後の日付は無効となり、インポートできません。

推奨日付フォーマットと推奨タイム ゾーンを設定する

Agile のユーザーは推奨日付フォーマットを選択することができます。

Agile アカウントに対して日付フォーマットのプリファレンスを変更するには

1. いずれかの Agile クライアントを使用して、ユーザー プリファレンスを設定します。
 - Agile Web クライアントでは、[設定]>[ユーザー プロファイル]>[プリファレンス]>[編集] の順にクリックします。
 - Agile Java クライアントでは、[設定]>[現在のユーザー]>[プリファレンス] の順にクリックします。
2. [推奨日付フォーマット] フィールドで希望する日付フォーマットを選択します。

3. [タイム ゾーン] フィールドで GMT タイム ゾーンを選択します。
4. [保存] をクリックします。

サポートされている日付フォーマット

[インポート] ウィザードでは、java.text.SimpleDateFormat クラスで使用できる日付と時刻のフォーマットのすべての組合せと、さらに追加のフォーマットをサポートしています。DateFormatには、ロケールに基づいた様々な日付と時刻のフォーマットスタイルが用意されています。次の表は、U.S. ロケールで使用できる日付フォーマットを示しています。

日付フォーマット	例
MMM-dd-yyyy HH:mm:ss	Jul-10-2001 14:08:35
MMM-dd-yyyy HH:mm	Jul-10-2001 14:08
MMM-dd-yyyy hh:mm:ss a	Jul-10-2001 02:08:35 PM
MMM-dd-yyyy hh:mm a	Jul-10-2001 02:08 PM
MMM-dd-yyyy	Jul-10-2001
dd-MMM-yyyy HH:mm:ss	10-Jul-2001 14:08:35
dd-MMM-yyyy HH:mm	10-Jul-2001 14:08
dd-MMM-yyyy hh:mm:ss a	10-Jul-2001 02:08:35 PM
dd-MMM-yyyy hh:mm a	10-Jul-2001 02:08 PM
dd-MMM-yyyy	10-Jul-2001
EEEE, MMMM d, yyyy	Thursday, June 25, 1998
EEEE, MMMM d, yyyy h:mm a	Thursday, June 25, 1998 1:32 PM
EEEE, MMMM d, yyyy h:mm:ss a	Thursday, June 25, 1998 1:32:19 PM
EEEE, MMMM d, yyyy h:mm:ss a z	Thursday, June 25, 1998 1:32:19 PM GMT-05:00
MMMM d, yyyy	June 25, 1998
MMMM d, yyyy h:mm a	June 25, 1998 1:32 PM
MMMM d, yyyy h:mm:ss a	June 25, 1998 1:32:19 PM
MMMM d, yyyy h:mm:ss a z	June 25, 1998 1:32:19 PM GMT-05:00
MM d, yyyy	Jun 25, 1998
MM d, yyyy h:mm a	Jun 25, 1998 1:32 PM
MM d, yyyy h:mm:ss a	Jun 25, 1998 1:32:19 PM
MM d, yyyy h:mm:ss a z	Jun 25, 1998 1:32:19 PM GMT-05:00
M/d/yy	6/25/98
M/d/yy h:mm a	6/25/98 1:32 PM
M/d/yy h:mm:ss a	6/25/98 1:32:19 PM
M/d/yy h:mm:ss a z	6/25/98 1:32:19 PM GMT-05:00

各日付フォーマットは、次の時刻パターンを使用して指定されています。

y = 年
 M = 月
 d = 日
 H = military time 形式の時間 (24 時間表記)
 h = AM/PM 形式の時間 (1~12)
 m = 分
 s = 秒
 E = 曜日
 a = AM/PM マーク
 z = タイム ゾーン
 ' = テキストのエスケープ
 " = 引用符

時刻パターンの「M」などの各文字の数により、形式が決定されます。たとえば、「M」の文字が3つある場合、月は数字ではなくテキストで表されます。「M」の数が1つまたは2つの場合には、月は数字で表されます。

Java 日付フォーマットと時刻パターン構文の詳細は、次の URL の Sun 社のマニュアルで `SimpleDateFormat` および `DateFormat` クラスを参照してください。

<http://www.javasoft.com/j2se/1.3/docs/api/index.html>

タイム ゾーンを指定する

日付の値では、GMT のタイム ゾーンを指定できます。日付の値でタイム ゾーンを省略すると、ユーザーのタイム ゾーンプリファレンスが使用されます。タイム ゾーンは次の形式で入力する必要があります。

GMT Sign hh:mm

ここで、

GMT = グリニッジ標準時

Sign = + または -

h = AM/PM 形式の時間 (1 ~ 12)

m = 分

たとえば「GMT-05:00」および「GMT+02:00」は有効なタイム ゾーンです。

注意 3 文字のコード (PST や PDT など) を使用してタイム ゾーンを指定しないでください。3 文字のタイム ゾーンコードは複数のタイム ゾーンに対して使用されるものもあるため、信頼性に欠けます。そのために、Agile PLM サーバが3 文字のタイム ゾーンコードを誤ったタイム ゾーンに解釈するおそれがあります。

aXML および PDX パッケージの日付フォーマット

aXML および PDX パッケージに対しては、[インポート] ウィザードで ISO ストリングの日付フォーマットの簡易バージョン `yyyy/MM/ddTHH:mm:ssZ` をサポートしています。ただし、T と Z の文字は必須です。

通貨の値をインポートする

価格ラインおよびサプライヤのオブジェクトでは、通貨フィールドに値をインポートできます。通貨の値をインポートできるのは、3 文字の ISO 4217 通貨コードとして入力されているか、通貨名が完全な名前の場合です。たとえば、「USD」と「米ドル」はいずれもインポート可能な有効通貨です。「米ドル(USD)」はインポートできません。

Agile では様々な通貨をサポートしています。使用できる通貨のリストは、Agile PLM システムのインストール時に設定します。ISO 4217 通貨コードの詳細は次の Web サイトを参照してください。

<http://www.iso.org/iso/en/prods-services/popstds/currencycodeslist.html>

- | | | |
|---------------------------|-----------------------|---------------------|
| ▫ ADP - アンドラ・ペセタ | ▫ CRC - コスタリカ・コロン | ▫ FRF - フランス・フラン |
| ▫ AED - UAE ディルハム | ▫ CUP - キューバ・ペソ | ▫ GBP - イギリス・ポンド |
| ▫ ALL - アルバニア・レク | ▫ CVE - カーボベルデ・エスクード | ▫ GEL - グルジア・ラリ |
| ▫ AMD - アルメニア・ドラム | ▫ CYP - キプロス・ポンド | ▫ GHC - ガーナ・セディ |
| ▫ ANG - オランダ・アンティル・ギルダー | ▫ CZK - チェコ・コルナ | ▫ GIP - ジブラルタル・ポンド |
| ▫ AON - ニュークワンザ | ▫ DEM - ドイツ・マルク | ▫ GMD - ガンビア・ダラシ |
| ▫ AOR - クワンザリアハスタド | ▫ DJF - ジブチ・ Franc | ▫ GNF - ギニア・フラン |
| ▫ ARP - アルゼンチン・ペソ | ▫ DKK - デンマーク・クローネ | ▫ GRD - ギリシャ・ドラクマ |
| ▫ ATS - オーストリア・シリング | ▫ DOP - ドミニカ・ペソ | ▫ GTQ - グアテマラ・ケツアル |
| ▫ AUD - オーストラリア・ドル | ▫ DZD - アルジェリア・ディナール | ▫ GYD - ガイアナ・ドル |
| ▫ AWF - アルバ・フローリン | ▫ ECS - エクアドル・スクレ | ▫ HKD - 香港ドル |
| ▫ AWG - アルバ・ギルダー | ▫ EEK - エストニア・クローン | ▫ HNL - ホンジュラス・レンピラ |
| ▫ AZM - アゼルバイジャン・マナト | ▫ EGP - エジプト・ポンド | ▫ HRK - クロアチア・クーナ |
| ▫ BAK - ボスニア・ヘルツェゴビナ兌換マルク | ▫ ERN - エリトリア・ナクファ | ▫ GTG - ハイチ・グールド |
| ▫ BBD - バルバドス・ドル | ▫ ESP - スペイン・ペセータ | ▫ HUF - ハンガリー・フォリント |
| ▫ BDT - バングラデッシュ・タカ | ▫ ETB - エチオピア・ブル | ▫ IDR - インドネシア・ルピア |
| ▫ BEF - ベルギー・フラン | ▫ EUR - ユーロ | ▫ IEP - アイルランド・ポンド |
| ▫ BGL - ブルガリア・レフ | ▫ FIM - フィンランド・マルカ | ▫ ISL - イスラエル・シュケル |
| | ▫ FJD - フィジー・ドル | ▫ INR - インド・ルピー |
| | ▫ FKP - フォークランド諸島・ポンド | ▫ IQD - イラク・ディナール |
| | | ▫ IRR - イラン・リアル |

- ISK - アイスランド・クロナ
- ITL - イタリア・リラ
- JMD - ジャマイカ・ドル
- JOD - ヨルダン・ディナール
- JPY - 日本円
- KES - ケニア・シリング
- KGS - キルギスタン・ソム
- KHR - カンボジア・リエル
- KMF - コモロ・フラン
- KPW - 北朝鮮ウォン
- KRW - 韓国ウォン
- KWD - クウェート・ディナール
- KYD - ケイマン諸島ドル
- KZT - カザフスタン・テンге
- LAK - ラオス・キップ
- LPB - レバノン・ポンド
- LKR - スリランカ・ルピー
- LRD - リベリア・ドル
- LSL - レソト・ロティ
- LTL - リトアニア・リタス
- LUF - ルクセンブルク・フラン
- LVL - ラトビア・ラト
- LYD - リビア・ディナール
- MAD - モロッコ・ディルハム
- MDL - モルドバ・レイ
- MGF - マダガスカル・フラン
- MKD - マケドニア・ディナール
- MMK - ミャンマー・チャット
- MNT - モンゴル・トゥグルグ
- MOP - マカオ・パタカ
- MRO - モーリタニア・ウギア
- MTL - マルタ・リラ
- MUR - モーリシャス・ルピー
- MVR - モルジブ・ルフィヤ
- MWK - マラウイ・クワチャ
- MXP - メキシコ・ヌエボペソ
- MYR - マレーシア・リンギット
- MZM - モザンビーク・メティカル
- NAD - ナミビア・ドル
- NGN - ナイジェリア・ナaira
- NIO - ニカラグア・コルドバ・オロ
- NLG - オランダ・ギルダー
- NOK - ノルウェー・クローネ
- NPR - ネパール・ルピー
- NZD - ニュージーランド・ドル
- OMR - オマーン・リヤール
- PAB - パナマ・バルボア
- PEN - ペルー・ヌエボソル
- PGK - パプアニューギニア・キナ
- PHP - フィリピン・ペソ
- PKR - パキスタン・ルピー
- PLZ - ポーランド・ズロチ
- PTE - ポルトガル・エスクード
- PYG - パラグアイ・グアラニー
- QAR - カタールリアル
- ROL - ルーマニア・レイ
- RUR - ロシア・ルーブル
- RWF - ルワンダ・フラン
- SAR - サウジアル
- SBD - ソロモン諸島・ドル
- SCR - セイシェル・ルピー
- SDD - スーダン・ディナール
- SEK - スエーデン・クローネ
- SGD - シンガポール・ドル
- SHP - セントヘレナ・ポンド
- SIT - スロベニア・トラール
- SKK - スロバキア・コルナ
- SLL - シエラレオーネ・レオン
- SOS - ソマリア・シリング
- SRG - スリナム・ギルダー
- STD - サントメ・プリンシペ・ドプラ
- SVC - エルサルバドル・コロン
- SYP - シリア・ポンド
- SZL - スワジランド・リラ・シグニ
- BHT - タイ・バーツ
- TJR - タジキスタン・ルーブル
- TMM - トルクメニスタン・マナト
- TND - チュニジア・ディナール
- TOP - トンガ・パアンガ
- TLR - トルコ・リラ

- TTD - トリニダード・トバゴ・ドル
- VEB - ベネズエラ・ボリバル
- YER - イエメン・リアル
- TWD - 新台湾ドル
- VND - ベトナム・ドン
- YUN - 新ユーゴスラビア・ディナール
- TZS - タンザニア・シリング
- VUV - バヌアツ・バツ
- ZAR - 南アフリカ・ランド
- UGX - ウガンダ・シリング
- WST - サモア・タラ
- ZMK - ザンビア・クワチャ
- USD - 米ドル
- XAF - 中央アフリカ共和国 CFA フラン BEAC
- ZWD - ジンバブエ・ドル
- UYU - ウルグアイ・ペソ
- XCD - 東カリブ諸国・ドル
- UZS - ウズベキスタン・ソム
- XPF - CFP フラン (フランス領)

インポートされた通貨値の設定

通貨のデータタイプは複合データタイプとして、数値の値と通貨コード(米ドルを表す「USD」など)が含まれています。インポートでは、通貨値と通貨の両方をサポートしています。ソースファイルに通貨が指定されていない場合は、ユーザーの推奨通貨が選択されます。ソースファイルが区切りテキストファイルまたはExcelファイルの場合は、通貨値と通貨コードを USD:100 の形式で組み合わせたり、2 つのフィールドに分割できます。[インポート] ウィザードでは数値以外の通貨値が却下されます。他のソースファイルの処理は、次のとおりです。

- aXML ファイルの場合、[インポート] ウィザードは、通貨コードをソースファイルからロードします。
- PDX パッケージの場合、[インポート] ウィザードは、ユーザー指定の推奨通貨をロードします。これは、ソースの PDX ファイルには通貨コードがないためです。

通貨設定を変更または表示するには

- Web クライアントでは、[設定] > [ユーザー プロファイル] > [プリファレンス] > [編集] の順にクリックします。
 - Java クライアントでは、[設定] > [現在のユーザー] > [プリファレンス] の順にクリックします。
- 適用可能な場合は、変更内容を保存してください。

質量をインポートする

一部の Product Governance & Compliance オブジェクト(アイテムを含む)には、[質量] フィールドがあります。[質量] フィールドには数値と単位(グラム、キログラム、オンス、ポンドなど)があります。[インポート] ウィザードでは、質量の数値と単位の両方をインポートすることができます。[質量] の値をインポートする場合、[質量] と [質量計測] フィールドの両方をマップしてください。

注意 [質量] フィールドのデフォルト標準単位はグラムですが、Agile PLM 管理者は別の標準単位を選択することもできます。

地理的な場所をインポートする

顧客、サプライヤ、および製造元のすべてのオブジェクトには、国と地域のフィールドが定義されています。ソースデータに、正しい国名と地域名を指定する必要があります。指定していない場合は、値がインポートされません。

有効な国名と地域名を Agile Java クライアントで表示するには

1. [管理] タブをクリックします。
2. [システム設定] > [Product Cost Management] > [出荷先の場所] の順に選択します。
3. [新規作成] ボタンをクリックします。
4. [大陸] リストをクリックし、大陸を選択します。
5. [国] リストをクリックし、国を選択します。
6. [都道府県] リストをクリックし、地域を選択します。

動的リストに値をインポートする

[インポート] ウィザードは動的リストを使用するリストフィールドに対して、値のインポートをサポートします。動的リストには、システムに追加されたデータに基づき、ランタイムに更新された値が含まれています。アイテム、変更、ユーザー、サプライヤのリストは、動的リストの例です。動的リストには数千の値のオブジェクトが含まれるため、それらの値に対して値を列挙できません。

[インポート] ウィザードは、サーバにデータを送信する前に、動的リストが大文字または小文字のどちらの値を要求するかを確認できません。結果として、間違った大文字/小文字のリスト値は却下されます。

注意 Agile 9.0 SP3 以前では、サプライヤリストは静的な可算リストでした。現在は、動的リストになっています。Web クライアントは supplierName - supplierNumber の形式で [サプライヤ] フィールドを表示しますが、サプライヤ番号または supplierName - supplierNumber の混合形式でこのフィールドにデータをインポートすることができます。

カスケード リストをインポートする

Agile PLM リスト フィールドは、カスケード リストとして設定することができます。カスケード リストには複数の階層 レベルで値を表示されるため、階層をドリル ダウンして特定の値を検索できます。

カスケード リストの フィールドに値をインポートするには、正しい区切り 文字で各 レベルを区切る必要があります。[カスケード 区切り 文字] の プリファレンス は、カスケード リスト 値を区切るために使われる 文字を指定します。[カスケード 区切り 文字] プリファレンス の 設定について は、101 ページの「[ペースと検証オプションを設定する](#)」を 参照してください。[カスケード 区切り 文字] プリファレンス の デフォルト 値は 垂直バー (|) です。

以下の例の ソース データ では、[ユーザー 定義 1] フィールド (この場合は [地域の連絡先] という 名前) の カスケード リスト の 値が 含ま れて おり、3 つ の レベルで 構成さ れて い ます。

部品番号	地域の連絡先
P10011	Central Chicago Jeff Whaley
P10012	Western Los Angeles Jason Wong
P10013	Southern Atlanta Hsing-Hua Zhang
P10014	Northern Boston Leslie Ickes

BOM 参照指示を使用する

参照指示は、コンポーネントを指すラベル システムとしてコンピュータ 産業で広く 使用されています。会社で 参照指示を使用している場合は、[BOM] > [参照指示] フィールドを使用して、参照指示の割り当ておよび編集を行なうことができます。

参照指示は以下のいずれかの方法で指定します。

- カンマ (,)、セミコロン (;)、または 垂直バー (|) を 使用して 区切る。[インポート] ウィザード の デフォルト では、参照指示の 区切り 文字として カンマ を 使用します。区切り 文字を 変更するには、102 ページの「[ビジネス ルール オプションを設定する](#)」を 参照してください。
- 個別に 指定 (R1,R2,R3) するか、範囲指定 文字を使用して 壓縮 (R1-3 または R1-R3) して 指定する。[インポート] ウィザード の デフォルト では、参照指示の 範囲指定 文字として ハイフン を 使用します。範囲指定 文字を 変更するには、102 ページの「[ビジネス ルール オプションを設定する](#)」を 参照してください。
- 大文字、小文字、または 混合 (Agile PLM 管理者が 指定する フォーマット に 変換されます)。
- 参照指示が 多すぎて 1 つのセルに 収まらない 場合は、連続する 行 を 使用します。その 行 に ある他のセルは すべて 空白のまま とします。

参照指示の 数が 少ない 場合は 1 つずつ 入力する (たとえば R1,R2,R3) こ とが 可能です。

異なる 文字で 始まる 参照指示の グループを 追加するには、ペース 文字 (通常は カンマ) で 各 グループを 区切ります。たとえば、A1、A2、A3、B4、B5、B6、B7、C8、C9、C10 という 10 個の 指示を 入力する 場合は 以下のよう に 入力します。

A1-3,B4-7,C8-10

Agile データベース の 設定 によつては、Agile Web クライアントで 自動的に 参照指示が 壓縮される 場合 が あります。 「1,2,3,4,5」 と 入力して Tab キーを 押すと、[参照指示] フィールド には 「1-5」 と 表示されます。

参照指示を展開できるよう Agile データベースが設定されている場合、ハイフン(またはその他の範囲指定文字)で結合された参照指示は、Agile データベースへのインポート時に展開されます。たとえば、「R1-5」は「R1,R2,R3,R4,R5」になります。

文字で終わる参照指示(たとえば R1a,R2a,R3a)は個別に入力する必要があります。Agile Import による参照指示の処理の詳細は、25 ページの「[参照指示の範囲](#)」を参照してください。

参照指示の範囲

以下の規則により、[インポート] ウィザードで参照指示の範囲をどのように処理するかが決定されます。参照指示が展開されない場合、[インポート] ウィザードでは範囲を 1 つの参照指示として処理します。

- 範囲を指定された 2 つの参照指示を展開するには、数字で終わる必要があります。参照指示の文字列にある最後の値がテキスト文字の場合は展開されません。

例 :

A202-A210 は展開可能

A202-A210a は展開不可能

A202a-A210a は展開不可能

- 範囲を指定された 2 つの参照指示に接頭辞がある場合、展開するには 2 つの参照指示が同じ接頭辞を持つ必要があります。接頭辞は必ず <CHAR> という形式にします。

例 :

RB202-RB210 は展開可能

RB202-RC210 は展開不可能

- 範囲を指定された参照指示の最初の方のみに接頭辞がある場合は展開できます。

例 :

RB202-RB210 は展開可能

- 範囲を指定された参照指示のいずれにも接頭辞がない場合は展開できます。

例:

202-210 は展開可能

参照指示の範囲で先行ゼロを使用する

参照指示の数字部分の先行ゼロを削除するよう Agile データベースが設定されている場合は、インポートファイルの参照指示の範囲で先行ゼロを使用しないでください。たとえば、[インポート] ウィザードでは、先行ゼロが削除されて、「R0203-R0225」が「R203-R225」とパースされることがあります。

Agile Java クライアントで [管理] タブをクリックし、[サーバ設定]>[プリファレンス]>[参照指示範囲の展開縮小を許可する] の順に選択すると、Agile PLM システムで参照指示の展開および縮小が可能かどうかを確認できます。このプリファレンスが [いいえ] に設定されている場合は、参照指示の動作範囲がすべてオフになります。この場合、参照指示から先行ゼロが削除されることはありませんが、(R0203-R0225 などの) 参照指示の各範囲が 1 つの参照指示として認識されます。そのため、先行ゼロの参照指示を入力するには、範囲ではなく個別に入力する必要があります。

注意 Agile Java クライアントで [参照指示範囲の展開縮小を許可する] プリファレンスの設定を変更する方法の詳細は、[Agile テクニカルサポート](http://www.oracle.com/agile/support.html) (<http://www.oracle.com/agile/support.html>) にお問い合わせください。

aXML および PDX パッケージから参照指示をインポートする

aXML および PDX パッケージの参照指示フィールドがインポートされるときに、これらのフィールドが正しくペースされるようにするには、次のガイドラインに従ってください。

- 複数の参照指示を区切るには、「R1,R2,R3」のようにカンマを使用する。
- 参照指示の範囲を指定するには、「R1-R3」のようにハイフンを使用する。

Excel ファイルおよび区切りテキスト ファイルのガイドライン

Agile PLM では、すべての区切りテキストファイルがエクスポートされます。ただし、テーブルファイルをインポートするには、ヘッダ行と最後の行を指定する必要があります。これらのテーブルファイルには、ユーザー オブジェクトのユーザー グループ テーブル、ユーザー グループ オブジェクトのユーザー テーブル、価格オブジェクト ファイルの価格ライン テーブルなど、特殊なテーブルがエクスポートされたファイルがあります。ヘッダ行と最後の行を指定しない場合、これらのファイルはエクスポートされません。

Microsoft Excel ファイルと区切りテキスト ファイルをインポートする前に、これらのファイルが構造に関する次のガイドラインに従っていることを確認してください。

- Microsoft Excel ワークブックには複数のシートが含まれていることがあります。一度にインポートできるのは 1 つのシートのデータのみです。そのため、Excel シートは適切に設定する必要があります。
- Microsoft Excel ファイルの数値は、インポート前に整数または小数に変換されます。整数を小数として扱いたい場合は、先頭に一重引用符を指定し、値をテキストとして入力します。たとえば 1 ではなく 1.0 をインポートするには、Microsoft Excel のセルに「1.0」と入力します。
- Microsoft Excel ファイルの数式は数値にします。それ以外の場合、[インポート] ウィザードでは数式の文字列がインポートされます。数値以外の値を計算する数式が Microsoft Excel ファイルに含まれている場合は、そのファイルを .CSV ファイルとして保存し、数式の値が正しくインポートされるようにします。
- カラムヘッダは空白にすることはできません。たとえばカンマ区切りファイルでは、次のヘッダ行は「番号」と「説明」の間に空白のヘッダがあるため無効です。
番号, , 説明, 製品ライン, カテゴリ
- インポートデータの最初の行 (Excel ファイルでは最初の行であるとはかぎりません) は「ヘッダ」行で、フィールド名が含まれています。ソース ファイルを選択するときに、[設定] をクリックしてヘッダ行の位置を設定することができます。

- ヘッダ行のフィールド名は一意に指定します。重複するフィールド名は使用できません。重複するフィールド名は使用できません。ソース ファイルに複数のデータセクションが含まれている場合は、インポートするデータを指定するためにヘッダ行と最後の行を設定する必要があります。これは、テーブル形式のエクスポートに該当します。テーブル形式のエクスポートを選択すると、エクスポートされる Excel または CSV ファイルの1行に [ページ 1]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2] のデータがエクスポートされます。
- また、ヘッダ行のフィールドには、改行またはラインフィード文字を使用することはできません。これらの文字が含まれていると、[インポート] ウィザードでファイルを正しくパースできません。詳細は、28 ページの [「改行およびラインフィード文字を削除する」](#) を参照してください。
- ヘッダ行の終端文字にカンマなどの区切り文字は使用できません。
- ヘッダに続く行にはデータを定義する必要があります。データの行の間を空白の行にすることはできません。
- Agile データベースにインポートしないデータの行は、すべて削除する必要があります。
- インポートする特定のオブジェクトタイプに必要なフィールドすべてについて、データを定義しておく必要があります。
- フィールドでは必ず同じ区切り文字を使用します。たとえば、カンマ区切り値形式のファイルでは各フィールドをカンマで区切る必要があります。
- インポートデータは、Agile 管理者が Agile PLM の各フィールドに指定した最大長を超えることはできません。この長さを超えると、[インポート] ウィザードの最大長検証プリファレンスによって値が却下されるか、または切り捨てられます。
- マルチリスト フィールド ([タイトル ブロック] タブの [製品 ライン] フィールドなど) のエントリは、個別の値を区切って列挙する必要があります。マルチリストのデフォルトの区切り文字はカンマで、他に垂直バー (|) やセミコロン (;) を使用することもできます。詳細は、101 ページの [「パースと検証オプションを設定する」](#) を参照してください。

次に、マルチリスト フィールドのカンマ区切りのリスト値の例を示します。

Scorpio,Taurus,Capricorn

注意 ユーザー名をマルチリスト フィールドにインポートする場合は、次の形式を使用する必要があります。
 Lastname,spaceFirstname;spaceLastname,spaceFirstname;spaceLastname など。

- 通貨フィールドには数値を定義する必要があります。通貨コードは指定しません。インポートでは通貨コードがサポートされているため、通貨コードを指定しない場合は、ユーザーの推奨通貨が選択されます。
- BOM の場合は、親アイテム行を連続でグループ化する必要があります。つまり、親アイテムの BOM コンポーネントはすべて 1 グループの行にまとめて表示されます。
- BOM では、個々の参照指示の最大長は 19 文字です。
- BOM では、参照指示を後続行に続けることができます。それぞれの参照指示の連続行では、データを持つ 1 つのフィールドのみが参照指示フィールドとなります。他のフィールドは空白にします。
- BOM では、[数量] フィールドの値は、参照指示の数と必ず同じにします。この数が一致しない場合は、データのインポート時に、[インポート] ウィザードから警告のメッセージが表示されることがあります。

- 区切りテキストファイルでは、テキストの値を(引用符などの)テキスト修飾文字で囲むようにしてください。テキストフィールドを修飾すると、カンマなどのフィールドの区切り文字をフィールドのテキスト内で使用できます。次の例では、21" Monitor, Tilt Pedestal はアイテムの説明であり、テキスト内にカンマ(フィールド区切り文字)と引用符の両方が使用されています。

番号,説明,リビジョン,BOM コンポーネント番号,使用個数

170-50,"21"" Monitor, Tilt Pedestal",A,172-92,1

改行およびラインフィード文字を削除する

Excel ファイルまたは区切りテキストファイルをインポートするときにファイルの解析エラーが発生しないよう、ヘッダフィールドには改行またはラインフィード文字を含めないようにします。これらの文字は区切りテキストファイル内で検出するのは難しいですが、Excel では簡単に検出して削除することができます。

Excel のヘッダ フィールドから改行とラインフィード文字を検出して削除するには:

1. [すべて選択] ボタンをクリックします。このボタンは、ワークシートの左上、つまり行ヘッダと列ヘッダが交わる箇所のグレーの長方形です。
2. [書式] > [行] > [自動調整] の順に選択します。

改行またはラインフィード文字が含まれているヘッダフィールドはすべて、テキスト行が複数行にわたります。次の図では、フィールド A1 と C1 の両方に改行が含まれています。

	A	B	C	D
1	Item Number	Revision	Part Description	Part Type

3. ヘッダ内の余分な改行またはラインフィード文字を削除します。
4. ファイルを保存します。

BOM コンポーネントを並び替える

Excel ファイルまたは区切りテキストファイルから BOM をインポートする前に、親アイテムの BOM コンポーネントがすべて連続した行にグループ化されていることを確認してください。親アイテムの BOM コンポーネントが連続していない行に記載されている場合、[インポート] ウィザードでは、その親アイテムの BOM コンポーネントの最後のグループのみがインポートされます。

たとえば、次の BOM データは行 4 と行 5 の順序が違うため正しくありません。

	A	B	C
1	Parent Item Number	BOM Item Number	Part Description
2	P001	P010	CON,HDR,2X4,M,,1,R,P,L,NS,TH
3	P001	P011	CLP,GND,PLN,R/S
4	P002	P012	RES,10K,1/10W,,1%,THNFLM,0805
5	P002	P013	CAP,470UF,20%,25V,AL,10X12.5
6	P001	P014	DIODE,SKY,30V,80A,MBRS330,SM
7	P001	P015	RES,2.7K,1/16W,5%,THKFLM,0603

次に、正しく並び替えられた BOM データを示します。ここでは、P001 の BOM コンポーネントがグループ化されています。

	A	B	C
1	Parent Item Number	BOM Item Number	Part Description
2	P001	P010	CON,HDR,2X4,M,,1,R,P,L,NS,TH
3	P001	P011	CLP,GND,PLN,R/S
4	P001	P014	DIODE,SKY,30V,80A,MBRS330,SM
5	P001	P015	RES,2.7K,1/16W,5%,THKFLM,0603
6	P002	P012	RES,10K,1/10W,.1%,THNFLM,0805
7	P002	P013	CAP,470UF,20%,25V,AL,10X12.5

BOM を並び替えるには、Microsoft Excel でソース ファイルを開き親アイテム番号の列の昇順で行を並び替えます。

注意 aXML および PDX パッケージの BOM は自動的に適切な順序で並び替えられます。

XML ファイルはファイル内でエンコードを宣言しています。したがって、aXML または PDX パッケージからデータをインポートする場合には、ファイルのエンコードを指定する必要はありません。

Microsoft Excel ファイルからデータをインポートする

Microsoft Excel は一般的なスプレッドシート プログラムです。これを使用して行と列のマトリックス形式でデータをフォーマットすることができます。[インポート] ウィザードは、Microsoft Excel 2000、2002 および 2003 のバージョンをサポートしています。

Excel のワークブック ファイルはファイル名の拡張子が XLS で、1 つのファイルに複数のシートを持つことができます。インポートするシート、およびシートのヘッダ行の位置を必ず指定します。

Excel ファイルからデータをインポートするには

- [ツール] > [インポート] の順に選択します。
- インポート ソースを指定します。[ファイル] を選択します。ファイル名を入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。

注意 ファイルは、Excel 2000 または 2002 の有効なファイルでなければなりません。

- [Excel ワークブック] をクリックします。
- 必要であれば、[設定] をクリックしてファイルの設定を指定します。テンプレート タイプ、ワークシート、およびヘッダ行の位置を指定することができます。完了したら、[OK] をクリックします。
- [次へ] をクリックして次のウィザードの手順に進みます。
- インポートするオブジェクト タイプを選択し、[次へ] をクリックします。
- 設計変更とマッピング ファイルを選択します。[次へ] をクリックします。

注意 レッドライン モードを使用してインポートする場合は、設計変更が必要になります。レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリング モードを使用する](#)」を参照してください。

- 変換定義 ファイル (オプション) を選択するか、または作成します。[次へ] をクリックします。
- インポート設定を確認し、[インポート] をクリックしてインポートを開始します。

Excel で区切りテキスト ファイルを編集する

Excel で区切りテキスト ファイルを開くと、デフォルトではすべてのセルが一般番号形式を使用しています。このため、アイテム番号や製造元部品番号などの多数を科学的記数法 (8.1E+22 など) に変換します。この問題は、セルがテキスト形式を使用するよう設定することで解決できます。

Excel の番号をテキストとしてフォーマットするには:

1. フォーマットするセルを選択します。
2. [フォーマット]>[セル] の順に選択します。[セルのフォーマット] のダイアログ ボックスが表示されます。
3. [番号] タブをクリックします。
4. [カテゴリ] リストで [テキスト] を選択し、[OK] をクリックしてください。
5. まだ科学的記数法により表示されているセルがある場合は、各セルをクリックし、[F2] を押してから [Enter] を押して、番号をテキストで再入力します。

セルをテキスト形式にフォーマットした後、ファイルを Excel (XLS) ファイルとして保存し、形式を維持します。ファイルを CSV ファイルとして保存すると、次に Excel でこのシートを開いたときには、再度一般番号形式が使われていることになります。

区切りテキスト ファイルを Excel にインポートする

区切りテキスト ファイルに、テキストとして再フォーマットの必要なアイテム番号や製造元部品番号が多く含まれる場合、ファイルを新しい Excel ワークブックにインポートする方が合理的な場合があります。Excel の [テキスト ファイル ウィザード] では、列を適切にフォーマットすることができます。

区切りテキスト ファイルを Excel ワークブックにインポートするには:

1. 新規ワークブックを開きます。
2. [データ]>[外部データの取り込み]>[テキストファイルのインポート] を選択します。
3. ファイルを選択し、[インポート] を選択します。[テキスト ファイル ウィザード] が表示されます。
4. [区切られたデータ] を選択します。[次へ] をクリックします。
5. [区切り文字] のボックスで、「カンマ」がチェックされていることを確認してください。[次へ] をクリックします。
6. [データのプレビュー] ボックスで、データ形式を変更する列を選択します。たとえば、アイテム番号または製造元部品番号の列を選択し、[カラムデータ フォーマット] ボックスで [文字列] をクリックします。
7. [完了] をクリックします。
8. [既存のワークシート] を選択し、[OK] をクリックします。

[インポート] ウィザードで Excel データをペースする方法

Excel ファイルをインポートするよう選択した場合、[インポート] ウィザードがインポートの前にデータを区切りテキスト形式へペースします。このため、区切りテキストファイルをインポートするための多くのガイドラインが Excel ファイルにも適用されます。パーサーは特に次のタイプの Excel 値を扱います。

- 数値フォーマット - Excel ファイルの数値はインポート前に整数または小数に変換されます。
- 日付フォーマット - パーサーは、ネイティブの Excel 日付フォーマットの他に、3 つの識別子(d m yy) がすべて含まれているカスタム日付フォーマットもサポートしています。たとえば yyy/mm/dd および dd-MM-YYYY hh:mm の日付フォーマットはサポートされていますが、mm/yy はサポートされていません。
- 通貨フォーマット - パーサーは、通貨値が含まれているすべてのセルを数値として処理します。したがって、\$9.99 という値が定義されているセルは 9.99 として処理されます。

Excel ファイルの設定を指定する

インポートファイルとして Excel ファイルを選択する場合、ファイルの設定方法を指定することができます。ここでは、使用するテンプレート、インポートするワークシート、およびデータが開始するヘッダ行を [インポート] ウィザードで特定できます。

Excel ファイルの設定を指定するには

1. [インポート] ウィザードの最初の手順で、[ファイル] を選択します。
2. ファイルのパスを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
3. [Excel ワークブック] を選択します。
4. [設定] をクリックします。[Excel ワークブック設定] ウィンドウが表示されます。
5. テンプレートのタイプ(レベルテンプレート、親-子テンプレート、または標準)を指定します。
6. インポートするシートを指定します。デフォルトでは、ワークブックの最初のワークシートがインポートされます。
7. ヘッダ行と最後の行の場所を入力します。デフォルトは 1 です。
8. 必要に応じて、最後の行の場所を入力します。デフォルト値は「N/A」です。
9. [OK] をクリックします。

注意 [インポート] ウィザードでは、現在のインポート セッションに対してのみ Excel ファイルの設定が保持されます。

区切りテキスト ファイルからデータをインポートする

区切りテキスト ファイルはフラットテキスト ファイルで、データの各フィールドはカンマやタブなどの特殊文字で区切られます。区切りテキスト ファイルはテキストエディタで作成できます。また、区切りテキスト ファイルは、Microsoft Excel やその他のスプレッドシート プログラムなど、多くのアプリケーションを使用してエクスポートすることもできます。

注意 区切りテキスト ファイルのファイル拡張子は、CSV または TXT です。これ以外の拡張子が指定されている場合、ファイルは無効になりインポートできません。

通常、テキスト ファイルでは一度に 1 つのタイプの Agile オブジェクトしかインポートできません。ただし、テキスト ファイルから BOM、AML、または価格ラインをインポートする場合には、親アイテムや価格も同時にインポートすることができます。

テキスト ファイルには必ずヘッダ行があります。テキスト ファイルをインポートする場合は、必ずヘッダ行の場所を指定します。

テキスト ファイルからデータをインポートするには

[ツール] > [インポート] の順に選択します。

1. インポートソースを指定します。[ファイル] を選択します。ファイル名を入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。

注意 ファイル名には csv または txt のいずれかの拡張子が付いている必要があります。

2. [区切り文字テキスト ファイル] をクリックします。
3. 必要であれば、[設定] をクリックして区切りテキスト ファイルの設定を指定します。ここでは、ヘッダ行の場所、ファイルのエンコードタイプ、およびフィールド区切り文字やテキスト修飾子に使用する文字を指定できます。完了したら、[OK] をクリックします。
4. [次へ] をクリックして次のウィザードの手順に進みます。
5. インポートするオブジェクトタイプを選択し、[次へ] をクリックします。
6. 設計変更とマッピング ファイルを選択します。[次へ] をクリックします。

注意 レッドライン モードを使用してインポートする場合は、設計変更が必要になります。

レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリング モードを使用する](#)」を参照してください。

7. 変換定義ファイル(オプション)を選択するか、または作成します。[次へ] をクリックします。
8. インポート設定を確認し、[インポート] をクリックしてインポートを開始します。

Agile [エクスポート] ウィザードにより保存された区切りテキスト ファイルについて

Agile の [インポート] ウィザードは、Agile [エクスポート] ウィザードにより保存された区切りテキスト ファイルをサポートしていません。これは、[エクスポート] ウィザードがファイルにヘッダ セクションを追加し、複数のテーブルをフラット形式で含めるためです。これを正常にインポートするため、データを再フォーマットすることができます。

区切りテキスト ファイル設定を指定する

区切りテキスト ファイルを選択する場合には、ファイルの設定方法を指定することができます。この設定では、使用するテンプレート、ヘッダ行、フィールドの区切り文字、およびファイルで使用するテキスト修飾子を[インポート] ウィザードで特定できます。

テキスト ファイルの設定を指定するには:

1. [インポート] ウィザードの最初の手順で、[ファイル] を選択します。
2. ファイルのパスを入力するか、[参照] を使用してファイルを選択します。
3. [区切り文字テキスト ファイル] を選択します。
4. [設定] をクリックします。[区切り文字テキスト ファイル設定] ウィンドウが表示されます。
5. テンプレートのタイプ(レベル テンプレート、親一子テンプレート、または標準)を指定します。
6. フィールド区切り文字を選択します。デフォルトはカンマ(,)です。
7. テキスト修飾子を選択します。デフォルトは二重引用符(")です。
8. ヘッダ行の場所を入力します。デフォルトは1です。
9. 必要に応じて、最後の行の場所を入力します。デフォルト値は「N/A」です。
10. ファイルのエンコードタイプを選択します。デフォルトはロケールによって異なります。U.S. (英語) ロケールでは、デフォルトは西ヨーロッパ言語 (ISO) です。これには米国と西ヨーロッパの言語が含まれています。日本と中国のデフォルトのエンコードは、それぞれ SJIS と Big5 です。
11. [OK] をクリックします。

注意 [インポート] ウィザードでは、現在のインポート セッションに対してのみ区切りテキスト ファイルの設定が保持されます。

PDX パッケージおよび aXML ファイルからデータをインポートする

[インポート] ウィザードでは、次の2つのXML フォーマットからのデータのインポートをサポートしています。

- Product Data eXchange (PDX) - 構造化された製品コンテンツを表すための、標準化された XML フォーマット。e サプライ チェーンのパートナー (OEM、EMS プロバイダ、コンポーネント サプライヤなど) が製品コンテンツおよび変更 (BOM、AML、ECR、ECO) を交換するための手段として使用されます。PDX パッケージから、アイテム、BOM、製造元、製造元部品、AML、および添付ファイルをインポートすることができます。PDX パッケージの作成は、Web クライアントで行います。さらに Agile では、PDX パッケージを作成、表示できる Web ベースのアプリケーション、Agile eXpress を無料で提供しています。

DTDへのリンクなど、PDX の詳細は次の Web ページを参照してください。

<http://webstds.ipc.org/2571/2571.htm>

- Agile XML (aXML とも呼ばれる) - Agile のビジネススキーマを XML で表した Agile XML 形式。Agileによって管理されているすべての製品コンテンツ (アイテム、変更の詳細、製造元情報、コスト、図面、および他のファイル) が含まれています。aXML は Agile のすべての製品におけるスキーマ要素の表現であるため、Agile のビジネススキーマとともに長期にわたって展開される予定です。Agile データを aXML 形式へエクスポートするには、Agile Content Service (ACS) または Agile Integration Services (AIS) を使用します。Agile では、aXML パッケージを表示するための独立したツールは提供していません。ただし、aXML パッケージに含まれている XML ファイルは任意の XML ビューアで開くことができます。たとえば、Internet Explorer を使用して XML ファイルを表示できます。

最新の aXML スキーマについては、以下の Web サイトを参照してください:

<http://support.agile.com/misc/axml/2006/03/>

-
- 注意** [インポート] ウィザードでは、変更やパッケージのインポートはサポートしていません。ただし、これらを PDX パッケージや aXML ファイルに含めることは可能です。
-

インポートする PDX パッケージは、次のガイドラインに従うものとします。

- PDX パッケージ内の組み込み XML ファイルは正しくフォーマットされ、PDX DTD リビジョン 1.0 で規定されている構造に関する要求条件に準拠している。(PDX 0.7 ファイルを使用する場合は、ファイルを Agile eXpress 8 で開き、PDX 1.0 ファイル形式で保存してください。)
- PDX パッケージには、Agile のキー フィールドと対応する属性の値が含まれている。
- PDX パッケージには、同じアイテムの複数のリビジョンを含めることができない。PDX パッケージから、複数のリビジョンを持つアイテムをインポートしようすると、[インポート] ウィザードでファイルが却下されます。
- [インポート] ウィザードでは、Agile のマルチサイト PDX 1.0 の実装を使用する PDX パッケージをサポート。他のベンダーのマルチサイト PDX の実装はサポートしていません。

PDX パッケージまたは aXML ファイルからデータをインポートするには

1. [ツール] > [インポート] の順にクリックします。
2. インポートソースを指定します。[ファイル] を選択します。ファイル名を入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。

注意 PDX パッケージの拡張子は pdx で、aXML ファイルの拡張子は axml です。

3. [プロダクトデータ交換パッケージ] または [Agile XML (aXML) ファイル] をクリックします。[次へ] をクリックします。
4. インポートするオブジェクトタイプを 1 つ以上選択し、[次へ] をクリックします。
5. 設計変更とマッピングファイルを選択します。デフォルトの PDX マッピングを使用します。デフォルトの PDX または aXML マッピングを使用します。デフォルトのマッピングを編集して、フィールドマッピングを追加または削除することができます。[次へ] をクリックします。

-
- 注意** レッドライン モードを使用してインポートする場合は、設計変更が必要になります。レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリング モードを使用する](#)」を参照してください。
-

6. 変換定義ファイル (オプション) を選択するか、または作成します。[次へ] をクリックします。
7. インポート設定を確認します。[インポート] をクリックしてインポートを開始します。

PDX パッケージからインポート可能なオブジェクト

[インポート] ウィザードの最初のページで [ファイルタイプ] として [プロダクトデータ交換パッケージ] を選択した場合は、次のオブジェクトをインポートできます。

- 製造元
 - 製造元添付ファイル
- 製造元部品
 - 製造元部品の添付ファイル
- アイテム
 - 部品構成表 (BOM)
 - 承認済み製造元リスト (AML)
 - アイテムの添付ファイル
 - 拠点

aXML ファイルからインポート可能なオブジェクト

[インポート] ウィザードの最初のページで [ファイルタイプ] として [Agile XML (aXML) ファイル] を選択した場合は、次のオブジェクトをインポートできます。

- 製造元
 - 関係
 - 製造元添付ファイル
- 製造元部品
 - 関係
 - 組成
 - BOS (サブスタンス構成表)
 - 承認済みサプライヤリスト
 - 含有基準
 - 製造元部品の添付ファイル
- サブスタンス
 - 組成
 - サブスタンスの添付ファイル
- デクラレーション
 - アイテム
 - 製造元部品
 - 部品グループ
 - アイテム BOS (サブスタンス構成表)
 - 製造元部品 BOS (サブスタンス構成表)

- 部品グループ BOS (サブスタンス構成表)
- 含有基準
- デクラレーション添付
- アイテム
 - 部品構成表 (BOM)
 - 組成およびサブスタンス構成表 (BOS)
 - 承認済み製造元リスト (AML)
 - 拠点
 - 承認済みサプライヤリスト
 - 含有基準
 - 関係
 - アイテムの添付ファイル
- 公表価格
 - 公表価格ライン
 - 価格の添付ファイル
- 見積履歴
 - 見積履歴ライン
- 含有基準
 - サブスタンス
 - 含有基準添付
- 部品グループ
 - 部品
 - 承認済みサプライヤリスト
 - 含有基準
 - 関係
 - 部品グループの添付ファイル
- 製品サービス依頼 (PSR)
 - 対象アイテム
 - 関連 PSR
 - 関係
 - 添付ファイル
- 品質変更依頼 (QCR)
 - 対象アイテム
 - 関係
 - 添付ファイル

テンプレートを使用してデータをインポートする

インポートテンプレートは事前に定義されているフォーマットで、区切りテキストファイルまたは Microsoft Excel ファイルからアイテム、BOM、および AML をインポートするときに使用することができます。提供されているいずれかのテンプレートに従ってデータをフォーマットすると、インポートプロセスは簡単になります。ソースファイルを指定してデフォルトのフィールドマッピングを選択したのち、[インポート] をクリックしてインポートを開始します。

[インポート] ウィザードには、次のテンプレートが用意されています。

- レベル テンプレート
 - BOM のみのレベルテンプレート - 数値のレベルカラムを指定して、BOM の階層レベルを表します。親アイテムとそのコンポーネントの間の関係は、数値レベルで設定されます。このテンプレートには、承認済み製造元が含まれません。
 - BOM および AML のレベルテンプレート - 数値のレベルカラムを指定して、BOM の階層レベルを表します。親アイテムとそのコンポーネントの間の関係は、数値レベルで設定されます。このテンプレートには、各部品の承認済み製造元が含まれます。
- 親一子テンプレート - 親番号および子番号のカラムによって、BOM およびそのコンポーネントの間の関係を表します。

AML をインポートするために BOM および AML のレベルテンプレートまたは親一子テンプレートを使用する場合は、AML に記載されている製造元が Agile PLM システムに存在している必要があります。存在していない場合、AML は却下されます。

インポート テンプレートを使用してデータをインポートするには

1. いずれかのテンプレートを使用して、データを適切にフォーマットします。

注意 ソースファイルにはヘッダ行と少なくとも 1 行のデータが含まれていることを確認してください。

2. [インポート] ウィザードを開始します。
3. [インポート ソース] ページで [ファイル] を選択します。ファイルのパスを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
4. [区切り文字テキストファイル] または [Excel ワークブック] を選択し、[設定] をクリックします。
5. [テンプレート タイプ] で、リストから [レベルテンプレート] または [親一子テンプレート] を選択します。
6. 必要に応じて、他の設定オプションを選択します。完了したら、[OK] をクリックします。
7. 設計変更とマッピングファイルを選択します。デフォルトのマッピングを使用します。[次へ] をクリックします。

注意 レッドライン モードを使用してインポートする場合は、設計変更が必要になります。
レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリング モードを使用する](#)」を参照してください。

8. [インポート] をクリックしてインポート処理を開始します。

レベルテンプレートを使用する

レベルテンプレートには、次の2つがあります。

- BOMのみのレベルテンプレート
- BOMおよびAMLのレベルテンプレート

2つのレベルテンプレートは、同じ[テンプレートタイプ]オプションを共有します。ソースにAMLデータが含まれていない場合、インポートではBOMのみのレベルテンプレートタイプが選択されます。それ以外の場合は、BOMおよびAMLのレベルテンプレートが選択されます。

また、アイテムでは、BOMおよびAMLテーブルがレベルテンプレートとしてサポートされています。形式は、以前のレベルテンプレートと似ています。管理設定のフィールド名は動的であり、以前のように固定属性名ではありません。ただし、固定属性名の以前の形式もサポートされています。

レベルテンプレートのソースファイルには、以下のフィールドを含めることができます。ソースファイルのカラムヘッダは、指定したフィールド名と正確に一致している必要があります。次の表を参照してください。

カテゴリ	フィールド名	必須
アイテム	レベル1	はい
	アイテム番号	はい
	説明	
	タイプ	
	拠点	
	リビジョン	
	製品ライン	
	ライフサイクルフェーズ	
	サイズ	
	カテゴリ	
	有効日	
	部品分類	
BOM	数量	はい
	見出し番号	
	参照指示	
	BOMメモ	
	BOM拠点	
AML2	製造元名	はい
	製造元部品番号	はい
	製造元部品拠点	

カテゴリ	フィールド名	必須
	推奨ステータス	
	参照メモ	

注意:

- 最初のレコードのレベルは 0 または数値以外の値としてください。子アイテムは、ゼロ以外のレベル(1、2、3など)を持っています。最初のレコードの後は、[インポート] ウィザードでは、レベル列の非数値文字は無視されます。
- BOM のみのレベルテンプレートを使用している場合は、ソースファイルに AML フィールドを含めないでください。製造元名と製造元部品番号フィールドは、BOM のみのレベルテンプレートで必要ありません。

次の図は、アイテムおよび BOM のレベルテンプレートデータの例を示しています。

	A	B	C	D	E	F
1	Level	Item Number	Description	Revision	Sites	Quantity
2	0	B0233897C	NT6X01AD XPM FRAME	A	San Jose	1
3	1	910-134-B	CBL BAYST TR REDUND	C	San Jose	1
4	1	960-460-C	TESTED TOKEN RING CCC	C	Austin	1
5	2	920-481-E	BAYSTACK TOKEN RINGA	A	Taipei	1
6	3	111-063	IC,74HCT00,NAND,4,2-IN, B	B	Taipei	1
7	3	111-042	IC,74HCT123,RETRIG MOA	A	Hong Kong	2
8	3	111-170	IC,74ABT245,8,XVCR,SO2B	B	San Jose	2

レベルテンプレートデータに AML の情報が含まれている場合、それぞれのアイテムに複数の AML 行を定義することができます。アイテム情報は、それぞれの AML 行に対して繰り返す必要はありません。次の図は、アイテム、BOM、および AML のレベルテンプレートデータの例を示しています。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	Level	Item Number	Description	Revision	Sites	Quantity	MFR Name	MFR Part Number	Preferred Status
2	0	B0233897C	NT6X01AD XPM FRAME	A	San Jose	1	ADVANCED CABLE TECHNOLOGY	910-073-B	Preferred
3	1	910-134-B	CBL BAYST TR REDUND	C	San Jose	1	JPM COMPANY	910-134-B	Preferred
4	1	960-460-C	TESTED TOKEN RING CCC	C	Austin	1	SOLECTRON TECHNOLOGY INC	960-460-C	Preferred
5	2	920-481-E	BAYSTACK TOKEN RINGA	A	Taipei	1			
6	3	111-063	IC,74HCT00,NAND,4,2-IN, B	B	Taipei	1	TEXAS INSTRUMENTS	WALTH,SN74HCT00D	Preferred
7							PHILLIPS ELECTRONICS	74HCT00D	Preferred
8							MOTOROLA INC	MC74HCT00AD	Alternate
9							HARRIS SEMICONDUCTOR	CD74HCT00M	Alternate
10							FAIRCHILD SEMICONDUCTOR	MM74HCT00M	Alternate
11	3	111-042	IC,74HCT123,RETRIG MCA		Hong Kong	2	PHILLIPS ELECTRONICS	74HCT123D	Preferred
12							HARRIS SEMICONDUCTOR	CD74HCT123M	Alternate
13	3	111-170	IC,74ABT245,8,XVCR,SO2B		San Jose	2	TEXAS INSTRUMENTS	WALTH,SN74ABT245BDW	Preferred

親-子テンプレートを使用する

親-子テンプレートを使用する場合、ソース ファイルには次のフィールドを含めることができます。ソース ファイルのカラム ヘッダは、指定した親-子テンプレートのフィールド名と正確に一致している必要があります。

カテゴリ	フィールド名	必須
アイテム	親の番号	はい
	親のリビジョン	
	親のタイプ	
	子の番号	はい
	子のリビジョン	
	子のタイプ	
	説明	
	拠点	
	製品ライン	
	ライフサイクルフェーズ	
	サイズ	
	カテゴリ	
	部品分類	
BOM	数量	はい
	見出し番号	
	参照指示	
	BOM メモ	
	BOM 拠点	
AML	製造元名 n2	はい
	製造元部品番号 n2	はい
	製造元部品拠点 n2	
	優先ステータス n2	
	参照メモ n2	

注意:

- 親のリビジョンおよび子のリビジョンのフィールドは、これらの両方のフィールドがソース ファイルに含まれている場合のみ、インポートされます。
- 1 つのアイテムに対して複数の製造元部品を含めるには、行を横方向へ拡張します。つまり、それぞれの製造元部品に対して別のカラムを追加します。製造元部品フィールドの名前に、1 から m までの番号を追加します。m はアイテムにある製造元部品の合計数です。

次の図は、アイテムおよびBOMの親一子テンプレートデータの例を示しています。

	A	B	C	D
1	Parent Number	Child Number	Quantity	Description
2	70965G01	70964-01	1	PP PWB-FAB-REG SDB 1PNL FL 6LYR PTH
3	70965G01	70963-00	0	SCHEMATIC: BRANCH NODE SERIAL DATA BOARD
4	70965G01	70998-00	0	OUTLINE DWG PEG SDB
5	70965G01	71495-00	0	SDB,MECH ASSY DWG
6	70965G01	60454-51	2	RA IC-SMD 74F85 4BIT * COMPAR S016
7	70965G01	60312-51	3	RR IC-SMD 74HC161 SYNC * CNTR S016
8	70965G01	53013-54	1	RR IC-SMD 74HC4060 ASYNC * CNTR S016
9	70965G01	71137G07	1	IC HW PROGRAMMED

次の例は、アイテム、BOM、およびAMLの親一子テンプレートデータを示しています。各コンポーネントに対して複数の製造元部品が指定されており、オプションの親リビジョンおよび子リビジョンカラムにリビジョン情報が含まれています。

	Parent Number	Child Number	Description	Quantity
	AX100	AXA100	NTOX9501 CABLE BRAI	1
	AX100	AX200	NTOX9504 BUSS BAR A	1
	AX100	AXA200	NT6XD162 PWR CABLE	1
	AX100	AXA300	NTOX9538 CABLE BRAI	11
	AX200	AXA400	STANDOFF INSULATOR	3
	AX200	AX300	MOUNTING BRACKET K	3
	AX300	AX400	SCREW .250-20X.375X	6
	AX400	AXA500	WS FL .2581D,.5620D	3

MFR Name1	MFR Part Number1	MFR Name2	MFR PartNumber2	MFR Name3	MFR PartNumber3	Parent Revision	Child Revision
JPM COMPANY	910-134-B					A	A
SOLECTRON TECHNOLOGY	960-460-C	TEXAS INSTRUMENTS	SN74HCT00D	PEMSTAR	0323-001	A	D
HARRIS SEMICONDUCTOR	CD74HCT123M					A	A
TEXAS INSTRUMENTS	WSN74ABT245BDW					A	A
FAIRCHILD SEMICONDUCTOR	MM74HCT00M	PHILLIPS ELECTRONICS	74HCT123D	PEMSTAR	0323-002	D	C
PHILLIPS ELECTRONICS	74HCT00D					D	D
MOTOROLA INC	MC74HCT00AD					D	A
HARRIS SEMICONDUCTOR	CD74HCT00M					A	C

親アイテムをグループ化する、並び替える

親一子データをインポートする前に、すべての親アイテムが連続行でグループ化されていることを確認します。同じ親アイテムが連続していない行に記載されている場合、[インポート] ウィザードでは、その親アイテムのコンポーネント部品の最後のグループのみがインポートされます。親一子データを事前に並び替えるためのこの要件は、Excel ファイルおよびテキストファイルの BOM データを並び替えておく必要があるのと似ています。詳細は、28 ページの「[BOM コンポーネントを並び替える](#)」を参照してください。

関係テーブルにオブジェクトをインポートする

サポートされているすべての Agile オブジェクトは、アイテム、製造元、製造元部品、および部品グループのオブジェクトの関係テーブルにインポートできます。また、インポートを介してすべてのユーザー設定フィールドと関係ルールを挿入できます。関係テーブルの詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』を参照してください。

注意 インポートでは、[すべて置換] モードが常に選択されます。つまり、既存の関係データがインポートされたソース ファイルの関係テーブルデータで常に置換されます。

製品コンテンツをインポートする

扱うトピックは次のとおりです。

■ インポートする製品コンテンツのオブジェクトを選択する	43
■ アイテムをインポートする	44
■ 部品構成表 (BOM) をインポートする	46
■ 製造元と製造元部品をインポートする	48
■ アイテム番号と見出し番号が重複した BOM をインポートする	48
■ 承認済み製造元リストをインポートする	48
■ 見積履歴、公表価格、および価格ラインをインポートする	49
■ 顧客および製品サービス依頼をインポートする	51
■ レッドラインまたはオーサリング モードを使用する	56
■ 抱点別の BOM と AML をインポートする	58
■ Agile Product Governance & Compliance データをインポートする	59
■ aXML および PDX パッケージから添付ファイルをインポートする	62
■ Agile パッケージから添付ファイルをインポートする	65

インポートする製品コンテンツのオブジェクトを選択する

Excel ファイルおよび区切りテキスト ファイルの場合、インポートする際に選択できるオブジェクトタイプは 1 つのみです。ソース形式が aXML または PDX パッケージの場合は、インポートの対象として複数のオブジェクトタイプを選択できます。

次の表に、インポートできるオブジェクトのタイプを示します。

オブジェクト	説明
製造元	組織と提携する製造元。
製造元部品	組織で使用する製造元部品。製造元部品は、社内の部品番号ではなく、製造元部品番号で識別されます。
アイテム	固有の部品、マテリアル、サブアセンブリ、または製品。Agile では、デフォルトで 2 つのアイテム クラス (部品とドキュメント) があります。
部品構成表 (BOM)	親アセンブリを構成するすべてのサブアセンブリ、部品、および原材料のリスト。この表には、アセンブリを製造するために必要な各部品の数量が示されます。
承認済み製造元リスト (AML)	特定のアイテムの供給についてその供給を承認された製造元のリスト。このリストで、そのアイテムの製造元部品を特定できます。
見積履歴および見積履歴ライン	以前のプロジェクトまたはレガシー データからの価格見積。
公表価格と価格ライン	対象のアイテムおよび製造元部品に関する公表価格または契約価格。

オブジェクト	説明
製品サービス依頼 (PSR)	製品の問題レポートおよび不具合レポートの発行で使用する送信可能なオブジェクト (ルーティング可能なオブジェクト)。
品質変更依頼 (QCR)	製品品質を向上させるための変更および適合要求事項を解決するレポートの生成で使用するルーティング可能なオブジェクト。
顧客	組織の製品についてフィードバックを提供する顧客。品質の問題または検出した問題を警告します。
添付ファイル	オブジェクトに添付されているファイル。
サブスタンス	アイテム、製造元部品、部品ファミリの組成において使用される要素または複合物。
デクラレーション	デクラレーションは、部品 (アイテム、製造元部品、部品ファミリ) の環境への適合性に関する情報を提示するためのルーティング可能なオブジェクト。
含有基準	禁止されているサブスタンス (または関連のサブスタンス) およびそのしきい値のリスト。
部品グループ	類似アイテムまたは製造元部品のグループ。PG&C については、同じ化学成分を持つアイテムと製造元部品は類似しているため、適合要求も同様となります。PCM については、同じ部品分類クラスに属するアイテムと製造元部品は類似しています。
アイテム、製造元、製造元部品、部品グループの関係	関係データをソースから既存の関係データに置換します。
ルート プログラム	ルート プログラムの P1、P2、P3、アクションアイテム、およびディスカッションを更新します。
ユーザー	バイヤー/サプライヤユーザーを作成し、ユーザー プリファレンスおよびユーザー グループ情報を更新します。
ユーザー グループ	ユーザー グループを作成し、ユーザー グループおよびユーザー情報を更新します。

サプライヤのデータ、通貨換算テーブル、ルート プログラム、ユーザー、およびユーザー グループのインポートの詳細は、「サプライヤおよびシステムデータをインポートする」を参照してください。

プロジェクトのアイテム、プロジェクト BOM、およびプロジェクト AML は、ソーシング プロジェクト内からインポートすることもできます。詳細は、「ソーシング プロジェクトへデータをインポートする」を参照してください。

アイテムをインポートする

アイテムとは、固有の製造部品または購入部品、マテリアル、サブアセンブリ、または製品を指します。アイテムには BOM および AML を含めることができます。BOM はその他のアイテムまたはサブアセンブリとの関係を定義し、AML はアイテムに対する承認済みの製造元と各製造元の製造部品を定義します。組成、サブスタンス構成表、および部品ファミリは、Agile PLM の Product Governance & Compliance モジュールに属しています。これらのアイテムの詳細は、『Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』を参照してください。

アイテムマスター内のアイテムは、自社向けの承認済みの製品コンテンツを示しています。アイテムは製品のライフサイクル中に何回も変更されることがあるため、複数のリビジョンを持つことができます。アイテムマスターには、アイテムのリビジョン履歴が保存されます。プロジェクト内に含まれているアイテムには、複数のリビジョンはありません。これらは一時データとして、見積依頼を生成するために使用されます。

アイテムをインポートするには、[タイトルブロック]>[番号] フィールドにマップします。特定のリビジョンを指定するには、[タイトルブロック]>[リビジョン] フィールドもマップします。アイテムは、アイテムマスターまたはソーシングプロジェクトにインポートすることができます。

部品およびドキュメントをインポートする

Agile には、部品とドキュメントという 2 つのクラスがあります。同じソース ファイルから部品とドキュメントの両方をインポートする場合は、両方のフィールドにマップする必要があります。部品とドキュメントの両方が含まれているソース ファイルで、ドキュメントに対してのみフィールドをマップする場合は、ドキュメントのみがインポートされます。[インポート] ウィザードでは、マップされていないフィールドはすべて無視されます。

部品クラスには、[部品タイプ] というオプションのフィールドがあります。ドキュメントには、[ドキュメントタイプ] という同様のフィールドがあります。これらのフィールドでは、部品またはドキュメントのサブクラスを指定します。これらのフィールドをマップしないと、[インポート] ウィザードでは、インポートプリファレンスに設定されているデフォルトの部品タイプとデフォルトのドキュメントタイプが使用されます。詳細は、104 ページの [「デフォルト タイプを設定する」](#) を参照してください。

注意 アイテムを作成すると、[部品タイプ] および [ドキュメントタイプ] フィールドを修正することができます。

BOM または AML を含む親アイテムをインポートする

各 BOM および AML はアイテム内に含まれています。アイテムには [BOM] タブおよび [製造元] タブがあり、それぞれ部品構成表と承認済み製造元が保存されています。

部品構成表 (BOM) または承認済み製造元リスト (AML) をインポートするときには、親アイテムもインポートすることができます。これは、ソース フォーマットに関係なく行うことができます。区切りテキスト ファイルまたは Excel ファイルからデータをインポートする場合は、1 回のインポート操作で親アイテムと BOM、または親アイテムと AML をインポートできます。aXML ファイル、PDX パッケージ、または定義済みのテンプレート フォーマットからアイテムをインポートする場合は、親アイテム、BOM、および AML のすべてを一度にインポートできます。

複数のリビジョンを持つアイテムをインポートする

処理速度と効率を上げるために、[インポート] ウィザードでは複数のアイテムをまとめてインポートし、複数のリビジョンを持つアイテムを次のように処理します。

- 複数のリビジョンを持つアイテムを含む aXML ファイルまたは PDX パッケージからアイテムをインポートする場合、[インポート] ウィザードではソース ファイルを処理して、古いコピーを新しいバージョンに置換します。この処理ではエラーは生成されません。

注意 エクスポートでは、異なるリビジョンのアイテムは、保留中バージョン、初版バージョン、およびリリース済みバージョンのリリース日付順に出力されます。最新のリリース日付は最後に出力されます。

- Excel ファイルまたは区切りテキスト ファイルからアイテムをインポートする場合、ファイルの隣接した行に同じアイテムの複数のリビジョンが含まれていると、[インポート] ウィザードでは最初のリビジョンのみがインポートされます。この場合にはエラーは記録されません。
- Excel ファイルまたは区切りテキスト ファイルからアイテムをインポートする場合、ファイルの隣接していない行に同じアイテムの複数のリビジョンが含まれていると、[インポート] ウィザードでは対象アイテムのすべてのリビジョンが却下されます。

部品構成表 (BOM) をインポートする

BOM には、親アセンブリを構成するすべてのサブアセンブリ、部品、および原材料が示されています。この表には、アセンブリを製造するために必要な各部品の数量が示されます。

BOM は、アイテムマスターまたはソーシングプロジェクトにインポートすることができます。テキストファイルまたは Microsoft Excel ファイルから BOM をインポートする場合は、親アイテムのすべての BOM コンポーネントが連続行にグループ化されていることを確認してください。詳細は、28 ページの「[BOM コンポーネントを並び替える](#)」を参照してください。

注意 BOM をインポートする場合、ソースデータに定義されており Agile PLM システムに存在しないアイテムは、[インポート] ウィザードで自動的に作成されます。

テキストファイルまたは Excel スプレッドシートから BOM をインポートするには

1. [インポート] ウィザードを開始します。
 - a. [ツール] > [インポート] の順にクリックします。
2. インポートのプリファレンスを設定します。
 - a. [インポート] ウィザードの左下端の [プリファレンス] ボタンをクリックします。[プリファレンスの設定を指定] ウィンドウが表示されます。
 - b. [プリファレンス] リストから、[ビジネスルール オプション] を選択します。これらのオプションの詳細は、102 ページの「[ビジネスルール オプションを設定する](#)」を参照してください。
 - c. [変更モード] については、レッドライン(デフォルト)またはオーサリングを選択してください。[レッドライン] を選択した場合、[インポート] ウィザードはインポートセッションの結果変更された BOM フィールドをレッドラインします。レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリングモードを使用する](#)」を参照してください。
 - d. [変更番号] については、 をクリックし、設計変更を選択します。設計変更は、[変更モード] のプリファレンスでレッドラインを選択した場合のみ必要です。既存の設計変更を検索するか、新しい設計変更を作成することができます。設計変更の選択または作成が終わったら、[完了] をクリックして [プリファレンス設定の指定] ウィンドウへ戻ります。
 - e. [レッドラインモード動作] については、すべてのアイテム、新規アイテム、レッドラインされた新規アイテムもしくは既存のアイテムのうちのいずれかを設計変更に追加するアイテムとして選択します。
 - f. [複数行更新モード] については [すべて置換] または [追加/更新のみ] を選択します。一部の BOM を含み、完全な BOM 構造を含まないデータをインポートする場合は、[追加/更新のみ] を選択します。
 - g. [OK] をクリックしてインポートプリファレンスをこのセッションに保存します。
3. インポートソースファイルを選択します。
 - a. インポートソースを指定します。[ファイル] を選択します。ファイル名を入力するか、[参照] をクリックしてファイル名を選択します。
 - b. [区切り文字テキストファイル] または [Excel ワークブック] をクリックします。
 - c. 必要であれば、[設定] をクリックしてテンプレートタイプまたはファイルの設定を指定します。[OK] をクリックします。
 - d. [次へ] をクリックして次のウィザードの手順に進みます。
4. BOM タイプを選択します。
 - a. [アイテム] を選択し、次に [部品構成表] を選択します。
 - b. [次へ] をクリックします。

5. マッピング ファイルを選択します。
 - a. [既存のマッピング ファイルを使用する] または [新規マッピングを作成する] を選択します。
 - b. [既存のマッピング ファイルを使用する] を選択した場合、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
 - c. [新規マッピングを作成する] を選択した場合、[新規マッピングの作成] ボタンをクリックしてマッピングを定義します。[マッピング ファイルを編集] ウィンドウが表示されます。インポート ファイルをターゲット Agile フィールドにマップし、[完了] をクリックします。
 - d. [次へ] をクリックして次の ウィザード の手順に進みます。
6. 変換定義 ファイル (オプション) を選択するか、または作成します。[次へ] をクリックします。
7. インポート 設定を確認し、[インポート] をクリックしてインポートを開始します。

存在する BOM コンポーネント、および存在しない BOM コンポーネントをインポートする

BOM をインポートすると、[インポート] ウィザードによって、Agile PLM システムに存在しないアイテムが自動的に作成されます。BOM コンポーネントのクラスタイプは、Agile の bom.item タイプ フィールドを使用して指定することができます。bom.item タイプ フィールドを使用して BOM コンポーネントのクラスタイプを指定しない場合、インポートでは、デフォルトのアイテムタイプが割り当てられ、次の警告メッセージが BOM コンポーネントの自動作成時に生成されます。

アイテム/製造元部品 "****" は、必須フィールドの指定なしで BOM/AML テーブルのインポート中に自動作成されました。

BOM アイテムが Agile PLM システムに存在している場合、そのアイテムは、[インポート] ウィザードによって最新のリビジョンに関連付けられます。

次のいずれかの状況の場合は、[インポート] ウィザードで BOM の子アイテムを自動的に作成する処理が失敗します。

- 親アイテムの必須フィールド ([カバー ページ] > [番号] など) の内容が無効な場合
- BOM をプロジェクトにインポートした後に BOM がロールバックされた場合

見出し番号をインポートする

[BOM] > [見出し番号] フィールドがマップされていない場合、そのフィールドのデフォルト値は 0 です。

一部の BOM をインポートする

既存の BOM コンポーネントを削除しないで BOM を更新するには、[複数行更新モード] プリファレンスを [追加/更新のみ] に設定します。[インポート] ウィザードは新しい BOM コンポーネントをインポートし、既存のコンポーネントを更新します。詳細は、102 ページの [「ビジネスルール オプションを設定する」](#) を参照してください。

製造元と製造元部品をインポートする

Agile PLM システムではそれぞれの製造元名は固有のものです。これは、アイテム番号がアイテムに対して固有である必要があるのと同じです。

複数の製造元で同じ製造元部品番号を使用することはできますが、製造元と製造元部品番号の組み合わせは1つの製造元部品に対して一意にする必要があります。

製造元と製造元部品をアイテムマスターにインポートすることはできますが、プロジェクトにインポートすることはできません。

注意 推奨される手順に従い、まず製造元をインポートし、次に製造元部品をインポートします。Agile PLM では、存在しない製造元に対して製造元部品をインポートすることはできません。

アイテム番号と見出し番号が重複した BOM をインポートする

アイテム番号と見出し番号が重複した行がインポートで検出された場合は、アイテム番号と見出し番号が同じ場合でも別の BOM コンポーネントとして処理されます。インポートでは、アイテム番号と見出し番号の重複による BOM コンポーネントの重複を許可するか却下するかを指定するスマートルールの設定に基づいて、コンテンツを受け入れるか却下します。システム内に同じアイテム番号と見出し番号がすでに存在している場合は、ソースファイルから最後の BOM コンポーネント(アイテム番号と見出し番号は同じ)が選択されて、更新されます。

承認済み製造元リストをインポートする

承認済み製造元リスト(AML)は、特定のアイテムの供給について承認された製造元のリストです。このリストで、そのアイテムの製造元部品を特定できます。

承認済み製造元リストは、アイテムマスターまたはプロジェクトにインポートすることができます。AML をインポートしても、[インポート] ウィザードでは製造元は自動的に作成されません。ただし、AML に記載される製造元部品は自動的に作成されます。AML コンポーネントのクラスタイプは、aml.manufacturer タイプフィールドを使用して指定することもできます。このフィールドを使用して AML コンポーネントのクラスタイプを指定しない場合、インポートでは、デフォルトのアイテムタイプが割り当てられます。AML コンポーネントが自動的に作成されると、次の警告メッセージが生成されます。

アイテム/製造元部品 "****" は、必須フィールドの指定なしで BOM/AML テーブルのインポート中に自動作成されました。

注意 AML をアイテムマスターにインポートする場合、AML に定義されている製造元はすでに Agile PLM システムに存在している必要があります。存在していない場合、AML は却下されます。

子製造元部品の自動作成

AML をインポートする場合には、AML に定義されている製造元部品が Agile PLM システムに存在しているかどうか [インポート] ウィザードでチェックされます。存在していない場合は、[インポート] ウィザードによって自動的に作成されます。次のいずれかの状況の場合は、[インポート] ウィザードで製造元部品を自動的に作成する処理が失敗します。

- 親アイテムの必須フィールド ([カバー ページ] > [番号] など) に無効なデータが含まれている場合
- AML をプロジェクトにインポートした後に AML がロールバックされた場合

一部の AML をインポートする

既存の AML 行を削除しないで AML を更新するには、[複数行更新モード] プリファレンスを [追加/更新のみ] に設定します。[インポート] ウィザードは新しい AML 行をインポートして既存の行を更新します。詳細は、102 ページの [「ビジネス ルール オプションを設定する」](#) を参照してください。

見積履歴、公表価格、および価格ラインをインポートする

価格オブジェクトを使用して、サプライヤ、顧客、およびプログラムに関する部品の価格条件を管理します。それぞれの価格オブジェクトには 1 つの価格ラインテーブルがあり、ここでは出荷場所、有効期間、数量に関する付けられた条件、および価格が保存されます。

インポート可能な価格オブジェクトには、[見積履歴] と [公表価格] の 2 つのクラスがあります。価格オブジェクトのいずれのタイプをインポートする場合でも、機能上の違いはありません。ただし、区切りテキストファイルまたは Microsoft Excel ファイルからデータをインポートする場合は、見積履歴と公表価格を別のインポート操作でインポートする必要があります。また、これらの 2 つのクラスは別のマッピングファイルで管理する必要があります。

注意 価格ラインをインポートする場合には、ソースデータは親の価格フィールドと同じ一貫性のあるセットを各行に対して用意する必要があります。たとえば、データで [一般情報] > [番号] フィールドを使用して親の価格オブジェクトを特定する場合は、ソースデータのすべての行に、そのフィールドの値を含む必要があります。このようにしないと、インポートセッションは正常に行われません。

主な価格フィールド

価格オブジェクトは、オブジェクトに定義されている必須フィールドおよびオプションフィールド数によって、様々な方法で定義することができます。価格は、アイテムまたは製造元部品のいずれかに関連付けられます。ソースデータには、少なくとも次のキー フィールドのいずれかのセットが含まれるようにします。

セット 1	セット 2	セット 3
一般情報 > 製造元部品番号	一般情報 > アイテム番号	一般情報 > アイテム番号
一般情報 > 製造元名	一般情報 > アイテム リビジョン 1	一般情報 > サプライヤ
一般情報 > サプライヤ	一般情報 > サプライヤ	

注意 前述のセット 2 の [アイテム リビジョン] フィールドが必要になるのは、リリース済みまたは保留中リビジョンのアイテムの場合のみです。

[一般情報] > [サプライヤ] フィールドは、2種類のソース値—サプライヤ番号または [supplierName] - [supplierNumber] をサポートしています。いずれの場合でも、値は大文字と小文字を区別します。サプライヤ値で [supplierName] - [supplierNumber] フォーマットを使用する場合、スペースとハイフンが必要です。

データには、[製造拠点]、[プログラム]、[顧客] など、その他のオプションのフィールドを含めることも可能です。[顧客] フィールドの値は、顧客番号ではなく顧客名を定義します。顧客名は大文字と小文字を区別します。誤った文字を含む顧客名を受けると、[インポート] ウィザードは価格記録を却下します。ソースデータに [プログラム] および [顧客] が含まれていない場合、[インポート] ウィザードでは、これらのフィールドの値を [すべて] とみなします。

[一般情報] > [数量割引可] フィールドは、いくつかの数量をまとめることによって価格の割引が可能になるかどうかを決定します。[数量割引可] フィールドがマップされていない場合、[インポート] ウィザードでは、[価格数量割引のデフォルト] プリファレンスを使用して、どの値を使用するかが判断されます。詳細は、「インポートプリファレンスを設定する」を参照してください。価格オブジェクトを作成した後は、そのオブジェクトの [数量割引可] フィールドの値を変更できません。

オプションで、ソースデータに [一般情報] > [番号] フィールドを含めることも可能です。既存の価格オブジェクトにデータをインポートする場合は、[一般情報] > [番号] フィールドおよび他の必須フィールドすべてを、ターゲットシステムと正確に一致させておく必要があります。これらのものが一致していない場合は、[インポート] ウィザードでオブジェクトが却下されます。価格番号を指定しない場合、[インポート] ウィザードでは、他のキー フィールドを使用して価格オブジェクトが検索されます。指定したキー フィールドを持つ価格オブジェクトがシステム内に存在していない場合、[インポート] ウィザードでは、オブジェクトが作成され、価格クラスの自動採番シーケンスに基づいて、そのオブジェクトに番号が割り当てられます。

注意 親の価格オブジェクトに保留中の設計変更が含まれている場合は、レッドラインモードの価格ラインをインポートすることはできません。

主な価格ラインフィールド

[価格ライン] のソースデータには、少なくとも [一般情報] > [価格番号] が含まれているか、価格オブジェクトを特定する最低限のフィールド(前述の「主な価格フィールド」を参照)と次の主要な価格ラインフィールドが含まれている必要があります。

- [価格ライン] > [価格有効開始日]
- [価格ライン] > [出荷先]

また、価格オブジェクトに対して [数量割引可] フィールドを [はい] に設定してから、必須フィールドの [価格ライン] > [数量] をマップします。

価格ラインテーブルのすべてのリスト フィールド([出荷元]、[出荷先]、[通貨]、[原産国]、[輸送条件] など)には、正しい値を設定する必要があります。[出荷先] については、ユーザー プロファイルの [認定出荷先] リストに定義されている値のみがサポートされます。[輸送条件] では、FOB などの3文字の略語を入力するか、または「FOB - 本船渡し」のように完全な説明を入力します。[輸送条件] で使用できる値は次のとおりです。

値	完全な説明
CFR	CFR - コスト、運送料
CIF	CIF - コスト、保険料、運送料
CIP	CIP - 運送料、保険料支払先
CPT	CPT - 運送料支払先

値	完全な説明
DAF	DAF - 国境渡し条件
DDP	DDP - 引渡関税支払済み
DDU	DDU - 引渡関税未払
DEQ	DEQ - 埠頭持込渡し(関税支払済み)
DES	DES - 本船持込渡し
EXW	EXW - 工場渡し
FAS	FAS - 船側渡し
FCA	FCA - 運送人渡し
FOB	FOB - 本船渡し

一部の価格ラインをインポートする

既存の行を削除しないで価格ラインテーブルを更新するには、[複数行更新モード] プリファレンスを [追加/更新のみ] に設定します。[インポート] ウィザードは新しい価格ラインをインポートして既存の行を更新します。詳細は、102 ページの「[ビジネスルールオプションを設定する](#)」を参照してください。

顧客および製品サービス依頼をインポートする

Agile PLM システムに Product Service & Improvement ライセンスが含まれている場合は、システムを使用して顧客で発生する品質問題を管理することができます。顧客は、問題レポートまたは不具合レポートを提出し、品質の問題について警告することができます。問題レポートおよび不具合レポートは、製品サービス依頼の 2 つのタイプです。

顧客をインポートする

顧客データは、CRM (Customer Relationship Management) システムで作成することができます。CRM システムが Agile PLM システムに統合されていない場合は、[インポート] ウィザードを使用して顧客および製品サービス依頼をインポートします。

顧客のデフォルトのサブクラスとして、顧客クラスのみ使用できます。他の顧客サブクラスを定義することも可能です。

顧客をインポートするには、[顧客]>[一般情報]>[顧客名] フィールドは必須です。他のフィールドはすべてオプションです。

[顧客]>[一般情報]>[顧客番号] フィールドはキー フィールドですが、このフィールドはマップする必要はありません。[顧客番号] フィールドがマップされていない場合は、[インポート] ウィザードは自動採番プリファレンスを使用して、新しい顧客に番号を割り当てます。詳細は、105 ページの「[デフォルトの自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。

製品サービス依頼をインポートする

顧客と同様に、製品サービス依頼(PSR)は Agile PLM システムと統合されている CRM システムで作成できます。これらの 2 つのシステムが統合されていない場合は、PSR のデータを Agile PLM システムにインポートできます。

PSR オブジェクトをインポートする

インポートモジュールでは、PSR オブジェクトのインポートと検証がサポートされています。サポートされているファイル形式は、aXML、Excel、および区切りテキストファイルです。また、サポートされているテーブルとコンポーネントには、[カバーページ(P. 1)]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[関連 PSR]、[対象アイテム]、[関係]、および[添付ファイル]が含まれます。

PSR オブジェクトをインポートするには

1. [ツール]>[インポート]の順にクリックします。
[インポート] ウィザードが左のパネルに、[インポートソース] ダイアログがメインパネルに表示されます。
2. [インポートソース] ダイアログで、PSR データ(aXML、区切りテキストファイル、Excel)を持つソースファイルを選択します。
3. [次へ] をクリックします。[インポートするコンテンツを選択] ダイアログが表示されます。
4. [インポートするコンテンツを選択] で、PSR および他の適用可能なチェックボックス([対象アイテム]、[関連 PSR]、[関係]、および[添付ファイル])を選択します。
5. [次へ] をクリックします。[マッピングファイルの選択] ダイアログが表示されます。
6. 適用可能なオプション(既存のマッピングの使用、新規マッピングの作成、またはデフォルトマッピングの使用)をチェックします。
7. [選択したマッピングの変更] をクリックして、対象アイテム、関係、関連 PSR、および添付ファイルについて関連フィールドを指定します。

注意 これらのオブジェクトのインポートに必要なフィールドは次に表示されます。インポートするオブジェクトは、ここで検証するか、ウィザードの残りのステップで検証できます。

- [検証]を選択した場合は、検証結果の要約が表示されます。ログファイルは保存することもできます。処理を繰り返す場合は[再起動]をクリックし、コンテンツをインポートして残りの 2 ステップ([変換定義ファイルを選択]と[設定を確認してインポートを開始])をバイパスする場合は[完了]をクリックします。
 - [次へ]を選択した場合は、[変換定義ファイルを選択] ダイアログに次のダイアログが表示されます。
8. [完了]をクリックしてプロセスを完了します。

PSR のみをインポートする

PSR のみをインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [問題レポート] > [カバー ページ] > [番号]
- [不具合レポート] > [カバー ページ] > [番号]

一度に PSR の 1 つのクラスのみをインポートする場合は、問題レポートおよび不具合レポートの両方に対してフィールドをマップする必要はありません。ソースデータに問題レポートと不具合レポートの両方が含まれている場合は、これらの 2 つのクラスに対してフィールドをマップする必要があります。

他のマッピング可能な [カバー ページ] PSR フィールドには、[PSR タイプ]、[説明]、[顧客]、[サプライヤ]、[重大度]、[対応策]、[解決予定日] があります。[顧客] フィールドの値は、顧客番号ではなく顧客名を定義します。顧客名は大文字と小文字を区別します。

注意 インポート可能なすべての PSR フィールドは、SDK および AIS でサポートされています。

PSR の対象アイテムをインポートする

PSR の対象アイテムテーブルにアイテムをインポートできます。PSR の対象アイテムをインポートする場合は次のフィールドが必須になります。

- [問題レポート] > [対象アイテム] > [アイテム番号]
- [問題レポート] > [対象アイテム] > [見つかったリビジョン]
- [不具合レポート] > [対象アイテム] > [アイテム番号]
- [不具合レポート] > [対象アイテム] > [見つかったリビジョン]

PSR の対象アイテムは、初版も含めて任意のリビジョンステータスにすることが可能です。対象アイテムをインポートしようとして、そのアイテムが存在していない場合、[インポート] ウィザードでは、該当する行が却下されます。

関連 PSR をインポートする

PSR を PSR の関連 PSR テーブルにインポートできます。PSR 関係をインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [問題レポート] > [関連 PSR] > [PSR 番号]
- [不具合レポート] > [関連 PSR] > [PSR 番号]

存在していない PSR をインポートしようとすると、[インポート] ウィザードでは、該当する行が却下されます。

PSR 関係テーブルをインポートする

オブジェクトを PSR の関係テーブルにインポートできます。PSR 関係をインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [問題レポート] > [関係] > [番号]
- [問題レポート] > [関係] > [タイプ]
- [不具合レポート] > [関係] > [番号]
- [不具合レポート] > [関係] > [タイプ]

存在していないオブジェクトをインポートしようとするとき、[インポート] ウィザードでは、該当する行が却下されます。

PSR 添付ファイルをインポートする

PSR 添付ファイルをインポートできます。PSR 添付ファイルをインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [問題レポート] > [添付ファイル] > [ファイル ID]
- [問題レポート] > [添付ファイル] > [ファイル名]
- [不具合レポート] > [添付ファイル] > [ファイル ID]
- [不具合レポート] > [添付ファイル] > [ファイル名]

品質変更依頼をインポートする

PSR と同様に、品質変更依頼 (QCR) は Agile PLM システムと統合されている CRM システムで作成できます。これらの 2 つのシステムが統合されていない場合は、QCR のデータを Agile PLM システムにインポートできます。

QCR オブジェクトをインポートする

インポートモジュールでは、QCR オブジェクトのインポートと検証がサポートされています。サポートされているファイル形式は、aXML、Excel、および区切りテキストファイルです。また、サポートされているテーブルとコンポーネントには、[カバーページ (P. 1)]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[対象アイテム]、[関係]、および [添付ファイル] が含まれます。

QCR オブジェクトをインポートするには

1. [ツール] > [インポート] の順にクリックします。
[インポート] ウィザードが左のパネルに、[インポートソース] ダイアログがメインパネルに表示されます。
2. [インポートソース] ダイアログで、QCR オブジェクト (aXML、区切りテキストファイル、または Excel) を選択します。
3. [次へ] をクリックします。[インポートするコンテンツを選択] ダイアログが表示されます。
4. [インポートするコンテンツを選択] で、品質変更依頼および他の適用可能なチェックボックス ([対象アイテム]、[関係]、および [添付ファイル]) を選択します。
5. [次へ] をクリックします。[マッピング ファイルの選択] ダイアログが表示されます。

6. 適用可能なオプション(既存のマッピングの使用、新規マッピングの作成、またはデフォルトマッピングの使用)をチェックします。
7. [選択したマッピングの変更]をクリックして、対象アイテム、関係、および添付ファイルについて関連フィールドを指定します。

注意 これらのオブジェクトのインポートに必要なフィールドは次に表示されます。インポートするオブジェクトは、ここで検証するか、ウィザードの残りのステップで検証できます。

- [検証]を選択した場合は、検証結果の要約が表示されます。ログファイルは保存することもできます。処理を繰り返す場合は[再起動]をクリックし、コンテンツをインポートして残りの2ステップ([変換定義ファイルを選択]と[設定を確認してインポートを開始])をバイパスする場合は[完了]をクリックします。
 - [次へ]を選択した場合は、[変換定義ファイルを選択]ダイアログに次のダイアログが表示されます。
8. [完了]をクリックしてプロセスを完了します。

QCR の対象アイテムをインポートする

QCR の対象アイテム テーブルにアイテムをインポートできます。QCR の対象アイテムをインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [検証]>[対象アイテム]>[アイテム番号]
- [是正予防処置]>[対象アイテム]>[アイテム番号]

QCR の対象アイテムは、初版も含めて任意のリビジョンステータスにすることが可能です。対象アイテムをインポートしようとして、そのアイテムが存在していない場合、[インポート] ウィザードでは、該当する行が却下されます。

QCR 添付ファイルをインポートする

QCR 添付ファイルをインポートできます。QCR 添付ファイルをインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [検証]>[添付ファイル]>[ファイル ID]
- [検証]>[添付ファイル]>[ファイル名]
- [是正予防処置]>[添付ファイル]>[ファイル ID]
- [是正予防処置]>[添付ファイル]>[ファイル名]

QCR 関係テーブルをインポートする

QCR の対象アイテム テーブルにオブジェクトをインポートできます。QCR の対象アイテムをインポートする場合は、次のフィールドが必須になります。

- [検証]>[関係]>[番号]
- [検証]>[関係]>[タイプ]
- [是正予防処置]>[関係]>[番号]
- [是正予防処置]>[関係]>[タイプ]

存在していないオブジェクトをインポートしようとすると、[インポート] ウィザードでは、該当する行が却下されます。

レッドラインまたはオーサリング モードを使用する

レッドラインモード(デフォルト設定)で[インポート] ウィザードを使用する場合は、アイテム、BOM、AML、および価格をインポートするための設計変更を指定します。レッドラインモードでは、名前のとおり、変更されたすべてのフィールドが赤色でハイライトされます。レッドラインモードでインポートされたすべてのアイテムと価格は、指定された設計変更の [対象アイテム] タブと [対象価格] タブに定義されます。

リリース済みのアイテムおよび価格に対して、[インポート] ウィザードは、最新のリリースされたリビジョンで行われた変更に基づいて、データをレッドラインします。価格オブジェクトに保留中のリビジョンが含まれている場合は、[インポート] ウィザードで、価格について価格ラインテーブルをレッドラインすることはできません。

レッドラインモードでアイテムをインポートする場合、すべてのアイテムは無条件で選択された設計変更の [対象アイテム] タブに追加されます。[インポート] ウィザードでは、[対象アイテム] タブに追加するアイテムを自由に選択することはできません。

レッドラインモードの BOM、製造元、または価格ラインテーブルに対して変更する場合は、全体の行および一部の行をレッドラインすることができます。ある行を追加または削除すると、行全体がレッドラインの追加または削除として処理されます。行内の特定のフィールドのみを修正し、キーフィールドを更新しない場合は、[インポート] ウィザードで、変更されたフィールドのみがレッドラインされます。たとえば、いくつかの BOM フィールドを修正し、[BOM]>[アイテム番号] フィールドを修正しない場合は、行が部分的にレッドラインされます。

親アイテムまたは価格がまだリリースされておらず、保留中の変更がない場合は、[インポート] ウィザードをオーサリングモードで使用すると、既存の BOM、AML、または価格ラインを更新することができます。オーサリングモードは、プレリミナリアイテムまたは価格の BOM、AML、価格ラインのデータをインポートする場合に使用できます。アイテムまたは価格に保留中の変更が含まれている場合は、オーサリングモードを使用して BOM、AML、または価格ラインを更新することができません。

変更モードのプリファレンスをレッドラインまたはオーサリングモードに設定する方法の詳細は、102 ページの「[ビジネス ルール オプションを設定する](#)」を参照してください。

設計変更を選択する

[インポート] ウィザードの「設計変更とマッピングファイルを選択してください。」のステップで、設計変更をインポートセッションに使用するよう指定することができます。レッドラインモードで、アイテム、BOM、AML、価格、および価格ラインをインポートするには設計変更が必要です。オーサリングモードでは設計変更是オプションです。

 をクリックして設計変更を選択します。[インポート操作を行う変更を選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウによって別のウィザードが表示され、現在のインポートセッションに対して使用する設計変更を指定します。既存の設計変更を検索することも、新しい ECO、MCO、SCO、または PCO、あるいはユーザー定義の同様のサブクラスの設計変更を作成することもできます。

注意 既存の設計変更を検索する場合は、その設計変更がリリースされていない状態であることを確認してください。価格をレッドラインモードでインポートする場合、価格オブジェクトに対して保留中の PCO があるかどうかを Agile PLM システムで検索してください。価格に関連付けられている保留中の PCO があると、別の PCO に対して同じ価格オブジェクトを追加することはできません。

BOM、AML、および価格ラインのロールバック

Agile PLM システムにインポートされた BOM、AML、および価格ラインの整合性を保持するために、[インポート] ウィザードでは、インポートデータの一部のみを新しいリビジョンにインポートすることを禁止しています。BOM、AML、または価格ラインの行が無効であるためにインポートできない場合は、リビジョンが却下され、[インポート] ウィザードは、テーブル全体をインポートセッション前の元の状態にロールバックします。

BOM、AML、および価格ラインのロールバック中は、指定された設計変更の [対象アイテム] または [対象価格] タブから親アイテムと価格が削除されません。また、[タイトルブロック]、[ユーザー定義 1]、または [ユーザー定義 2] のフィールドに対して行われた変更はロールバックの影響を受けません。

アイテムを新しいリビジョンにインポートしている間に、(データベースエラーなどの) 致命的なエラーが発生した場合は、[インポート] ウィザードによってリビジョンがロールバックされます。ロールバックが行われても、インポートプロセス中に自動的に作成された子アイテムは削除されずに、Agile PLM システムに保持されます。

BOM、AML、または価格ラインテーブルを最新リビジョンにインポートして、検証エラーが発生した場合は、置換側のテーブルは却下されます。

BOM、AML、または価格ラインを最新リビジョンにインポートしている間に致命的なエラーが発生した場合は、エラーが発生する前に承認された置換側のテーブルはロールバックできません。この状況が生じた場合は、最新リビジョンに再度インポートしてください。

保留中の設計変更に既存のレッドラインがある場合、[インポート] ウィザードはインポートファイルから新規レッドラインデータをインポートする前に、これらを消去します。レッドラインの消去と新規データのインポートは別々の操作です。レッドラインが消去された後、トランザクションが実行され、インポートプロセスを開始します。このため、インポート操作がなんらかの理由で失敗した場合(たとえばアイテム番号の重複など)、テーブルはレッドライン状態前にロールバックされます。

次の表では、リリース済みの BOM、AML、および価格ラインテーブルに対してインポートエラーがどのような影響を与えるかを示します。

リビジョン	エラー タイプ	結果
新しいリビジョン - 新しいリビジョンを親アイテムまたは価格にインポートする	検証エラー	新しいリビジョンおよびリリース済みの BOM、AML、または価格ライン テーブルは却下される
	致命的なエラー	新しいリビジョンおよびリリース済みの BOM、AML、または価格ライン テーブルがロールバックされる
現在のリビジョン - 親アイテムまたは価格の現在のリビジョンに変更をインポートする	検証エラー	置換側の BOM、AML、または価格ライン テーブルが却下される
	致命的なエラー	致命的なエラーが発生する前にインポートされた置換側のすべての BOM、AML、または価格ライン テーブルはロールバックできない

注意 [インポート] ウィザードは、データにエラーがある場合のみ BOM、AML、または価格ラインデータをロールバックします。警告またはエラーが関連オブジェクト(アイテム、製造元、製造元部品、価格などのフィールド)のみに関係している場合は、BOM、AML、または価格ラインはロールバックされません。

拠点別の BOM と AML をインポートする

拠点別の BOM と AML は、サポートされているすべてのインポートファイルフォーマット(ただし MS Project Export ファイルは除く)からインポートすることができます。ただし、拠点別のデータは適切にフォーマットし、フィールドを正しくマップする必要があります。特に、次のフィールドを含める必要があります。

- 親アイテムの [タイトルブロック]>[拠点] フィールド
- アイテム対応テーブルの [適合性]>[組成]>[BOS (サブスタンス構成表)] フィールド
- BOM の [BOM]>[拠点] フィールド
- AML の [製造元]>[拠点] フィールド

[タイトルブロック]>[拠点] フィールドは、アイテムの [拠点] タブの拠点のリストを表す仮想的なフィールドです。BOM または AML インポートするためには [タイトルブロック]>[拠点] フィールドをマップする必要があります。フィールドをマップしないと、[インポート] ウィザードでは、[タイトルブロック]>[拠点] の値が、ソースファイルの [BOM]>[BOM 拠点] または [製造元]>[拠点] に対して指定された拠点名のリストであるとみなします。

注意 [インポート] ウィザードは、既存の親アイテムから拠点の関連付けを削除しません。つまり、[タイトルブロック]>[拠点] フィールドに拠点を追加することはできますが、[インポート] ウィザードを使用して、アイテムの [拠点] タブから拠点を削除することはできません。

拠点別の BOM と AML をインポートすると、[インポート] ウィザードでは、ソースファイルに指定されている拠点のデータのみがインポートされます。既存のアイテムに対して指定されている特定の拠点がソースファイルに含まれていない場合、[インポート] ウィザードでは、拠点別の BOM または AML のセクションが更新されません。

注意 サブスタンスは、aXML ファイルからのみ、デクラレーション、製造元部品、およびアイテム用の BOS (サブスタンス構成表) テーブルにインポートできます。

次の図は、拠点別の情報を持つ BOM のインポートソースファイルを示しています。ここでは、[アイテム拠点] と [BOM 拠点] の 2 つのカラムに拠点の情報が定義されています。

	A	B	C	D	E
1	Parent Item	Item Sites	BOM Item	Qty	BOM Site
2	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	B0001	1	
3	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	B0002	1	
4	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	B0003	1	
5	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	B0004_Site	1	San Jose
6	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	B0005_Site	1	Bangalore

アイテム拠点の列は、マッピング ウィンドウの [タイトルブロック]>[拠点] フィールドにマップされます。この中には、拠点のリストがカンマ区切りの形式で含まれており、親部品が関連付けられています。

BOM アイテム、数量、および BOM 拠点のカラムは、BOM コンポーネントに関連しています。BOM 拠点のカラムは、マッピング ウィンドウの [BOM]>[拠点] フィールドにマップされます。これは、コンポーネントが適用される拠点を示します。このカラムの各行には 1 つの拠点のみが含まれています。[BOM 拠点] フィールドが空白の場合は、すべての拠点に対してコンポーネントが使用されます。

前述の図の B0001、B0002、および B0003 には、指定された BOM 拠点がありません。したがって、これらの BOM コンポーネントはすべての拠点で共通になります。B0004_Site には、BOM 拠点として San Jose が定義されています。これは B0004_Site が San Jose の拠点に固有の BOM の一部にのみ適用されることを意味しています。

次の図は、拠点別情報を持つ AML のインポートソースファイルを示しています。ここでは、[アイテム拠点] と [製造元拠点] の 2 つのカラムに拠点の情報が定義されています。

	A	B	C	D	E
1	Parent Item	Item Sites	Mfr Name	Mfr Part	Mfr Site
2	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	MARTEX	MPD914T	
3	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	MOTOROLA	MPD914LT1	
4	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	PHILIPS/SIG	MPD914T/R	
5	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	ZETEX	MPD914TA	San Jose
6	P0001	San Jose, Bangalore, Taipei	PS DIODES	MP007W	Bangalore

前述の BOM インポートソースファイルと同様に、この場合のアイテム拠点の列もマッピング ウィンドウの [タイトルループロック] > [拠点] フィールドにマップされます。

製造元名、製造元部品、製造元拠点のカラムは、承認済みの製造元に関連付けられています。製造元拠点の列は、マッピング ウィンドウの [製造元] > [拠点] フィールドにマップされます。これは、承認済みの製造元が適用される拠点を示します。このカラムの各行には 1 つの拠点のみが含まれています。[製造元拠点] フィールドが空白の場合は、この承認済み製造元がすべての拠点に対して使用されます。

この図では、ZETEX の製造元拠点として San Jose が定義されています。これは、この承認済み製造元が、San Jose の拠点に固有の AML の一部にのみ適用されることを意味しています。

注意 SCO を使用して拠点別の BOM と AML をレッドラインモードでインポートする場合は、BOM/AML に対して 1 つの拠点のみ指定できます。複数の拠点を持つ BOM と AML は却下されます。

Agile Product Governance & Compliance データをインポートする

Agile PG&C にはいくつかのデクラレーションクラスがあります。インポート可能なテーブルには、デクラレーションクラスとソースファイルのタイプに基づいたいくつかの制限があります。

デクラレーションタイプ、サポートされているテーブル、およびインポート可能なオブジェクト

下表は、インポート可能な Agile PG&C に関するオブジェクトを示しています。これらのオブジェクトおよび適用される手順の詳細は、『Agile Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』のデータのインポートとエクスポートに関する項を参照してください。

デクラレーションタイプ	サポートしているテーブル	
	aXML ファイルタイプ	区切り文字テキストまたは Excel ファイルタイプ
デクラレーション 1	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[アイテム 1]、[製造元部品]、[部品グループ]、[アイテム BOS (サブスタンス構成表)2]、[製造元部品 BOS (サブスタンス構成表)2]、[部品グループ BOS (サブスタンス構成表)2]、[含有基準]、[添付ファイル]	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[アイテム 1]、[製造元部品]、[部品グループ]、[含有基準]
適合のサプライヤ デクラレーション	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[含有基準]、[添付ファイル]	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[含有基準]

デ克拉レーション タイプ	サポートしているテーブル	
	aXML ファイル タイプ	区切り文字テキストまたは Excel ファイル タイプ
部品のデクラレーション	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[アイテム]、[製造元部品]、[部品グループ]、[含有基準]、[添付ファイル]	
均質材のデクラレーション	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[アイテム]、[製造元部品]、[部品グループ]、[アイテム BOS (サブスタンス構成表)]、[製造元部品 BOS (サブスタンス構成表)]、[部品グループ BOS (サブスタンス構成表)]、[含有基準]、[添付ファイル]	[カバー ページ]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[アイテム]、[製造元部品]、[部品グループ]、[含有基準]
IPC 1752-1 デクラレーション		
IPC 1752-2 デクラレーション		
JGPSSI デクラレーション		
サブスタンスの デクラレーション		
サブスタンスの デクラレーション		
アイテム	[タイトル ブロック]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[BOM]、[製造元]、[拠点]、[適合性] > [含有基準 3]、[サプライヤ]、[添付ファイル]、[適合性] > [組成]、[適合性] > [BOS (サブスタンス構成表)3]	[タイトル ブロック]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[BOM]、[製造元]、[拠点]、[適合性] > [含有基準 4]、[サプライヤ 5]
製造元部品	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[適合性] > [含有基準]、[適合性] > [組成] > [BOS (サブスタンス構成表)2]、[サプライヤ 4]、[添付ファイル]、[適合性] > [組成]、[適合性] > [BOS (サブスタンス構成表)3]	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[適合性] > [含有基準]、[サプライヤ 5]
部品グループ	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[部品]、[適合性] > [含有基準 3]、[サプライヤ]、[添付ファイル]	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[部品]、[適合性 4] > [含有基準 3]、[サプライヤ]
含有基準	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[サブスタンス 5]、 [添付ファイル]	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[サブスタンス 2]、
サブスタンス	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[組成 6]、[添付ファイル]	[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]

注意:

- [アイテム] > [アイテム リビジョン] フィールドをマップしない場合は、アイテムの最新リリース済みリビジョンの最終変更済み ECO または MCO がインポートされます。リビジョンを指定した場合は、指定したリビジョンの最新のリリース済みおよび変更済み ECO または MCO がインポートされます。アイテムに複数のリビジョンがある場合は、リビジョンのかわりに初版を使用して、そのアイテムの初版リビジョンがデクラレーションにインポートされます。アイテムがリリースされたリビジョンを持たない場合、初版リビジョンがインポートされます。

2. サブスタンスは、aXML ファイルからのみ、デクラレーション、製造元部品、およびアイテム用の BOS (サブスタンス構成表) テーブルにインポートできます。この統合は Agile Product Interchange を使用している場合にサポートされ、外部コンテンツ ソースからアイテムおよび BOS (サブスタンス構成表) 情報を検索することができます。
3. 含有基準は、アイテム、製造元部品、および部品グループの [適合性] テーブルにインポートできます。アイテムにインポートされた含有基準、サプライヤ、組成、および BOS (サブスタンス構成表) は変更番号に固有です。
4. [組成]、[BOS (サブスタンス構成表)] または [サプライヤ] (あるいはその両方)、および [含有基準] はページに固有です。これらをインポートするには、ソースファイルに変更番号を指定する必要があります。これら 4 つのテーブルは、[BOM]、[AML]、[拠点] または [添付ファイル] テーブルと同様にはインポートできません。これらをインポートするには、最初にレッドラインする必要があります。また、インポートファイルに変更番号を指定することも必要です。含有基準およびサプライヤをアイテムにインポートするには、カンマ区切り (CSV) 形式または Excel 形式を使用します。組成および BOS (サブスタンス構成表) をインポートするには、aXML 形式でインポートする必要があります。
5. 含有基準の [サブスタンス] テーブルに追加されるのは、[サブスタンス グループ] または [サブスタンス] クラスに属するサブスタンスのみです。サブパートとマテリアルは含有基準に追加されません。含有基準に追加されるのは、サブスタンス グループとサブスタンスのみです。
6. 次に示すように、[組成] テーブルはクラスによって異なります。

[サブスタンス] クラス:[組成] テーブルをサポートしない

[サブスタンス グループ] クラス:[組成] テーブルはサブスタンスのみを持つことができる

[マテリアル] クラス:[組成] テーブルはサブスタンス グループまたはサブスタンスを持つことができる

[サブパート] クラス:[組成] テーブルは、その他のサブパート、マテリアル、サブスタンス グループ、サブスタンスを持つことができる

一部の Agile PG&C オブジェクト (アイテムを含む) には、[質量] フィールドがあります。データを [質量] フィールドにインポートする方法は、23 ページの [「質量をインポートする」](#) を参照してください。

インポートのためにマッピングする必要のある Agile PG&C フィールドのリストは、81 ページの [「キー フィールドと必須 フィールド」](#) を参照してください。

注意 リリース 9.2.2 では、[アイテム] > [適合性] > [組成]、[製造元部品] > [適合性] > [組成]、および [部品 グループ] > [適合性] > [組成] テーブルの [重量宣言値] 属性が [質量] に変更されました。

特別なエクスポートおよびインポート コマンドを使用してデクラレーションを完成する

デクラレーションクラスには、特別なエクスポートおよびインポート コマンドがあります。これらのコマンドによって、サプライヤは、データを他の Agile PLM システムと統合したり、Microsoft Excel や Adobe Reader など他のクライアントで適合性リクエスト フォームを完成できます。次の表は、これらのエクスポートおよびインポート コマンドを一覧表示します。

クラス	コマンド	説明
すべてのデクラレーション クラス	AXML のエクスポート AXML のインポート	Agile PLM システムと統合するために Agile XML をエクスポートおよびインポートする。
IPC 1752-1 デクラレーション IPC 1752-2 デクラレーション	IPC XML のエクスポート IPC XML のインポート	IPC-1752-1 と IPC-1752-2 データ適合性リクエスト フォームを完成するために使用できる XML データのエクスポートおよびインポート。

クラス	コマンド	説明
JGPSSI デクラレーション	JGPSSI のエクスポート JGPSSI のインポート	JGPSSI Excel テンプレートと統合するためにブロック形式でテキスト ファイルをエクスポートおよびインポートする。
	Excel で開く	Microsoft Excel でデクラレーションを開く。

注意 前述の表内のコマンドは、デクラレーション クラスに割り当てられたプロセス拡張によって有効になります。コマンドが使用できない場合、Agile PLM システムはカスタム設定を使用します。

これらの特別なエクスポートおよびインポート コマンドのデータ形式は、Agile の aXML 形式、JPGSSI テンプレート、および IPC-1752-1 形式と IPC-1752-2 形式で事前定義されています。これらのコマンドの詳細は、『Product Governance & Compliance ユーザー・ガイド』を参照してください。

aXML および PDX パッケージから添付ファイルをインポートする

CAD 図面、画像、ドキュメントなどの添付ファイルを、PDX パッケージまたは aXML ファイルからインポートすることができます。添付ファイルは通常バイナリ ファイルですが、容量が非常に大きくなる場合があります。したがって、テキスト ファイルからはインポートできません。次の表は、PDX および aXML ファイルから添付ファイルをインポートできるオブジェクトを示しています。

オブジェクト	PDX の添付ファイル	aXML の添付ファイル
アイテム	はい	はい
製造元	はい	はい
製造元部品	はい	はい
価格	はい	はい
サブスタンス		はい
デクラレーション		はい
含有基準		はい
部品グループ		はい
製品サービス依頼		はい
品質変更依頼		はい

BOM または AML をインポートする場合には、関連付けられているアイテム、製造元、製造元部品に対して添付ファイルは自動的にインポートされません。添付ファイルは明示的にインポートする必要があります。

インポート可能な添付ファイルのフィールド

次のフィールドは、[添付ファイル] タブにインポートすることができます。

- ファイルの説明
- ファイル名

aXML および PDX パッケージは、[添付ファイル] タブのカスタムフィールドもサポートしています。Agile PLM 管理者が Text01、List01、Numeric01 などの [添付ファイル] フィールドを表示するように設定すると、これらのフィールドにデータをインポートすることができます。

添付ファイルの最新バージョンをインポートする

[インポート] ウィザードでは、常に添付ファイルの最新バージョンがインポートされます。たとえば、あるアイテムにリビジョン A バージョン 1、リビジョン A バージョン 2、およびリビジョン B バージョン 1 という添付ファイルが付随している場合は、リビジョン A バージョン 2 およびリビジョン B バージョン 1 がインポートされます。

アイテムには複数のリビジョンを定義することが可能で、それぞれのリビジョンに対して複数の添付ファイルを定義することができます。たとえば、リビジョン A、B、C というアイテムがあったとします。各リビジョンには異なる添付ファイルと、添付ファイルの異なるリビジョンが存在することができます。

次の 5 つの個別のインポートセッションでは、各リビジョンに対して添付ファイルをインポートできます。

セッション 1: リビジョン A (ファイル 1 バージョン 1)

セッション 2: リビジョン A (ファイル 1 バージョン 2)

セッション 3: リビジョン B (ファイル 1 バージョン 3)

セッション 4: リビジョン C (ファイル 1 バージョン 4)

セッション 5: リビジョン C (ファイル 1 バージョン 5 およびファイル 2 バージョン 1)

5 つのインポートセッションが完了すると、各リビジョンに表示される添付ファイルは次の表のようになります。

リビジョン	添付ファイル
リビジョン A	ファイル 1 バージョン 1、ファイル 1 バージョン 2
リビジョン B	ファイル 1 バージョン 3
リビジョン C	ファイル 1 バージョン 4、ファイル 1 バージョン 5、ファイル 2 バージョン 1

URL 添付ファイル

実際のファイルのかわりに、Uniform Resource Locator (URL) を添付できます。URL はインターネット上のファイルのアドレスであるため、ファイルは Agile のファイル管理サーバ上でセキュアではなく、Agile アプリケーションの知識がなくても変更できます。URL 添付ファイルにはサイズが 0 バイトのファイルがあります。これらのファイルをファイル管理サーバからチェックアウトすることはできません。URL もファイルと同様にインポートできます。

添付ファイルと親アイテムのロールバック

なんらかの理由で添付ファイルがインポートされなかった場合、そのファイルの親オブジェクト (アイテム、製造元、または製造元部品) はロールバックされません。

添付ファイルの値を変換する

変換定義ファイルを使用して、添付ファイルのファイル名を変更しないでください。このような変更を行うと、[インポート] ウィザードでファイルのインポートに失敗します。

複数ファイル (フォルダ) を持つ添付ファイルをインポートする

PDX は複数ファイルを含む添付ファイルをサポートしています。Agile ソフトウェアの前バージョンでは、複数ファイルを含む添付ファイルはフォルダとして表示されました。PDX パッケージから添付ファイルフォルダをインポートすると、[インポート] ウィザードはフォルダ内の各ファイルを別々の添付ファイルとしてインポートします。

添付ファイル レッドライン

Agile PLM システムでは添付ファイルのレッドラインがサポートされているため、ファイルに注釈を追加することができます。添付ファイルのレッドラインはインポートできません。ただし、添付されているファイル、およびそれに関連するフィールドのみインポートすることができます。

Agile パッケージから添付ファイルをインポートする

Agile パッケージは、提案製品を説明するファイルおよびドキュメントが定義されているオブジェクトです。Agile パッケージは、サプライ チェーン パートナーも含めて他の Agile ユーザーに送付できます。

Agile パッケージが承認者によってレビューおよび承認されると、プログラム管理者はそれを承認して、Agile パッケージのデータを各社の社内手順に従って処理します。パッケージが承認されると、その添付ファイル (PDX ファイルまたは区切りテキスト ファイル) を Agile PLM システムにインポートできるようになります。

Agile パッケージから添付ファイルをインポートするには

1. Agile Web クライアントで Agile パッケージを開きます。
2. [添付ファイル] タブをクリックします。
3. 添付ファイル (PDX ファイルまたは区切りテキスト ファイル) を選択します。
4. [インポート] をクリックします。

注意 パッケージがリリース済みの場合のみ [インポート] ボタンが有効になります。デフォルトのパッケージワークフローの場合、リリース済みのステータスは「承認済み」と呼ばれます。

5. メッセージ ボックスが表示されます。[OK] をクリックします。
6. [インポート] ウィザードが表示されます。ウィザードの手順に従います。

サプライヤおよびシステム データをインポートする

扱うトピックは次のとおりです。

■ サプライヤをインポートする	67
■ サプライヤの見積依頼回答をインポートする	69
■ 通貨換算テーブルをインポートする	75

サプライヤをインポートする

外部のサプライヤと協力して、製品コンテンツを収集および準備することができます。また、価格の交渉や見積依頼 (RFQ) への直接的な応答も行います。

サプライヤをインポートする場合は次の 2 つのフィールドが必須になります。

- [サプライヤ]>[一般情報]>[名前]
- [サプライヤ]>[一般情報]>[会社通貨]

[サプライヤ]>[一般情報]>[番号] フィールドはキー フィールドですが、このフィールドはマップする必要はありません。

[サプライヤ]>[一般情報]>[番号] フィールドがマップされていない場合、[インポート] ウィザードではサプライヤの名前を使用して既存のサプライヤを見つけます。サプライヤの名前が、既存の複数のサプライヤ名に一致する場合は、[インポート] ウィザードでその行が却下されます。指定された名前のサプライヤが存在しない場合は、[インポート] ウィザードで新しいサプライヤが作成され、自動採番プリファレンスによってそのサプライヤに番号が割り当てられます。詳細は、105 ページの「[デフォルトの自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。

ソースデータでは、必ずサプライヤタイプを指定してください。サプライヤとして次の 5 種類が用意されていますが、別のサプライヤを Agile PLM システムに追加することもできます。5 つのサプライヤタイプは次のとおりです。

- ブローカー
- 部品メーカー
- 受託製造業者
- ディストリビュータ
- メーカー代表者

[サプライヤ]>[一般情報]>[ライセンスのあるコンタクト ユーザーの最大数] および [サプライヤ]>[一般情報]>[パワーコンタクト ユーザーの最大数] フィールドはそれぞれ、サプライヤ会社のコンタクト ユーザーおよびパワー ユーザーの最大数を表します。コンタクト ユーザーおよびパワー ユーザーは見積依頼に回答することができますが、レポートを生成および表示できるのはパワー ユーザーのみです。

[会社通貨] フィールドの通貨値は、3 文字のコードを使用して指定します。詳細は、20 ページの「[通貨の値をインポートする](#)」を参照してください。

サプライヤ製造元および部品分類提示をインポートする

サプライヤの製造元提示では、サプライヤがどの製造元の製品を販売しているかを定義します。たとえば、ACME という名前のサプライヤが Motorola と Kemet の製品を販売している場合があります。製造元提示をインポートする場合、その製造元の名前が Agile PLM システムの既存の製造元名に存在するかどうか [インポート] ウィザードで検証されます。該当する製造元が存在しない場合は、[インポート] ウィザードで提示が却下されます。

サプライヤの製造元提示をインポートするには、次のフィールドが必須です。

- [サプライヤ]>[一般情報]>[名前]
- [サプライヤ]>[一般情報]>[会社通貨]
- [サプライヤ]>[製造元]>[製造元名]

[サプライヤ]>[一般情報]>[番号] フィールドはキー フィールドですが、このフィールドはマップする必要はありません。[番号] フィールドがマップされていない場合、[インポート] ウィザードは自動採番プリファレンスを使用して新しいサプライヤに番号を割り当てます。詳細は、105 ページの「[デフォルトの自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。

サプライヤの部品分類提示には、そのサプライヤが販売する製品分類が定義されます。たとえば、ACME という名前のサプライヤが、ヒューズ、IC、レジスタなどの商品を販売している場合があります。サプライヤの部品分類提示をインポートする場合、部品分類の名前が Agile PLM システムの既存の部品分類名に存在するかどうか [インポート] ウィザードで検証されます。該当する部品分類が存在しない場合は、[インポート] ウィザードで提示が却下されます。

サプライヤの部品分類提示をインポートする場合には、次のフィールドが必須です。

- [サプライヤ]>[一般情報]>[名前]
- [サプライヤ]>[一般情報]>[会社通貨]
- [サプライヤ]>[部品分類]>[部品分類]

この場合も [サプライヤ]>[一般情報]>[番号] フィールドはキー フィールドですが、マップする必要はありません。[番号] フィールドがマップされていない場合、[インポート] ウィザードは自動採番プリファレンスを使用して新しいサプライヤに番号を割り当てます。

各提示について、[出荷先] の場所、または地理的な場所を表す値(各提示の[大陸]、[国]、および[都道府県] フィールド)のいずれかをインポートできます。

[出荷先] の場所については有効なものだけを指定できます。存在しない場合、提示は無視されます。[出荷先] の値には、区切られた複数の場所(「Milwaukee, Nagoya, Taipei」など)を指定することができます。複数の [出荷先] は、特定の行で指定します。ファイルをインポートする際に、複数の提示が作成されます。

注意 Agile PLM 管理者は、Agile Java クライアントにログインし [管理]>[システム設定]>[Product Cost Management]>[出荷先の場所] の順に選択することによって、有効な [出荷先] の場所を定義することができます。

提示には、それぞれの [出荷先] の場所に対する格付を与えることができます。この格付により、バイヤーとサプライヤおよび特定の提示との関係を表現できます。サプライヤは Agile PLM システムに一定の制限付きでアクセスできますが、割り当てられている格付を表示する権限はありません。

デフォルトでは、[格付] フィールドとして次の 4 つの値が有効です。

- 承認済み
- 未承認 (提示可)
- 提供 - 無効
- 推奨

注意 Agile PLM 管理者は、Agile Java クライアントにログインして [管理] > [データとワークフローの設定] > [リスト] > [サプライヤ提示格付] の順に選択することによって、[格付] フィールドの有効な値を設定できます。

1 回の操作で提示と格付をインポートする

サプライヤの提示と格付を 1 回の操作でインポートするには、提示に対する [出荷先] の場所、または地理的な値のいずれかを指定する必要があります。この場合も、有効な [出荷先] の場所だけを指定できます。

ソースデータの行に [出荷先] の値が含まれており、それが有効であるもののまだサプライヤに関連付けられていない [出荷先] の場所に対応している場合、[インポート] ウィザードで [出荷先] の値と [格付] の値 (提示されている場合) を使用して新しい提示が作成されます。指定された [出荷先] の場所がすでにサプライヤに関連付けられている場合は、[インポート] ウィザードで [格付] フィールド (提示されている場合) が更新されます。指定された [出荷先] の場所が有効ではない場合は、行全体が却下されます。

ソースデータの行に [出荷先] の値が含まれておらず、地理的な値 ([大陸]、[国]、および [都道府県] フィールド) が含まれている場合は、[インポート] ウィザードで提示が作成され、適切な [出荷先] の場所が自動的に関連付けられます。ただし、この場合には次のルールが適用されます。

- [大陸] の値は必須です。[国] または [都道府県] フィールドの値が空白か不明の場合、デフォルト値の [すべて] が使用されて広義の提示が行われます。
- 地理的な値のそれぞれに対しては、1 つの値しかインポートできません。『Arizona, California, Texas』 のように、区切られた複数の値はサポートしていません。

注意 提示を作成する場合は、そのときに指定する地理データが、同じ製造元または部品分類に対する既存の提示の地理データよりも狭く指定されていないことを確認してください。たとえば、既存の提示の [都道府県] フィールドが [すべて] に設定されている場合、[都道府県] フィールドに「カリフォルニア」を設定して同じ製造元または部品分類に対する新しい提示を作成することはできません。これは、既存の提示でカバーする地域の方が広いためです。

サプライヤの見積依頼回答をインポートする

見積依頼に記載されたアイテムの見積を行う際は、アイテムをエクスポートして回答を作成することができます。アイテムをエクスポートすると、Agile PLM システムによってカンマ区切りのテキストファイルが生成されます。エクスポートされたサプライヤの回答ファイルには、RFQNumber.csv という名前が付けられています。サプライヤは、Microsoft Excel などのスプレッドシートプログラムを使用してファイルを編集できます。また、見積ツールを使用して回答をオンラインで完了することもできます。回答ファイルのフィールドへの記入が終了すると、サプライヤはそのファイルを Agile PLM システムに再インポートし、回答をソーシングマネージャに送信することができます。

インポート可能なその他のタイプのオブジェクトとは異なり、サプライヤの回答の場合はインポートフィールドを Agile PLM フィールドにマッピングする必要はありません。回答はエクスポートされたテキストファイルの変更済みバージョンであるため、マッピングは自動的に行われます。

サプライヤの回答をインポートするには

1. 見積依頼を選択します。
2. [回答] タブをクリックします。
3. [回答]>[インポート] の順に選択します。[インポート] ウィザードが表示されます。
4. [参照] をクリックしてファイルを選択し、[開く] をクリックします。
5. [インポート] をクリックします。

Web サプライヤ以外のサプライヤの回答をインポートする

サプライヤが Agile PLM クライアントに Web 経由でアクセスできない場合、ソーシングマネージャは、サプライヤからの回答ファイルをインポートできます。回答はエクスポートされたテキストファイルの変更済みバージョンであるため、回答フィールドのマッピングは[インポート] ウィザードによって自動的に行われます。

Web サプライヤ以外のサプライヤからの見積依頼回答をインポートするには

1. 見積依頼を選択します。
2. [回答ステータス] タブをクリックします。
3. Web サプライヤ以外のサプライヤを選択します。

注意

Web サプライヤ以外のサプライヤは、 アイコンで示されます。

4. [インポート] をクリックします。[インポート] ウィザードが表示されます。
5. [参照] をクリックしてファイルを選択し、[開く] をクリックします。
6. [インポート] をクリックします。

サプライヤの回答フィールドを編集する際のガイドライン

サプライヤからの回答テキストファイルのインポートを正常に行うには、編集する際に以下のガイドラインに従ってください。

- 列見出しの順序は変更できますが、見出しの編集や見出しへのデータの追加は行わないでください。列見出しを変更すると、ファイルをインポートできません。
- 新規データ列は追加しないでください。
- [製造中止日] と [有効期限] 以外の日付フィールドは変更しないでください。
- 「入力しない」というコメントがあるフィールドには、値を入力しないでください。これらのフィールドは、データを格納するように意図されていません。「入力しない」というコメントは、フィールドが編集されないように表示してあります。コンポーネント部品の場合は、[その他費用] フィールドにデータを入力しないでください。アセンブリアイテムの場合は、[マテリアル価格] フィールドにデータを入力しないでください。

- 必須フィールドには、列見出しの右側にアスタリスク (*) が付いています。次の図に表示されている列は、すべて必須フィールドです。

	AM	AN	AO	AP	AQ	AR	AS
22	Min *	Mult *	Lead Time (days) *	Inventory *	Terms of Sale *	Country of Origin *	NCNR *
23	4	6	27	97	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
24		6	7	29	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
25	7	5	38	24	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
26	9	2	57	39	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
27	4	8	39	31	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
28	3	9	66	61	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
29	8	2	63	57	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No
30	1	7	86	29	CFR - COST AND FREIGHT	United States	No

一部の必須フィールドが記入されていない場合でも、ファイルのインポートは正しく実行できます。ただし、その回答をソーシングマネージャに送信することはできません。必須フィールドおよび依頼フィールドは、プロジェクトを設定するソーシングマネージャによって指定されます。

- 空のフィールドはインポートされません。また、そのフィールドが 0 とみなされることもありません。数値フィールドまたは価格フィールドを 0 に設定するには、明示的に値 0 を入力する必要があります。
- ファイルの先頭にある <HEADER> セクションはインポートされないため、必要であれば削除できます。このセクションを削除する場合は、必ず <HEADER> タグの行、</HEADER> タグの行、およびその 2 つのタグに挟まれているすべての行を削除してください。
- サプライヤからの回答ファイルをインポートすると、既存の回答フィールドのデータはインポートしたデータで置換されます。

サプライヤからの回答ファイルを編集する場合には、編集が許可されているフィールドのみを編集するよう注意してください。通常、これは [入札参加意思] フィールドとこの右側のフィールドが編集可能です。その他のフィールドは表示専用となります。

サプライヤからの回答ファイルは、繰り返しインポートすることができます。ファイルをインポートするたびに、編集可能フィールドのみがインポートされ、以前の値が置換されます。サプライヤからの回答ファイルに表示されるフィールドは、そのフィールドをソーシングマネージャが依頼フィールドまたは必須フィールドのどちらに指定しているかによって異なります。

Agile PLM システムでは、様々な価格算出ケースをサポートしています。このため、見積依頼のフィールドは、プロジェクトに対して指定された価格期間や数量割引によって異なります。価格は、複数の数量割引(最大 6 種類まで)または複数の価格期間に基づき、1 つの価格期間に 1 つまたは複数の数量を規定することができます。次の表に、編集可能および編集不可のサプライヤからの回答フィールドをすべて示します。

フィールド	編集可
計算 1	はい
入札参加意思	はい
原産国	はい
製造中止日	はい
有効期限 2	はい
在庫	はい
アイテム番号	

フィールド	編集可
アイテムまたは製造元部品説明	
リードタイム	はい
マテリアルコスト	はい
最小	はい
発注ロットサイズ	はい
製造元名	
製造元部品番号	
返品・キャンセル不可	はい
その他費用 1	はい
初期設計費用	はい
対象期間開始日 数量割引 1...6 - 数量 2	
対象期間開始日 数量割引 1...6 - 目標価格 3	はい
数量割引 1...63	
回答ユーザー設定フィールド 1、3	はい
見積依頼番号	
リビジョン	
販売条件	はい
UOM	

注意:

1. このフィールドは、ソーシングマネージャで設定できます。このため、別の表示名となっている可能性があります。
2. このフィールドを使用できるかどうかは、プロジェクトに対して選択されている価格算出ケースによります。
3. Agile PLM システムで設定し有効にできる回答ユーザー設定フィールドは 25 箇所あります。具体的には、5 個の日付フィールド、10 個のテキストフィールド、5 個の数値フィールド、および 5 個の通貨フィールドです。

提示された代替部品を回答ファイルに追加する

サプライヤに対して送られた見積依頼の部品が、なんらかの理由で供給できないこともあります。たとえば、部品が旧式になっている場合、割り当て済みの場合、製造中止状態の場合などには供給できません。また、その部品が不必要に高価だったり、要求されたリードタイムでは必要な数量を揃えられなかつたりする場合もあります。こうした問題には、見積依頼回答で代替部品を提示して対処することができます。

代替部品を提示する場合、その部品の新しい製造元を(ソーシングマネージャが検討しなかつた製造元も含めて)提示することもできます。

提示された代替部品を見積依頼回答に追加するには

1. エクスポートされた回答ファイルを (Microsoft Excel などの) スプレッドシートプログラム、またはカンマ区切りファイルをサポートしている他のアプリケーションで開きます。
2. 置き換える部品に対して 1 行挿入します。
3. [製造元部品番号]、[製造元名]、および [アイテムまたは製造元部品説明] フィールドに適切な値を入力します。[アイテム番号] フィールドの値は置き換える部品と同じにします。[入札参加意思] フィールドで、[入札 - 代替部品] を入力します。[リビジョン] および [単位] フィールドは空白のままにします。これらのフィールドの内容は親アイテムから継承されます。他のフィールドには適切な値を入力します。

追加の行を挿入して、さらに代替部品を提案することができます。

4. ファイルをカンマ区切り (CSV) フォーマットで保存します。

回答を価格算出ケースにインポートする

サプライヤの回答ファイルには、価格算出ケースが横方向に表示されます。このため、サプライヤは各コンポーネント部品に対するすべての回答情報を 1 行で記入できます。

それぞれの価格算出ケースは、1 つの数量割引か、または価格期間当たりの 1 つの数量を表します。次の表に、いくつかの異なるアイテムの特定の期間について入力された、数量割引と目標価格を示します。

アイテム番号	Q 4 2002 年 12 月 30 日 数量割引 1 - 数量	Q 4 2002 年 12 月 30 日 数量割引 1 - 目標価格
10-007	1	0.04
10-008	10	12.80
10-009	1	0.04
10-010	10	16.60
10-011	1	0.04
10-012	1	0.09
10-013	5	2.95
10-014	100	122.00

[インポート] ウィザードでは、空白のフィールドは無視されます。価格の値を 0 に設定するには、明示的に 0 を入力する必要があります。

注意 エクスポートされたサプライヤからの回答ファイルの価格値は、ユーザーの通貨設定に基づいてフォーマットされます。Web クライアントで Agile ユーザー プリファレンスを変更するには、[個人設定] > [ユーザー プロファイル] > [プリファレンス] > [編集] の順にクリックします。

サプライヤからの回答フィールドの有効な値

サプライヤからの回答フィールドの中には、特定の値を正確に入力する必要のあるフィールドもあります。フィールドに無効な値を入力した場合は、インポートされません。次の表に、サプライヤからの回答フィールドの中で、特定の値を必要とするフィールドに対する有効な値を示します。

注意 これらのフィールドの値はサプライヤからの回答ファイルのヘッダにも記載されています。

フィールド	有効な値	コメント
入札参加意思	オプションは、[入札]、[入札しない-該当部品なし]、[入札しない-破棄部品]、[入札しない-割当]、[入札しない-その他]、[入札しない-未知の部品]、[未回答] です。	
原産国		有効な国名を入力します。スペルが正しいことを確認してください。
返品・キャンセル不可	はい/いいえ	
販売条件	CFR	運賃込み渡し
	CIF	運賃保険料込み渡し
	CIP	輸送費、保険料込渡し
	CPT	輸送費込み渡し
	DAF	国境持込み渡し
	DDP	引渡関税支払済み
	DDU	引渡関税未払
	DEQ	埠頭持込渡し(関税支払済み)
	DES	本船持込渡し
	EXW	工場渡し
	FAS	船側渡し
	FCA	運送人渡し
	FOB	本船渡し

注意 販売条件の入力については、3文字の略語に加えて、販売条件の完全な語句を使用することもできます。たとえば、「CFR - コスト、運送料」や「CIF - コスト、保険料、運送料」も可能です。英字の値は、すべて大文字で入力します。

通貨換算テーブルをインポートする

Agile では、最新の通貨換算レートを保持しており、このレートによって、選択された会社の通貨に通貨値を変換します。[インポート] ウィザードを使用して、Agile PLM システムで有効なすべての通貨に対する変換レートを更新することができます。通貨換算テーブルをインポートするには、管理者の役割を割り当てられたユーザーとしてログインします。

インポートする通貨換算テーブルは、次の要件を満たしている必要があります。

- Microsoft Excel ファイル、または区切りテキストファイルのいずれかであること。
- 通貨コードと換算係数が含まれている 2 つのカラムがファイルに定義されていること。
- ソースファイルで指定された各通貨が、Agile PLM システムで使用できること。使用できる通貨を参照するには、Java クライアントに管理者としてログインし、[管理] > [システム設定] > [Product Cost Management] > [通貨換算レート] の順に選択します。
- 通貨は必ず 3 文字のコードを使用して指定します。たとえば、EUR および USD はそれぞれユーロと US ドルを表します。通貨コードの完全なリストについては、20 ページの「[通貨の値をインポートする](#)」を参照してください。

次の Agile フィールドを必ずマップします。

- [通貨換算] > [通貨換算レート] > [通貨コード]
- [通貨換算] > [通貨換算レート] > [換算係数]

次の図は、通貨換算テーブルの例を示しています。

	A	B
1	Currency Code	Conversion Factor
2	GBP	0.71
3	FRF	0.82
4	RUR	160.1
5	SGD	2.2
6	INR	47.17
7	JPY	78.05

通貨換算テーブルをインポートするには

1. Microsoft Excel ファイルまたは区切りテキストファイルを使用して、ソースファイルを適切にフォーマットします。
2. [インポート] ウィザードを開始します。
3. [インポート] ウィザードの最初の手順で、[区切り文字テキスト ファイル] または [Excel ワークブック] を選択します。
4. ファイルのパスを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
5. [次へ] をクリックします。
6. [通貨換算] を選択します。[次へ] をクリックします。
7. マッピング ファイルを選択するか、または新しいフィールドマッピングを作成します。
8. [インポート] をクリックしてインポート処理を開始します。

ソーシング プロジェクトへデータをインポートする

扱うトピックは次のとおりです。

■ ソーシング プロジェクトについて.....	77
■ ソーシング プロジェクトから [インポート] ウィザードを開始する.....	77
■ プロジェクトにインポートできるデータ タイプ.....	79
■ プロジェクトからアイテム マスターへ AML を公表する.....	79
■ 数量割引と目標コストをマッピングおよびインポートする.....	79
■ プロジェクトでのリビジョンの処理方法.....	80

ソーシング プロジェクトについて

プロジェクトには、製品ソーシング活動中に収集されるデータが保存されます。バイヤーはプロジェクトを使用して情報収集を行い、見積依頼の準備、サプライヤの割り当て、回答の追跡と分析、また最終価格の交渉などを行うことができます。また、バイヤーはプロジェクト内の AML をクリーンアップしてアイテム マスターに公表することもできます。AML がアイテム マスターに公表されると、今後のあらゆるプロジェクトで利用できるようになります。

次の価格算出ケースのいずれかを使用して、プロジェクトを作成できます。

- 数量割引 - 価格は複数の数量割引に基づいて、製品に対して最適なサプライヤとコンポーネントを判断します。
- 有効期間 - 価格は複数の有効期間(期間単位で複数の数量を定義)に基づいて、製品のライフサイクルを通じて継続したコストを管理します。この価格算出ケースでは、製品コストに関する将来的な見通しを提示して、コストの低減や目標の達成を支援します。

ソーシング プロジェクトから [インポート] ウィザードを開始する

プロジェクトのオブジェクト(アイテム、BOM、AML など)は、アイテム マスターのオブジェクトとは異なります。プロジェクトのオブジェクトには、様々なフィールドのセットがあるため、アイテム マスターのオブジェクトに比べて多数のフィールドマッピングがあります。アイテムをプロジェクトにインポートしても、アイテムはアイテム マスターには自動的にインポートされません。

注意 BOM をプロジェクトへインポートした後で、BOM コンポーネントに対する数量を再計算する必要がある場合があります。詳細は、78 ページの「[ロールアップ数量を計算する](#)」を参照してください。

データを新しいソーシング プロジェクトへインポートするには

1. [作成] > [ソーシング プロジェクト] の順に選択し、[プロジェクト作成] ウィザードを完了します。

2. ウィザードの[アイテムの追加]の手順で、[追加]を選択します。[プロジェクトアイテムの追加] ウィザードが開始されます。
3. [新しいアイテムの作成] で、[インポート]>[次へ]の順に選択します。[インポート] ウィザードが表示されます。ウィザードの指示に従います。

アイテムと BOM を既存のソーシング プロジェクトへインポートするには

1. ソーシング プロジェクトをオープンします。
2. [アイテム] タブをクリックします。
3. [アイテム]>[インポート] の順に選択します。[インポート] ウィザードが表示されます。ウィザードの指示に従います。

注意 [アイテム] タブからインポートするアイテムに BOM と AML の両方がある場合、これらを同時にインポートすることができます。

アイテムと AML を既存のソーシング プロジェクトへインポートするには

1. ソーシング プロジェクトをオープンします。
2. [AML] タブをクリックします。
3. [AML]>[追加/変更]>[インポート] の順に選択します。[インポート] ウィザードが表示されます。ウィザードの指示に従います。

[インポート] ウィザードステップの一覧については、7ページの「[\[インポート\] ウィザードの手順](#)」を参照してください。

レベル テンプレートおよび親一子テンプレートをソーシング プロジェクトにインポートする

レベルテンプレートまたは親一子テンプレートは、次のようにソーシング プロジェクトにインポートできます。

- ウィザードを使用してソーシング プロジェクトを作成し、目的のテンプレートをインポートします。
- 既存のソーシング プロジェクトを検索し、レベルテンプレートまたは親一子テンプレートをそのソーシング プロジェクトにインポートします。
- 外部ファイルからアイテムをインポートします。

レベル テンプレートまたは親一子テンプレートをソーシング プロジェクトにインポートするには

1. 選択した(または定義した) ソーシング プロジェクトで、[アイテム] をクリックします。
ドロップダウン メニューが表示されます。
2. ドロップダウン メニューで [インポート] を選択します。
[インポート] ウィザードのダイアログが表示されます。

注意 レベル テンプレートまたは親一子テンプレートは、区切りテキスト ファイルです。

3. [参照] ボタンを使用してインポートするファイルを検索し、[設定] ボタンを使用してファイルタイプ(レベル テンプレート、親一子テンプレート、または標準テンプレート)を指定します。標準テンプレートとは異なり、レベル テンプレートまたは親一子テンプレートには、[アイテム] フィールドと [数量] フィールドのみ必要です。

ロールアップ数量を計算する

データをプロジェクトへインポートした後で、BOM コンポーネントに対する数量を計算する必要があります。プロジェクトの [アイテム] と [AML] タブのトップで、最後に数量が計算された日付と時刻を表示します。計算された日付と時刻が赤い場合は、 をクリックして数量を再計算する必要があります。

ソーシング プロジェクトでは、BOM コンポーネントではなく、トップ レベルのアセンブリに対して数量を指定します。BOM コンポーネントについては、アセンブリごとの数量 (QPA) を指定します。

プロジェクトにおける各価格算出ケースについて、コンポーネント レベルの数量は、アセンブリの数量と QPA に基づいています。数量を計算する際、プロジェクトは共通アイテムのアセンブリを通して数量を集約します。パートナー分割が指定されている場合、プロジェクトは計算された数量にも分割を適用します。

プロジェクトにインポートできるデータ タイプ

プロジェクトにインポートできるオブジェクト タイプは以下のとおりです。

- プロジェクト アイテム
- プロジェクトの部品構成表 (BOM)
- プロジェクトの承認済み製造元リスト (AML)
- プロジェクト アイテムの添付ファイル

アセンブリ アイテムは、BOM が定義されているアイテムです。BOM が定義されているプロジェクト アイテムに AML を定義することもできます。BOM と AML は同じプロジェクト アイテムにインポートすることができます。

プロジェクトからアイテム マスターへ AML を公表する

プロダクト コンテンツをアイテム マスターからプロジェクトにインポートすることはできますが、アイテムや BOM をプロジェクトからアイテム マスターにコピーすることはできません。ただし、承認済み製造元リスト (AML) は異なります。プロジェクトの AML をアイテム マスターとの比較により確認することができます。また、プロジェクトの AML をクリーンアップすることもできます。AML のクリーンアップが完了したら、AML の変更をアイテム マスターに公表できます。

数量割引と目標コストをマッピングおよびインポートする

プロジェクトに特有の価格算出ケースによっては、1 つのアイテムにつき複数の数量割引をインポートすることも、1 つのアイテムにつき複数の有効期間 (期間単位で複数の数量を定義) をインポートすることもできます。これは、トップ レベルアセンブリのそれぞれの価格期間について、数量割引または数量をインポートできることを意味しています。また、選択した価格算出ケースによっては、数量割引ごとに目標コストをインポートすることも、価格期間ごとに目標コストをインポートすることも可能です。

プロジェクトの価格算出ケースが数量割引に基づいている場合は、最大 6 つの数量割引を選択できます。[マッピング ファイルを編集] ウィンドウでは、プロジェクトの数量割引の数に対して [カバー ページ] > [数量割引] フィールドをマッピングすることができます。

プロジェクトの価格算出ケースが複数の有効期間に基づいている場合は、指定された期間に対して、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウを使用して数量割引および目標コストをマッピングできます。

プロジェクトでのリビジョンの処理方法

プロジェクトには、アイテムの複数リビジョンは保持されません。したがって、プロジェクトにインポート可能なアイテムのリビジョンはプレリミナリ、保留、リリース済みのリビジョンのいずれかです。アイテムを再インポートすると、プロジェクトの以前のアイテムがそのアイテムによって置換されます。そのため、プレリミナリアイテムだけではなく元のリビジョン、現在のリビジョン、または保留中のリビジョンをインポートすることにより、プロジェクト内のリリース済みまたは未リリースのリビジョンを置換することができます。

重要 アイテムをプロジェクトに再インポートする場合、オリジナルアイテムのすべてのデータ (BOM や AML) は新しいデータがインポートされる前に削除されます。このため、データを更新する前に、常に完全な BOM と AML をエクスポートしてからデータを再インポートしてください。また、アイテムをインポートする際は、[タイトル ブロック] > [リビジョン] フィールドを必ずマッピングしてください。これを怠ると、アイテムは初版リビジョンとしてインポートされます。

インポート フィールドを Agile フィールド にマッピングする

扱うトピックは次のとおりです。

■ マッピング ファイルについて	81
■ キーフィールドと必須フィールド	81
■ 設計変更とマッピング ファイルを選択する	86
■ 新規マッピング ファイルを作成する	87
■ マッピング ファイルを再利用する	89
■ マッピング ファイルを編集する	90
■ PDX および aXML パッケージをマッピングする	91

マッピング ファイルについて

データを Agile PLM システムにインポートする場合には、データの配置場所を指定する必要があります。データの配置場所は、[インポート] ウィザードでソースデータのフィールドを Agile のフィールドにマッピングして指定します。この場合、マッピングされたフィールドのみインポートされます。[インポート] ウィザードでは、マッピングされていないソースフィールドはすべて無視されます。

マッピング ファイルは XML ファイルで、その後のインポートセッションのためにデータをマッピングする場合に再利用することができます。ファイルはローカルまたはネットワーク ドライブに保存できます。マッピング ファイルは Agile PLM システムに保存することはできません。

注意 [インポート] ウィザードは、Agile Product Cost Management または Agile Product Collaboration の以前のリリースで作成されたマッピング ファイルはサポートしていません。

キーフィールドと必須フィールド

[キーフィールド] は Agile PLM システムのオブジェクトを一意に識別します。このため、キーフィールドは、新規または既存にかかわらず、すべてのオブジェクトをインポートする必要があります。キーフィールドの例は、部品の [タイトル ブロック] > [番号] フィールドです。実際、ほとんどの Agile PLM オブジェクトのキーフィールドは、オブジェクトの一意の番号を設定するために使用されます。インポートのためにフィールドをマップする際、[マッピング ファイルを編集] キーフィールドは青い太字で表示されます。

下表は [インポート] ウィザードでサポートされているすべてのオブジェクトのキーフィールドを示しています。これらのフィールドをマップする必要があります。

オブジェクト	タブ	キーフィールド
通貨換算	通貨換算	通貨コード
顧客	一般情報	顧客名
		顧客番号 1

オブジェクト	タブ	キー フィールド
デクラレーション	添付ファイル	ファイル ID、ファイル名
	カバー ページ	名前、サプライヤ
	アイテム組成	アイテム番号、アイテム リビジョン
		サブスタンス名
		サブスタンス タイプ
	アイテム	アイテム番号、リビジョン番号
	製造元部品	製造元名
		製造元部品番号
	製造元部品の組成	製造元名
		製造元部品番号
		サブスタンス名
		サブスタンス タイプ
	部品グループの組成	名前
		サブスタンス名
		サブスタンス タイプ
	部品グループ	名前
	含有基準	含有基準
アイテム	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
	BOM	アイテム番号
	適合性	含有基準
	製造元	製造元名
		製造元部品番号
	拠点	拠点の名前
	サプライヤ	サプライヤ、変更番号
	タイトル ブロック	番号
	組成	組成タイプ、変更番号
	サブスタンス	サブスタンス名、サブスタンス タイプ
製造元	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
製造元部品	一般情報	名前
		ファイル ID

オブジェクト	タブ	キー フィールド
		ファイル名
	適合性	含有基準
	組成	組成タイプ 2
	一般情報	製造元名
		製造元部品番号
	サブスタンス	サブスタンス名
	サプライヤ	サプライヤ
部品グループ	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
	適合性	含有基準
	一般情報	名前
	部品	部品番号
	サプライヤ	サプライヤ
	カバー ページ	番号 1
	対象アイテム	アイテム番号
プロジェクトアイテム	AML	製造元名
		製造元部品番号
	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
	BOM	コンポーネント部品番号
	アイテム	番号
公表価格	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
	一般情報	顧客
		アイテム番号
		アイテム リビジョン
		製造拠点
		製造元名
		製造元部品番号
		番号 1
		価格タイプ
		プログラム

オブジェクト	タブ	キー フィールド
		サプライヤ
	価格ライン	価格有効開始日
		価格有効終了日
		数量
		出荷元
		出荷先
見積履歴	一般情報	顧客
		アイテム番号
		アイテム リビジョン
		製造拠点
		製造元名
		製造元部品番号
		番号 1
		価格タイプ
		プログラム
		サプライヤ
	価格ライン	価格有効開始日
		価格有効終了日
		数量
		出荷元
		出荷先
含有基準	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名
	一般情報	名前
	サブスタンス	名前、サブスタンス タイプ
サブスタンス	添付ファイル	ファイル ID
		ファイル名、サブスタンス タイプ
	組成	名前
	一般情報	名前
サプライヤ	部品分類	部品分類
		大陸
		出荷先

オブジェクト	タブ	キー フィールド
	一般情報	名前
		番号 1
	製造元	大陸
		製造元名
		出荷先
プログラム	一般情報	名前
		番号
	アクションアイテム	割り当て先
	ディスカッション	件名
	ユーザー	一般情報のユーザー ID
		ユーザー グループのグループ名
	ユーザー グループ	一般情報の名前
		グループ内のユーザーのユーザー名

注意:

- [番号] フィールドをマップしない場合、またはソース ファイルでデータが提供されていない場合、[インポート] ウィザードは自動採番ソースを使用して、作成された新規オブジェクトに番号を割り当てます。[インポート] ウィザードで使用するデフォルトの自動採番ソースを設定することができます。詳細は、105 ページの「[デフォルトの自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。
- 組成タイプによって、組成にインポートできるサブスタンスのタイプが決まります。
 - サブスタンス組成 – サブスタンスとサブスタンス グループをインポートできます。
 - 均質材組成 – サブパート、マテリアル、サブスタンス グループ、およびサブスタンスをインポートできます。
 - 部品組成 – サブスタンスはインポートできません。

キー フィールドに加え、Agile PLM には必須フィールドもあります。Agile PLM 管理者は、オブジェクトの[ページ 1]([タイトル ブロック]、[カバー ページ]、または[一般情報])、[ユーザー 定義 1]、[ユーザー 定義 2]のフィールドを必須フィールドとして設定することができます。Agile PLM で新規オブジェクトをインポートするには、必須フィールドすべてを完成させる必要があります。ただし、既存のオブジェクトにデータをインポートする場合は、必須フィールドをマップする必要はありません。インポートのためにフィールドをマップする際、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウのすべての必須フィールドは緑の太字で表示されます。

Agile PLM 必須フィールドの完全なリストは、Web クライアントから Agile クラス レポートで印刷できます。

Agile PLM オブジェクトによっては、特別なマッピング要件があります。詳細は、以降のセクションを参照してください。

BOM のマッピング要件

[タイトル ブロック]>[番号] および [BOM]>[アイテム番号] が必須フィールドです。ただし、[BOM]>[見出し番号] および [BOM]>[数量] はオプションのキー フィールドです。[BOM]>[見出し番号] フィールドをマップしない場合は、インポートされるすべてのアイテムの見出し番号として、[BOM] タブに 0 が表示されます。

[BOM] > [数量] フィールドをマッピングしない場合は、[BOM] タブのすべての数量において、Agile PLM 管理者が設定したデフォルトの数量が使用されます。

見積履歴および公表価格のマッピング要件

見積履歴および公表価格には、インポートで使用できる複数の必須およびオプションのキー フィールドがあるため、特別なマッピング要件があります。見積履歴、公表価格、および価格ラインの最低限必要な必須フィールドの詳細は、49 ページの「[見積履歴、公表価格、および価格ラインをインポートする](#)」を参照してください。

マッピング クラスとサブクラス

アイテム、BOM、および AML のインポートでは、2 つのターゲット クラスがあります。これらのクラスは、ソース ファイルに含まれている内容によって、マッピングが必要な場合があります。ソース ファイルに部品とドキュメントの両方が含まれている場合は、マッピングが同じであっても部品クラスとドキュメントクラスの両方をマッピングする必要があります。

オブジェクトに対して [タイプ] フィールドをマッピングしない場合、または特定行の [タイプ] カラムが空白の場合は、オブジェクトが存在しているかどうかに関係なく、オブジェクトのデフォルト タイプが使用されます。たとえば、インポート ファイルにドキュメントが含まれていて、[タイプ] フィールドがマップされていない場合は、インポート プリファレンスでデフォルトのアイテム タイプが選択されていると、ドキュメントが部品としてインポートされることがあります。ターゲット システム内にすでに存在しているインポート ファイルのアイテムでは、インポートで前提とされているデフォルトのタイプがターゲット システム内の既存のオブジェクトと一致しない場合は、タイプの不一致による却下エラーが発生します。

インポート セッションでデフォルト タイプを指定する方法の詳細は、104 ページの「[デフォルト タイプを設定する](#)」を参照してください。

設計変更とマッピング ファイルを選択する

[インポート] ウィザードで [設計変更とマッピング ファイルを選択してください] というページが表示されたら、以下のオプションを使用し設計変更を指定して、マッピング ファイルを選択できます。

- [設計変更] - (デフォルトの) レッドライン モードでインポートしている場合は  をクリックして設計変更を選択してください。オーサリング モードを使用する場合は、設計変更をオプションで指定できます。レッドラインの詳細は、56 ページの「[レッドラインまたはオーサリング モードを使用する](#)」を参照してください。

注意 レッドライン モードからオーサリング モードに変更するには、[プリファレンス] をクリックして [ビジネス ルール オプション] を選択し、[変更モード] フィールドの値を変更します。

- [既存のマッピング ファイルを使用する] - このオプションを選択したら、マッピング ファイルのパスを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。マッピング ファイルは、ローカル システムまたはネットワーク コンピュータ上に保存されています。マッピング ファイルを、Agile PLM サーバに保存することはできません。
- [新規マッピングを作成する] - このオプションを選択したら、[新規マッピングの作成] をクリックして新規マッピング ファイルを定義します。
- [現在定義されているマッピング定義を使用] - このインポート セッション中に選択したマッピング定義を使用します。マッピング ファイルをまだ指定していない場合には、このオプションは表示されません。

- [デフォルトのマッピング定義を使用] - 指定されたファイルタイプについて、デフォルトのフィールドマッピングを使用します。このオプションは、定義済みのテンプレートフォーマットを使用していない Excel ファイルおよび区切りテキストファイルでは使用できません。
 - [選択したマッピングの変更] - 選択したマッピング定義の [マッピング ファイルを編集] ウィンドウが表示されます。
- マッピング定義を選択または作成すると、[インポート] ウィザードによって、その定義が現在のインポートセッション用としてメモリ内に保存されます。この後、[インポート] をクリックしてインポートプロセスを開始するか、[次へ] をクリックして他のオプションを選択します。

新規マッピング ファイルを作成する

新規ソースからデータをインポートする場合は、マッピングファイルを作成する必要があります。マッピングファイルを作成するには、インポートデータからフィールドを選択し、それらのフィールドを Agile フィールドにマッピングします。

新規マッピング ファイルを作成するには

1. [インポート] ウィザードで、[設計変更とマッピング ファイルを選択してください] のページへ進みます。
2. [新規マッピングを作成する] を選択し、[新規マッピングの作成] ボタンをクリックします。[マッピング ファイルを編集] ウィンドウが表示されます。

注意 [マッピング ファイルを編集] ウィンドウにフィールドが表示されない場合は、ソースファイルが不正である可能性があります。ソースファイルが区切りテキストファイルの場合は、ヘッダ行のフィールドに改行またはラインフィード文字を含めないようにします。

3. [インポート フィールド] リストのフィールドをクリックします。

注意 [マッピング ファイルを編集] ウィンドウでは、一度に 1 つのフィールドしか選択できません。ただし、インポートフィールドは複数の Agile PLM フィールドにマッピングできます。

4. [Agile フィールド] リストの対応するフィールドに移動します。マッピングするフィールドをクリックすると、フィールドの横に矢印とマッピング先のインポートフィールドの名前が表示されます。
5. マッピングするフィールドのすべてについて、手順 3 と手順 4 を繰り返します。
6. すべてのフィールドのマッピングが完了したら、[名前を付けて保存] をクリックします。[ファイルのダウンロード] ダイアログ ボックスが表示されます。
7. [このファイルをディスクに保存する] を選択します。[OK] をクリックします。
8. ファイルの名前を入力し、[保存] をクリックします。
9. [完了] をクリックして [マッピング ファイルを編集] ウィンドウを閉じます。

[マッピング ファイルを編集] ウィンドウでフィールドのマッピングを解除するには

マッピング フィールドの右の  をクリックします。

[マッピング ファイルを編集] ウィンドウですべてのフィールドを表示するには

[すべて展開] をクリックします。

[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] フィールドをマッピングする

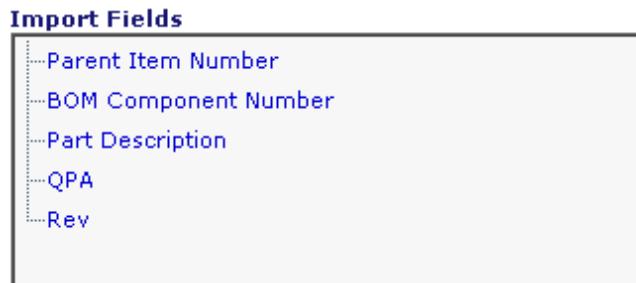
[マッピング ファイルを編集] ウィンドウでは、表示が有効になっている Agile フィールドのみマッピングできます。ソースフィールドを [ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] フィールドへマッピングするには、Agile PLM 管理者は、これらのフィールドの表示を有効に設定する必要があります。

[マッピング ファイルを編集] ウィンドウでのフィールドの並び替え

データを PDX パッケージからインポートする場合は、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウには、インポート フィールドがパッケージの各ノード内でアルファベット順に表示されます。次の図は、PDX パッケージのフィールドで、アイテム サブクラスがどのように並び替えられるかを示しています。

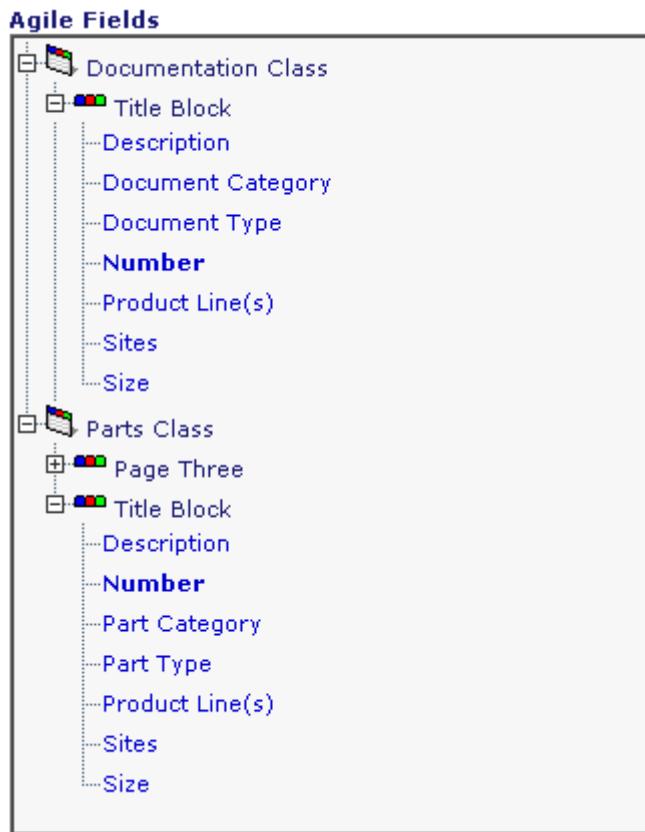


データを区切りテキスト ファイルからインポートする場合には、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウのインポート フィールドは並び替えられません。ただし、次の図で示されているように、フィールドはテキスト ファイルで表示される順番どおりに表示されます。



テキスト ファイルでフィールドをマッピングしやすくするために、データのインポート前にフィールドを Excel などの別のアプリケーションで並び替えることもできます。

Agile フィールドは、次の図で示されているように、それぞれのフィールドが属するタブ別にアルファベット順に並び替えられます。



マッピング ファイルを再利用する

同じソースのデータ (同じソース システムから生成される PDX パッケージなど) を定期的にインポートする場合は、ソース フィールドを Agile フィールドへ正しくマッピングするマッピング ファイルを保持しておくことができます。

マッピング ファイルは柔軟性があり、その後のインポート セッションで再利用できるように設計されています。通常、インポートするソース データは、インポート セッションごとに異なります。ただし、マッピング ファイルに共通のフィールドが含まれている場合は、複数のソース ファイルに対して同じマッピング ファイルを再利用できます。たとえば、すべての PDX オブジェクトに対するマッピングが含まれている 1 つのマッピング ファイルを作成すると、すべての PDX ファイル (アイテムなどの 1 つのタイプのオブジェクトのみが含まれているファイルも含めます) に対して、その特定のマッピング ファイルを再利用することが可能です。対象フィールドがマッピングされているのに、インポート ソース ファイルに存在していない場合、[インポート] ウィザードではそのフィールドが無視されインポートされません。

Agile PLM システムの対象フィールドも、インポート セッションごとに異なります。たとえば、Agile PLM 管理者は、自身のマッピング フィールドで使用されている可能性のあるフィールドを非表示にすることができます。対象フィールドがマッピングされているのに、Agile PLM システムで表示が有効になっていない場合、[インポート] ウィザードではそのフィールドが無視されインポートされません。

インポート ソース ファイルでカラムのヘッダ名を変更した場合は、そのソース ファイルに対して作成したすべてのマッピング フィールドが無効になります。データを正常にインポートするには、名前を変更したすべてのフィールドを再度マッピングする必要があります。[インポート] ウィザードでは、マッピングされているフィールドであっても、ソース フィールドで見つからないものはすべて無視されます。

Agile PLM 管理者がマッピング ファイルで使用されているクラスまたは属性の名前を変更した場合は、[インポート] ウィザードでは、内部 ID を参照して対象フィールドを解決します。したがって、名前が変更されたフィールドを参照しているマッピング ファイルもそのまま有効になります。[マッピング ファイルをデバッグ] ウィンドウには、[インポート] ウィザードが別の名前として解決したすべてのフィールドについて、警告のメッセージが表示されます。

既存のマッピング ファイルを使用するには

1. [インポート] ウィザードで、[設計変更とマッピング ファイルを選択してください] のページへ進みます。
 2. [既存のマッピング ファイルを使用する] を選択します。
 3. マッピング ファイルのパスを指定するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
- 注意** ファイルを選択したら、次に [選択したマッピングの変更] をクリックして、フィールドのマッピングを確認することができます。
4. [次へ] をクリックして続行します。

マッピング ファイルを編集する

インポート ファイルが変更された場合(たとえば、新規データカラムが追加された場合)は、関連付けられているマッピング ファイルを変更する必要があります。変更しない場合、更新されたデータに対してマッピング ファイルが無効になる可能性があります。

マッピング ファイルを編集するには

1. [インポート] ウィザードで、[設計変更とマッピング ファイルを選択してください] のページへ進みます。
 2. [既存のマッピング ファイルを使用する] を選択します。
 3. マッピング ファイルのパスを指定するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
- 注意** マッピング ファイルのファイル拡張子は **xml** です。
4. [選択したマッピングの変更] をクリックします。[マッピング ファイルを編集] ウィンドウが表示されます。マッピング ファイルを再利用して新規ソース ファイルをインポートする場合は、[インポート] ウィザードでは、マッピング ファイルがソース データと正しく一致していることが確認されます。マッピング ファイルにエラーが生じる場合は、ウィンドウの上部に [エラー/警告] ボックスが表示されます。ボックスのエラーまたは警告をクリックすると、関連フィールドが強調表示されます。
 5. マッピングを編集します。
 6. [名前を付けて保存] をクリックしてファイルを保存します。[ファイルのダウンロード] ダイアログ ボックスが表示されます。
 7. [このファイルをディスクに保存する] を選択します。[OK] をクリックします。
 8. ファイルの名前を入力し、[保存] をクリックします。
 9. [完了] をクリックして [マッピング ファイルを編集] ウィンドウを閉じます。

PDX および aXML パッケージをマッピングする

[変更とマッピング ファイルを選択してください。] ページで [デフォルトのマッピング定義を使用] を選択すると、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウに、Agile の主要なフィールドに対するデフォルトのマッピングが表示されます。カスタム フィールドはデフォルトではマッピングされないため、手動でマッピングする必要があります。

デフォルトのマッピングは、ソース ファイルに存在する PDX および aXML エレメントのみに割り当てられています。たとえば、ファイルにアイテムのみが含まれ、その他のタイプのインポートデータは存在しない場合は、[マッピング ファイルを編集] ウィンドウには、アイテム フィールドに関するデフォルトのマッピングのみが表示されます。後に再利用するために保存されているマッピング ファイルは、アイテムをインポートする場合にのみ使用できます。

すべてのタイプのインポート データに対してマッピングするマッピング ファイルを作成するには、[インポート] ウィザードの [インポートするコンテンツを選択] ページですべてのオブジェクトを選択します。このようにすると、選択したソース ファイルにすべてのオブジェクトが含まれているかどうかに関係なく、すべてのオブジェクトに対してデフォルトのマッピングが割り当てられます。

変換定義ファイルを作成する

扱うトピックは次のとおりです。

▪ 変換定義ファイルについて	93
▪ 必要なカラムおよびカラムヘッダ	94
▪ PREFIX、SUFFIX、または REPLACE の操作を使用する	95
▪ ソース パターン フィールドで正規表現を使用する	95
▪ 空白フィールドをデフォルト値で置き換える	96
▪ 変換テンプレートを作成する	97
▪ 異なるタイプのデータを変換する	97
▪ 変換定義ファイルを再利用する	100

変換定義ファイルについて

サプライヤやパートナーが作成したソース データには、互換性のないデータが含まれていることがあります。そのような場合、そのデータは使用している Agile PLM システムでは無効であるか、整合性がありません。インポート先のシステムと互換性を持たせるには、データをインポートする前にいくつかのフィールドの値を変換する必要があります。

変換定義ファイルは、特に PDX や aXML パッケージのデータをインポートする際に便利です。通常、PDX や aXML パッケージは読み取り専用です。また、アーカイブ ファイルに含まれている値は変更できません。PDX や aXML パッケージにデータの不整合がある場合、変換ファイルを使用して修正する必要があります。

変換定義ファイルは、カンマ区切りのテキスト ファイルです。オプションでファイルのテキスト文字列を二重引用符 ("") を使用して修飾することができます。ファイルにはインポート データの変換に必要なフィールドを必ず含めるようにします。

[インポート] ウィザードでは、変換定義ファイルはオプションです。インポート先のシステムに合わせてソース データを修正する必要がない場合、[インポート] ウィザードの [変換定義ファイルの選択] 手順は省略できます。

インポート セッションで発生するすべての変換は、インポート ログ ファイルに記録されます。

注意 [インポート] ウィザードでは、Agile Product Cost Management または Agile Product Collaboration の以前のリリースで作成された変換定義ファイルはサポートされません。

必要なカラムおよびカラム ヘッダ

変換定義ファイルには以下の 6 つの列が必要です。

カラム ヘッダ	説明
オブジェクトタイプ名	インポート先システムのクラスまたはサブクラスの名前(例: 部品クラス)。
プロパティ グループ名	プロパティが含まれているグループ(またはタブ)の名前(例: タイトル ブロック)。
プロパティ名	対象フィールドの名前。
操作	変換の操作。有効な操作は「REPLACE」、「PREFIX」および「SUFFIX」。
ソース パターン	ソースの値全体を指定したフィールドと一致させる文字列。正規表現を使用してテキストのパターンと一致させることができます。指定するパターンは大文字と小文字を区別します。
パラメータ値	[ソース パターン] 文字列の変換に使用する置換、接頭辞、または接尾辞のテキスト。

注意 オプションで [コメント] カラムを追加すると、ファイルの各行をドキュメントに表示することもできます。

また、オプションで [オブジェクトタイプ ID]、[プロパティ グループ ID]、および [プロパティ ID] の 3 つのカラムを含めることもできます。これらのカラムは変換テンプレートに自動的に表示されます。変換テンプレートは [インポート] ウィザードで生成することができます。これらのカラムは必須ではありませんが、[オブジェクトタイプ名]、[プロパティ グループ名]、および [プロパティ名] のカラムを、内部の固有な Agile ID 番号にマップします。カスタム フィールドの名前などの Agile のフィールド名が変更された場合は、ID 列で変換定義ファイルの有効性が確認されます。

注意 カラム名は変更できません。指定した名前と正確に一致している必要があります。名前が一致していない場合は、変換定義テーブルは無効になります。

カラムの順序を変更しても問題はありませんが、その場合には必ずカラム ヘッダも変更します。たとえば、カラム A を [プロパティ名] というカラムに変更することができます。

ヘッダ行(カラム名を含む行)はファイルの先頭行にする必要があります。最初のデータ カラムの左側は空白カラムにはできません。たとえば、Excel ファイルでは表は列 A から始まります。

インポートする 1 つの値について、変換を 1 回しか実行できません。たとえば、同じ値に対して、PREFIX および SUFFIX の両方の変換を使用することはできません。また、変換を連続させて値を繰返し修正することもできません。

変換は、変換定義ファイルの上から下に順番に実行されます。インポートするフィールドの値に対して最初の変換のみが使用され、同じ値に対する他の変換は無視されます。

PREFIX、SUFFIX、または REPLACE の操作を使用する

変換定義ファイルを使用すると、値に接頭辞や接尾辞を追加したり値を変換したりすることができます。

PREFIX 操作では、指定した文字列が値の先頭に追加されます。

操作	ソース パターン	パラメータ値	結果
PREFIX	12345	P-	12345 -> P-12345
PREFIX	1	P-	1 -> P-1

SUFFIX 操作では、指定した文字列が値の末尾に追加されます。

操作	ソース パターン	パラメータ値	結果
SUFFIX	12345	-S	12345 -> 12345-S
SUFFIX	1	-S	1 -> 1-S

REPLACE 操作では、値全体が置換されます。値の一部を置換することはできません。値を空白の文字列で変換することもできません。

操作	ソース パターン	パラメータ値	結果
REPLACE	12345	67890	12345 -> 12345-S
REPLACE	1	Agile	1 -> Agile

ソース パターン フィールドで正規表現を使用する

変換定義ファイルの [ソース パターン] フィールドの値を指定する場合に、正規表現を使用してテキストのパターンと一致させることができます。正規表現では、シンボルまたは構文要素を使用して1つ以上の文字を表すことができます。

最も簡単な正規表現は、IPN100012などのリテラルのテキスト文字列です。[ソース パターン] フィールドの英数字のすべての文字はソース データの同じ文字と一致します。

特別なシンボルを使用して、ワイルドカードなどの一般化された方法でテキストパターンと一致させることもできます。次の表に、[ソース パターン] フィールドで使用できる正規表現のシンボルを示します。

シンボル	説明
ピリオド(.)	任意の1文字
アスタリスク(*)	直前の文字の0回以上の繰り返し
プラス(+)	直前の文字の1回以上の繰り返し
疑問符(?)	直前の文字が0回または1回現われる

注意 指定するソース パターンはインポートする値全体と一致している必要があります。一致していない場合、値は変換されません。

正規表現により指定できる変換タイプが拡張されますが、これらのものはオプションです。便利でなければ使用する必要はありません。次の表に、正規表現のいくつかの例を示します。

ソース パターン	一致する値
.*	すべての値(空の文字列を含む)。
.+	すべての値(空の文字列を除く)。
A.*	A で始まる値。
AGILE.*	AGILE で始まる値。
.*AGILE	AGILE で終わる値。
.*AGILE.*	AGILE を含む値。
P0012+	P0012、P00122、P001222、P0012222 など。ただし、P001 とは一致しません。
P0012*	P001、P0012、P00122、P001222、P0012222 など。
P0012?	P001 または P0012。
P00*20	P020、P0020、P00020、P000020、P0000020 など。
P00.+20	P00020、P00120、P00220、P00320、P00123456789020。ただし、P020 とは一致しません。

空白フィールドをデフォルト値で置き換える

変換テンプレートを使用して、マップされているソースファイルの空白フィールドにデフォルトの値を指定することができます。これは変換テンプレートで特に便利です。たとえば、ソースデータで[製品ライン]フィールドが空白の場合にも、空白フィールドをマップして、Agile PLM システムのデフォルトの製品ラインの値にインポートするように設定することができます。

デフォルト値で置換する空白のフィールドは、マップする必要があることに注意してください。マップしない場合は、[インポート] ウィザードで、マップされていないフィールドがスキップされます。

空白のフィールドを表すには、[ソース パターン] の文字列で^\$(キャレットとドル記号)を使用します。[パラメータ値]には、対象フィールドの有効な値を指定する必要があります。

次の図は、ソースファイルの空白の[製品ライン]フィールドがデフォルト値の Ultra でどのように置換されるかを示しています。

	A	B	C	D	E	F	G
1	ObjectType	PropertyGroup	Property	Operation	SourcePattern	ParameterValue	Comments
2	Parts Class	Title Block	Product Line(s)	REPLACE	^\$	Ultra	If the Product Lines field is empty, set it to Ultra

変換テンプレートを作成する

[インポート] ウィザードでは、変換テンプレートを生成できます。変換テンプレートは、インポート先の Agile PLM システムに対する適切なフィールドが定義されているカンマ区切りのテキストファイルです。

変換テンプレートを作成するには

- [インポート] ウィザードの [変換定義ファイルを選択] ページで、[変換を適用する] を選択します。
- [変換テンプレートのダウンロード] をクリックします。[ファイルのダウンロード] ダイアログ ボックスが表示されます。
- ファイルをローカル コンピュータに保存します。
- [変換テンプレートのダウンロード] ポップアップ ウィンドウで、[OK] をクリックします。

変換テンプレートのデフォルトのファイル名は `TransformTemplate.csv` です。これはテキスト エディタまたはスプレッドシート プログラムで編集可能なカンマ区切りファイルです。

変換テンプレートを作成したら、以下のカラムに入力します。

- 操作
- ソース パターン
- パラメータ値

[インポート] ウィザードは、操作が定義されていない変換定義ファイルの行をスキップします。ある行の操作を指定した場合は、その行のソース パターンとパラメータの値も指定する必要があります。

[コメント] カラムはオプションで、各変換をドキュメントに表示する場合に使用します。最も右にある 3 つのカラム、[オブジェクトタイプ ID]、[プロパティ グループ ID]、および [プロパティ ID] は編集できません。これらのカラムには、各フィールドの内部使用の Agile PLM ID 番号が示されています。

異なるタイプのデータを変換する

変換するフィールドとデータのタイプによって、変換の考察事項は異なります。このセクションでは、アイテム番号、製造元名、および製品ラインを変換する際の問題について説明します。

以下のトピックでは、変換定義ファイルを使用して異なるタイプのインポートデータを修正し、使用している Agile PLM システムで有効にする方法を説明します。

- アイテム番号を変換する
- マルチリストの値を変換する
- 製造元名を変換する
- AML データを変換する

注意 aXML ファイルまたは PDX パッケージから添付ファイルをインポートする場合は、変換定義ファイルを使用して添付ファイルの名前を変更することはできません。

アイテム番号を変換する

Agile PLM システムでは、[タイトルブロック]>[番号] フィールドによってアイテムを一意に特定します。同様に、アセンブリのコンポーネント部品は、[BOM]>[アイテム番号] フィールドによって特定されます。これらの両方のフィールドに同じアイテム番号を使用できます。

部品構成表 (BOM) をインポートし、アイテムの[タイトルブロック]>[番号] の値を変換する場合は、[BOM]>[アイテム番号] フィールドに対して同じ変換を使用する必要があります。

[パラメータ値] に空白を指定しないでください。[インポート] ウィザードでは空白フィールドはスキップされることに注意してください。

次の図に、変換定義ファイルの例を示します。この変換定義ファイルでは、[BOM]>[アイテム番号] と [タイトルブロック]>[番号] フィールドの両方の値について、それぞれのアイテム番号に接頭辞を追加して変更します。

	A	B	C	D	E	F
1	ObjectType	PropertyName	PropertyName	Operation	SourcePattern	ParameterValue
2	Parts Class	BOM	Item Number	PREFIX	.*	DE-
3	Parts Class	Title Block	Number	PREFIX	.*	DE-

マルチリストの値を変換する

マルチリスト フィールドの値がカンマ区切りの文字列として表示されている場合でも、Agile PLM システムでは値の完全なリストに対して文字列を検証します。マルチリスト フィールドの値を変換するには、値の区切り文字列全体ではなく、個別のリスト値に対してソースおよびターゲットの値を指定します。

アイテムの [製品ライン] フィールドは、マルチリスト フィールドの一例です。値をマルチリスト フィールドにインポートするには、値はカンマ区切りの文字列でなければなりません([インポート] ウィザードで [プリファレンス] ボタンをクリックして、マルチリスト区切り文字に対してセミコロンなどの別の文字を指定することができます)。たとえば、製品ラインの値は次のようにになります。

Analog, Tools, Memory

これらの値を、「Analog & Interface Products」、「Development Tools」、および「Memory Products」にそれぞれ変更する場合について考えてみます。次の図のように、変換テンプレートでそれぞれの値に対して単純に REPLACE 操作を指定することができます。

	A	B	C	D	E	F
1	ObjectType	PropertyName	PropertyName	Operation	SourcePattern	ParameterValue
2	Parts Class	Title Block	Product Line(s)	REPLACE	Analog	Analog & Interface Products
3	Parts Class	Title Block	Product Line(s)	REPLACE	Tools	Development Tools
4	Parts Class	Title Block	Product Line(s)	REPLACE	Memory	Memory Products

重要 製品ラインの値は、Agile のすべてのリストと同様に大文字/小文字が区別されます。

製造元名を変換する

承認済み製造元リスト、製造元、または製造元部品をインポートする場合に、ソースデータの製造元名が Agile PLM システムで使用されている製造元名と正確に一致しないことがあります。製造元名が少しでも異なる場合、変換定義ファイルを使用して修正する必要があります。無効な製造元名を変換しないと、CPQ や Compaq のように、同じ製造元を示す複数のオブジェクトが残る可能性があります。

次の図に、製造元をインポートする場合に製造元名を修正する変換定義ファイルを示します。ソースファイルには 6 つの異なる製造元名があります。CPQ、DELL、FLEX、MARSHALL、SLCTRН、および TI です。変換定義ファイルには、これらの名前に対する 6 つの置換値が指定されています。

	A	B	C	D	E	F
1	ObjectName	PropertyName	PropertyName	Operation	SourcePattern	ParameterValue
2	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	CPQ	Compaq
3	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	DELL	Dell Computer Corporation
4	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	FLEX	Flextronics
5	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	MARSHALL	Marshall Industries
6	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	SLCTRН	Solectron
7	Manufacturers Class	General Info	Name	REPLACE	TI	Texas Instruments

次に、AML の製造元名を修正する類似の変換定義ファイルを示します。

	A	B	C	D	E	F
1	ObjectName	PropertyName	PropertyName	Operation	SourcePattern	ParameterValue
2	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	CPQ	Compaq
3	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	DELL	Dell Computer Corporation
4	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	FLEX	Flextronics
5	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	MARSHALL	Marshall Industries
6	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	SLCTRН	Solectron
7	Parts Class	Manufacturers	Mfr. Name	REPLACE	TI	Texas Instruments

AML データを変換する

PDX パッケージから AML データをインポートする場合に変換定義ファイルを使用するときは、AML 行、製造元、および製造元部品の対応する属性が同じ値を持つように、関連オブジェクト (製造元部品番号、製造元名) のフィールドに対して同じ変換を含める必要があります。

変換定義ファイルを再利用する

すべてのタイプのインポートデータについて、データを正しく修正する変換する変換定義ファイルを保持しておくことができます。製造元によって、製品データを入力するための規則が異なる可能性があるため、製造元ごとに変換定義ファイルを作成しておくと便利です。

注意 変換定義ファイルにはわかりやすい名前を付けて、特定の製造元や Agile PLM システムと簡単に関連付けられるようにします。そうしないと、間違った変換定義ファイルを使用してしまい、インポートデータを不適切に修正してしまう可能性があります。

既存の変換定義ファイルを使用するには:

1. [インポート] ウィザードの [変換定義ファイルを選択] ページで、[変換を適用する] を選択します。
2. 変換定義ファイルのパスを入力するか、[参照] をクリックしてファイルを選択します。
3. [次へ] をクリックして続行します。

インポート プリファレンスを設定する

扱うトピックは次のとおりです。

■ プリファレンスについて	101
■ パースと検証オプションを設定する	101
■ ビジネス ルール オプションを設定する	102
■ デフォルト タイプを設定する	104
■ デフォルトの自動採番ソースを設定する	105

プリファレンスについて

[インポート] ウィザードには、いくつかのプリファレンスの設定が含まれています。これらの設定は、ウィザードの任意の手順で設定することができます。これらのプリファレンスによって、[インポート] ウィザードの動作が設定されます。[インポート] ウィザードのプリファレンスは、Agile PLM クライアント セッション中は持続しますが、それぞれのユーザー プロファイルでは、永続的に保存されません。

インポート プリファレンスを設定するには

- [インポート] ウィザードの左下端の [プリファレンス] ボタンをクリックします。[プリファレンスの設定を指定] ウィンドウが表示されます。
- リストから、[パースと検証オプション]、[ビジネス ルール オプション]、[デフォルト タイプ]、または[自動採番ソース] のいずれかのプリファレンス グループを選択します。
- プリファレンスの設定を選択し、[OK] をクリックします。

パースと検証オプションを設定する

[パースと検証オプション] プリファレンス グループを選択すると、以下のオプションが表示されます。

ログ変換	[ログ変換] チェックボックスでは、インポート ログ ファイルにすべての値の変換を記録するかどうかを設定します。大規模なファイルをインポートする場合に迅速に結果を得るには、[ログ変換] をオフにします。
マルチリスト区切り文字	[マルチリスト区切り文字] リストでは、マルチリスト フィールドの値を区切るためにインポート ファイルで使用する文字を指定します。セミコロン(デフォルト)、カンマ、または垂直バーのいずれかを選択できます。
カスケード区切り文字	[カスケード区切り文字] リストでは、カスケード リスト フィールドの値を区切るためにインポート ファイルで使用する文字を指定します。垂直バー(デフォルト)、カンマ、またはセミコロンのいずれかを選択できます。
空白確認アクション	空白確認アクション プリファレンスでは、[インポート] ウィザードで使用が禁止されているフィールド内の空白文字(空白、ラインフィード、新規行、タブ)をどのように処理するかを設定します。値を却下するには[却下](デフォルト)を、空白文字を削除する場合は[消去]を選択します。

大文字小文字の確認アクション	Agile フィールドには、大文字/小文字の値を区別するように設定できるものがあります。大文字小文字確認アクションプリファレンスでは、フィールドに不正な大文字/小文字が含まれている値を、[インポート] ウィザードでどのように処理するかを設定します。値を正しい文字に変換する場合は[変換](デフォルト)を、値を却下する場合は[却下]を選択します。
長さ確認アクション	長さ確認アクションプリファレンスでは、フィールドで最大長を超える値を[インポート] ウィザードでどのように処理するかを設定します。値を却下する場合は[却下](デフォルト)を、最大長を超えた分の値を削除するには、[省略]を選択します。

ビジネス ルール オプションを設定する

[ビジネス ルール オプション] プリファレンス グループを選択すると、以下のオプションが表示されます。

スマートルール警告違反動作	Java クライアントで[警告]に設定されている以下のスマートルールに対してのみ適用されます。[可] や[不可]などの他の値に設定されたスマートルールには適用されません。
	<ul style="list-style-type: none">▫ 重複見出し番号▫ 重複アイテム番号▫ 重複参照指示▫ 製造元部品に複数アイテム▫ 価格ライン有効期間の重複
[BOM]>[参照指示] フィールドで指定された参照指示の数が[BOM]>[数量] フィールドの値と一致していない場合は、Agile アプリケーションサーバでも警告を発行します。この自動警告は設定できないため、技術的に言えばスマートルールではありませんが、このプリファレンスの設定で処理されます。	
[オブジェクトを却下する](デフォルト)を選択すると、スマートルール警告をトリガーするオブジェクトは却下されます。[オブジェクトを承認する]を選択すると、スマートルール警告は記録されますが、オブジェクトはインポートされます。	
参照指示の数量不一致動作	[参照指示の数量不一致動作] ドロップダウンリストには、インポートを承認または却下する以下のようなオプションがあります。
	<ul style="list-style-type: none">▫ [承認]を選択すると、参照指示の数量不一致警告は無視され、データがインポートされます。▫ [却下]を選択すると、参照指示の数量不一致警告がある場合はインポートに失敗し、警告がインポート ログ ファイルに記録されます。

変更モード	<p>[インポート] ウィザードでは、アイテム、BOM、AML、価格、および価格ラインをレッドラインモードまたはオーサリングモードでインポートできます。</p>
	<p>デフォルト設定のレッドラインモードでは、[インポート] ウィザードはレッドラインプロセスを使用して、BOM、AML、および価格ライン行を更新します。変更されたフィールドは赤でハイライトされます。リビジョンのステータスに関係なく設計変更が必要です。保留中の変更やリリース済みのリビジョンとともにデータを任意のアイテムや価格にインポートする場合は、レッドラインモードである必要があります。</p>
	<p>オーサリングモードでは、[インポート] ウィザードは BOM、AML、および価格ライン行の更新にレッドラインプロセスを使用しません。したがって、設計変更は必要ありません。データをプレリミナリアイテムにインポートしても、リビジョンを進めたくない場合は、オーサリングモードを使用すると便利です。</p>
	<p>注意: オーサリングモードを選択しても、[変更番号] フィールドで設計変更を指定することができます。設計変更を指定すると、保留中の変更またはリリース済みのリビジョンが定義されているアイテムがレッドラインになります。設計変更の [対象アイテム] タブに追加されます。設計変更を指定しないと、保留中の変更またはリリース済みのリビジョンが定義されているすべてのアイテムが [インポート] ウィザードで却下されます。</p>
変更番号	<p>変更番号プリファレンスでは、インポートセッションに対する設計変更を指定することができます。設計変更は、保留中の変更またはリリース済みのリビジョンが定義されているアイテムや価格をレッドラインにする場合に使用します。</p>
	<p>注意: [変更モード] プリファレンスでレッドラインを選択した場合は、変更番号が必要です。</p>
レッドラインモード動作	<p>[レッドラインモード動作] のプリファレンスでは、アイテムをレッドラインモードでインポートした際に、どのアイテムが変更の [対象アイテム] タブに追加されるかを決定することができます。すべてのアイテムを変更に追加、新規アイテムのみを追加、またはレッドラインが必要な新規アイテムと既存アイテムを追加することができます。</p>
	<p>次のいずれかのオプションを選択します。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> □ [新規/既存アイテムを変更へ] (デフォルト) - レッドラインされた新規アイテムおよび既存アイテムを変更の [対象アイテム] タブへ追加します。インポートデータに含まれる既存アイテムのうち、レッドラインされていないものは、変更へ追加されません。 □ [すべてのアイテムを変更へ] - アイテムが新しいかどうか、またアイテムがレッドラインされたかどうかにかかわらず、インポートデータのすべてのアイテムを変更の [対象アイテム] へ追加します。 □ [新規アイテムのみを変更へ] - 新規アイテムのみを変更の [対象アイテム] タブへ追加します。レッドラインされたかどうかにかかわらず、既存アイテムは変更へ追加されません。
	<p>注意: BOM と AML のフィールドは再定義できます。また、変更管理下の [タイトルブロック] フィールド ([タイトルブロック] > [説明]、[タイトルブロック] > [ライフサイクルフェーズ]、および [タイトルブロック] > [リビジョン] など) も再定義できます。</p>
BOM および AML のインポート動作	<p>[BOM および AML のインポート動作] のプリファレンスは、BOM および AML をインポートする際に使用する動作を指定します。すべてのアイテム (BOM コンポーネントを含む) または BOM または AML を持つアイテムのみをインポートすることができます。次のいずれかのオプションを選択します。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> □ [アセンブリ、AML、コンポーネントをインポート] (デフォルト) - BOM コンポーネントを含むすべてのアイテムをインポートします。 □ [アセンブリおよび AML のみをインポート] - BOM または AML を持つアイテムのみをインポートします。BOM コンポーネントはインポートされません。

複数行更新モード	[複数行更新モード] プリファレンスは、ソース データをどのように使用して、BOM、AML、価格ラインなどのターゲットテーブルを更新するかを定義します。ここでは、[すべて置換](デフォルト) または [追加/更新のみ] を選択できます。[すべて置換] を選択した場合は、ターゲットデータがソース データで完全に置換されます。ソース データに示されていないターゲットデータの行はすべて削除されます。[追加/更新のみ] を選択した場合は、ソース データの新規行が追加され既存の行が変更されますが、削除される行はありません。BOM、AML、および価格ラインデータの一部をインポートする場合は、[追加/更新のみ] 設定が役立ちます。
価格数量割引のデフォルト	価格オブジェクトには、数量割引可という名前の [一般情報] フィールドがあります。ここでは、異なる数量によって価格が割引されるかどうかを定義します。[インポート] ウィザードで価格ラインのインポートの際に、新規の価格オブジェクトを自動的に作成した場合は、価格数量割引のデフォルト プリファレンスに基づいて、[数量割引可] フィールドの値が設定されます。
	[インポート] ウィザードで作成された新規の価格オブジェクトで、数量割引を可能にする場合は、[はい] を選択します。それ以外の場合は、[いいえ](デフォルト) を選択します。
	注意: 既存の価格オブジェクトに対して [数量割引可] の設定を変更することはできません。この値は、新規の価格に対してのみ設定できます。
参照指示範囲文字	ハイフン (-)(デフォルト)、バックスラッシュ (\)、スラッシュ (/)、または垂直バー () を選択します。範囲文字は、連続した値に展開される参照指示値を区切るために使用されます。たとえば、R4-R6 は R4,R5,R6 に展開されます。
	PDX パッケージまたは Agile XML (aXML) ファイルから BOM をインポートする場合は、参照指示の範囲文字にハイフンを指定してください。参照指示の詳細は、24 ページの「 BOM 参照指示を使用する 」を参照してください。
参照指示の区切り文字	カンマ (,) (デフォルト)、セミコロン (;)、または垂直バー () を選択します。区切り文字は、展開する必要のない参照指示の値を区切れます。例 :R1,R2,R3。
	PDX パッケージまたは Agile XML (aXML) ファイルから BOM をインポートする場合、参照指示の区切り文字にカンマを指定してください。

デフォルト タイプを設定する

Agile PLM システムで新規のオブジェクトを作成するには、オブジェクトのサブクラスを指定する必要があります。Agile PLM システムごとに、異なるサブクラスを持つように設定することができます。新規オブジェクトのインポートを簡潔にするために、インポート可能なそれぞれのオブジェクトに対してデフォルトのサブクラスを使用するように指定できます。マップされているフィールド([部品クラス]>[タイトルブロック]>[部品タイプ]など)によってサブクラスが指定されていない場合は、[インポート] ウィザードは、デフォルト タイプを使用して新規オブジェクトを作成します。

[インポート] ウィザードが BOM、AML、および価格ラインに対する親アイテムを自動的に作成する場合も、デフォルト タイプが使用されます。

[インポート] ウィザードに対するデフォルト タイプを設定するには

1. [インポート] ウィザードの左下端の [プリファレンス] ボタンをクリックします。[プリファレンスの設定を指定] ウィンドウが表示されます。
2. [デフォルト タイプ] を選択します。
3. 各オブジェクト タイプに対してデフォルトのサブクラスを指定し、[OK] をクリックします。

デフォルトの自動採番ソースを設定する

自動採番ソースは、あらかじめ定義されている連続番号で、多数の Agile クラスのオブジェクトについて自動的に採番する場合に使用します。[番号] フィールドが必須でないか、ソースデータに指定されていない場合、[インポート] ウィザードでは自動採番ソースを使用して、作成された新しいオブジェクトに番号を割り当てます。[インポート] ウィザードでは、公表価格、見積履歴、製品サービス依頼、品質変更依頼、顧客、およびサプライヤを自動的に作成する場合に、選択されている自動採番ソースを使用してオブジェクトに番号を割り当てます。たとえば、顧客名のみが含まれているソースデータで新規の顧客をインポートする場合は、[インポート] ウィザードで顧客クラスに対してデフォルトの自動採番ソースを使用して、それぞれの顧客に番号を割り当てます。

注意 Agile PLM 管理者は Java クライアントを使用して新しい自動採番ソースを定義できます。

[インポート] ウィザードに対するデフォルトの自動採番ソースを設定するには

1. [インポート] ウィザードの左下端の [プリファレンス] ボタンをクリックします。[プリファレンスの設定を指定] ウィンドウが表示されます。
2. [自動採番ソース] を選択します。
3. 各タイプに対してデフォルトの自動採番ソースを指定し、[OK] をクリックします。

インポート後の作業

扱うトピックは次のとおりです。

■ インポート セッションのステータスを確認する	107
■ インポート処理をキャンセルする	107
■ インポート ログを読み取る	108
■ トラブルシューティング	108

インポート セッションのステータスを確認する

大容量のデータをインポートしている場合は、[インポート] ウィザードでデータを処理するのに多少時間がかかる場合があります。[インポート] ウィザードでは、記録の処理中に、インポートまたは却下された記録の連続カウントが保持されます。また、処理される各オブジェクトに関連するメッセージも表示されます。

インポート セッションのデータ処理がすべて終了すると、[インポート] ウィザードでは警告とエラー メッセージがログ形式にフォーマットされ、ユーザーはそのログを画面上で表示したりファイルに保存したりすることができます。

インポート処理をキャンセルする

[インポート] ウィザードで[インポート] をクリックすると、データのインポートが開始されます。このインポート処理はいつでもキャンセルできます。

実行中のインポート処理をキャンセルするには

1. [インポート ステータス] ページから、[キャンセル] をクリックします。
2. 「実行中のインポートをキャンセルしますか? 保存されていないデータは失われます。」というメッセージが表示されます。
3. [OK] をクリックします。[インポート要約レポート] ページが表示されます。

インポート処理をキャンセルすると、[キャンセル] をクリックした時点ですでにインポートされているデータはすべてデータベース内に保持されます。また、データはバッチでインポートされ、[インポート] ウィザードは、キャンセルの結果としてインポート処理を停止する前に、対象のバッチのインポートを終了します。[インポート要約レポート] ページの[処理記録の要約] セクションには、承認されたオブジェクトの数が表示されます。

インポート ログを読み取る

[インポート] ウィザードで [インポート] をクリックすると、インポートサーバによりデータの処理が開始されます。データの処理が完了すると、ログが表示されます。ログには、次のセクションが含まれています。

- [時刻情報] - インポートセッションの所要時間を示します。
- 処理記録の要約 - Agile PLM システムにインポートされた記録の数と却下された記録の数を示します。
- [メッセージ要約] - 各オブジェクトに対して生成されたメッセージを示します。

ログ ファイルを印刷するには

メッセージ要約を右クリックして [印刷] を選択します。

インポート ログを XML ファイルに保存するには

1. [インポート要約レポート] ページで、[ログを保存] をクリックします。[ファイルのダウンロード] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. [このファイルをディスクに保存する] を選択します。[OK] をクリックします。ファイル名を入力するか、デフォルトのファイル名を使用します。LogFile.xml. [保存] をクリックします。

注意 LogFile.xml は XML ファイルです。このタイプのファイルは、大部分のアプリケーションで表示用として理想的ではありません。このため、独自の XSL テンプレートを使用してログファイルからカスタム レポートを作成することもできます。

インポート ログを HTML ファイルに保存するには

1. [インポート要約レポート] ページを右クリックして [ソースの表示] を選択します。対象ページの HTML ソースがメモ帳で表示されます。
2. [ファイル] > [名前を付けて保存] の順に選択し、HTML ファイルを保存します。
3. Web クライアントまたは Java クライアントに戻るには、[完了] をクリックします。

トラブルシューティング

データを Agile PLM システムへインポートする際に問題がある場合は、このセクションを読んでください。

一般的なエラー メッセージ

次の表は、データを Agile PLM システムへインポートする際に示される一般的なエラー メッセージに関する追加情報です。

問題の領域	エラー メッセージ	原因
一般	インポートデータのキー フィールドが空白であるため、レコードをインポートできませんでした。	<p>このエラーは、次の原因によって発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ マッピングファイルが不正です。キー フィールドをマップする必要があります。 □ ソース ファイルがタブで区切られていますが、[インポート] ウィザードのフィールドの区切り文字がカンマに設定されています。
一般	「テキスト」の値を適切なデータ タイプ (java.lang.Double) に変換できませんでした。	テキストの値を数値フィールドにインポートしようとしました。
テキスト値	[AttributeName] フィールドで [Character Set Name(s)] の文字セットが有効になっています。	インポートしようとしているテキスト値に、フィールドの文字セットで不正とみなされた 1 つ以上の文字が含まれています。
日付の値	値「12.10.2003」を適切なデータ タイプ (java.util.Date) に変換できませんでした。	ソース ファイルの日付の値のフォーマットが、ユーザーのプロファイルで指定されている推奨日付フォーマットに一致していません。
数値	値 "で小数点検証を実行中にデータタイプの不一致が発生しました。正しいデータタイプは java.lang.String ですが、実際のデータタイプは java.lang.String でした。	空白の行を数値フィールドにインポートしようとしました。
通貨値	値を適切なデータ タイプ (通貨) に変換できませんでした。	空白の行を通貨フィールドにインポートしようとしました。
Excel ファイル	エラーが発生しました。選択されたファイルは有効な区切りテキストファイルではありません。有効な DTF には、1 つのヘッダ行、および少なくとも 1 つのデータ行が含まれていなければなりません。	[インポート] ウィザードは、データのインポート前に Excel ファイルを区切りテキストファイルへインポートするため、このメッセージでは区切りテキストファイルについて言及しています。選択された Excel ソース ファイルの最初の行は空白にすることはできません。必ずヘッダ行の正しい場所を指定してください。
マッピング	ルート エレメントに先行するドキュメントのマークアップは、正しいフォーマットでなければなりません。	このエラーは、正しくフォーマットされていない XML (区切りテキストファイルなど) のマッピング ファイルを選択した場合に表示されます。[インポート] ウィザードで保存されているマッピング ファイルを選択する必要があります。
サプライヤ	無効な大陸/国/地域名です。	大陸/国/地域の組合せで表現される地理的な場所として、不正な値を選択しました。
サプライヤ	あなたが作成中の提示は、広義の製造元提示ですでにカバーされています。	広義の提示ですでに対象となっている [出荷先] の場所に対して、新しいサプライヤ提示をインポートすることはできません。
マッピング	オブジェクトのプロパティはマップされていますが、キーが完全にマップされていません。	価格、サプライヤ、顧客などの一部のオブジェクトには、マップする必要があるキー フィールドがあります。現在のマッピングでは、必要なすべてのキー フィールドをマップしていません。

問題の領域	エラー メッセージ	原因
価格ライン	有効開始日を有効終了日より後にはすることはできません。	終了日付よりも後の開始日付で、価格ラインをインポートしようとした。
価格ライン	[価格ライン] は重複する価格ラインであるため、価格オブジェクトに対して数量割引が許可されていない場合には処理できません。	価格オブジェクトの [数量割引可] フィールドが [いいえ] に設定されているため、異なる [出荷先]、[出荷元]、[終了日]、[開始日] の値の各セットに対して、1つの価格ラインしかインポートできません。

空白のフィールドをインポートする

[インポート] ウィザードを使用する場合は、破壊的な操作は実行できません。既存の Agile データは必ず保持され、破損することはありません。したがって、空白の値を空白以外の Agile フィールドにインポートすることはできません。[インポート] ウィザードでは、空白のソース フィールドを無視します。

注意 ソース データに対して変換を適用して、空白の値を空白以外の値に変更することができます。

必須フィールドすべてをマッピングする

オブジェクトに対しデータをインポートする場合、既存のオブジェクトにデータをインポートする場合でも、常に必須フィールドすべてをマップする必要があります。これには、[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] の必須フィールドも含まれます。アイテムの BOM テーブルを更新しようとしている場合、すでに [ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] で入力されている必須フィールドは更新しないでください。このような場合、[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] の必須フィールドを、ソース データの空のカラムにマップすることができます。前述のとおり、[インポート] ウィザードでは、空白のソース フィールドを無視します。

親/子フィールドを構成する

一部のフィールドには、他の親フィールドと子の関係にあるものがあります。子フィールドには、親フィールドの値が反映されます。Agile PLM システムの管理者は、システムが正しく機能するように、親/子フィールドが必ず同じように構成されるようにします。

親一子フィールドの例として、アイテムの [タイトルブロック.リビジョン] フィールドおよび設計変更の [対象アイテム.新規リビジョン] フィールドがあります。Agile PLM の管理者は、これらの両方のフィールドを同じように構成する必要があります。異なる場合には、データのインポート時に問題が発生することがあります。たとえば [タイトルブロック.リビジョン] フィールドにすべての文字が含まれるように設定する場合、[対象アイテム.新規リビジョン] フィールドに「アルファベット(大文字)」のみが含まれるように設定することはできません。このようにしないと、レッドラインモードでアイテムをインポートする際に問題が発生します。

親一子フィールドのもうひとつの例として、アイテムの [タイトルブロック.番号] フィールドと、変更の [対象アイテム.アイテム番号] フィールドがあります。これらのフィールドが異なって構成されている場合は、アイテムをインポートする際に問題が発生することがあります。

サプライヤ提示をインポートする

サプライヤ提示をインポートする場合は、[インポート] ウィザードで、[出荷先] の場所または地理的な値のいずれかに基づいた格付が存在するかどうかを判断します。この判断は、ソース ファイルのインポート前にサプライヤのステータスをチェックして行います。ソース ファイルに矛盾する提示が定義されている場合は、予期しない結果になることがあります。以下に例を示します。

ACME という名前のサプライヤに部品分類提示が定義されていないとします。Agile PLM サーバでは、[出荷先] の場所として San Jose および Milpitas が定義されています。ここで 2 つの提示を使用してソース ファイルをインポートしてみましょう。

E	F	G	H	I	J
Commodity	Continent	Country/Area	Region	Ship-To	Rating
CPU	North America	United States	California		Approved
CPU				San Jose	Offered Active

[インポート] ウィザードは、地理的な値に基づいて最初の提示を作成します。[出荷先] の場所である San Jose は最初の提示地域の California に含まれているため、2 番目の提示は却下されます。広義の提示によってすでに対象となっている場所の提示は、作成できないことに注意してください。最終的な結果として、広義の 1 つの提示と 2 つの格付が作成されます。San Jose と Milpitas の格付は、提示によって定義されている California 地域に位置付けられ、これらの 2 つの格付は「Approved」の値になります。

対応策: 同じ地域内に位置付けられている提示に対する異なる格付をインポートするには、提示およびその格付を 2 つの異なるインポート処理でインポートします。

スマートルールを管理する

Agile PLM サーバは、テーブル全体の更新後ではなく、テーブルの各行の更新後にスマートルールに違反していないかどうかをチェックします。BOM、製造元、または価格ラインのテーブルをレッドラインモードでインポートする場合に、[複数行更新モード] プリファレンスが「すべて置換」に設定されていると、これによって問題が発生することがあります。このような場合には、検証する前にテーブル全体を更新することをお薦めします。

対応策: インポートでスマートルールの問題を回避するには、Agile PLM 管理者が Agile Java クライアントを使用して、以下のスマートルールを「不可」から「警告」にする必要があります。

- 重複見出し番号
- 重複アイテム番号
- 重複参照指示
- 製造元部品に複数アイテム
- 価格ライン有効期間の重複

[インポート] ウィザードで、[スマートルール警告違反動作] プリファレンスを「オブジェクトを承認する」に設定します。このように設定すると、スマートルール警告が表示される可能性のあるオブジェクトをインポートすることができます。

保留中またはリリース済みのアイテムと価格を更新する

保留中またはリリース済みのアイテムおよび価格を(レッドラインモードではなく)オーサリングモードでインポートするときに、アイテムまたは価格のみをインポートして変更管理に関するフィールドを何も更新しない場合は、変更(ECO または PCO)を指定しないでください。[タイトルブロック.ライフサイクルフェーズ] など、変更管理に関するフィールドを更新する場合は、オブジェクトをインポートするための変更を指定する必要があります。

ハンドル重複記録のインポート方法

パフォーマンス上の理由により、[インポート] ウィザードはレコードを 100 のバッチにグループ化し、処理のためサーバに送信します。サーバがバッチの処理を完了すると、クライアントは次の 100 個のバッチをサーバへ送信します。[インポート] ウィザードは、重複記録が 1 つのバッチや、別のバッチに含まれていても、重複記録を拒否しません。重複記録が同じバッチに存在する場合、一致する記録と組み合わせられ、1 つのオブジェクトとしてカウントされます。重複記録が 2 つの異なるバッチに存在する場合、インポートされた記録のカウントは 1 つずつ増えます。

データをエクスポートする

扱うトピックは次のとおりです。

■ [エクスポート] ウィザード	113
■ データのエクスポートに関する新機能	113
■ エクスポートの権限と役割	114
■ エクスポート可能なオブジェクトクラス	114
■ エクスポートファイルのフォーマット	116
■ Microsoft Excel ファイルおよびテキスト ファイルへのエクスポートに関するガイドライン	117
■ aXML および PDX パッケージについて	118
■ [エクスポート] ウィザードを開始する	119
■ [エクスポート] ウィザードのステップ	119
■ フィルタを指定する	120
■ PLM オブジェクトをエクスポートする	123
■ 見出しを指定する	124
■ ファイルをダウンロードする	124
■ エクスポートしたファイルを表示する	125

[エクスポート] ウィザード

Agile PLM には、シンプルな [エクスポート] ウィザードが用意されており、これを使用して、選択したオブジェクトからデータを抽出し、それを Microsoft Excel のファイル、カンマ区切り (CSV) のテキスト ファイルまたは PDX パッケージにエクスポートできます。[エクスポート] ウィザードは、Agile Web クライアントまたは Java クライアントから起動できます。データのエクスポートは簡単です。エクスポート ファイルをコンピュータにダウンロードし、それを電子メールや FTP を使用してサプライチェーン パートナーに送信したり、別のアプリケーションにインポートしたりすることができます。

注意 PDX パッケージは、PDX 対応のアプリケーションでのみ表示またはインポート可能です。Agile には、Agile eXpress という無料の PDX ビューアが用意されています。

データのエクスポートに関する新機能

今回のリリースの Agile PLM では、インポート コンポーネントに新機能または拡張機能は導入されていません。次に、リリース 9.2.2.2 で公表された新機能と拡張機能の一覧を参考までに示します。

- PSR オブジェクトのエクスポートのサポート — エクスポート可能なすべての PSR オブジェクトのエクスポートをサポートします。サポートされているテーブルとコンポーネントは、[カバー ページ]、[ユーザー 定義 1]、[ユーザー 定義 2]、[対象 アイテム]、[関連 PSR]、[関係]、[添付 ファイル]、および [履歴] です。サポートされているファイル形式は、CSV/Excel と aXML です。123 ページの [「PSR、QCR、およびサプライヤ オブジェクトをエクスポートする」](#) を参照してください。
- QCR オブジェクトのエクスポートのサポート — エクスポート可能なすべての QCR オブジェクトのエクスポートをサポートします。サポートされているテーブルとコンポーネントは、[カバー ページ] (ペー

ジ 1])、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[対象アイテム]、[関係]、[添付ファイル]、および[履歴]です。サポートされているファイル形式は、CSV/Excel と aXML です。123 ページの「[PSR、QCR、およびサプライヤオブジェクトをエクスポートする](#)」を参照してください。

- サプライヤオブジェクトのエクスポートのサポート—エクスポート可能なすべてのサプライヤオブジェクトをサポートします。サポートされているテーブルとコンポーネントは、[一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[コンタクトユーザー]、[RFX ルーティング]、[製造元]、[部品分類]、[PSR]、[関係]、[添付ファイル]、および[履歴]です。サポートされている形式は、CSV/Excel と aXML です。123 ページの「[PSR、QCR、およびサプライヤオブジェクトをエクスポートする](#)」を参照してください。
- [履歴] ページへのエクスポートイベントの記録—オブジェクトをエクスポートすると、そのイベントが[履歴] ページに記録されるため、[履歴] ページを開いたときにエクスポートイベントを表示できます。これは、エクスポートモジュールの新機能です。以前のリリースでは、このアクションは記録されませんでした。
- BOM をエクスポートする際のレベル数の指定—これは、エクスポートモジュールの新機能です。以前のリリースでは、BOM をエクスポートする際のオプションとして、BOM の第 1 レベルをエクスポートするか、すべてのレベルをエクスポートするかを選択していました。今回のリリースでは、エクスポートするレベルを指定できるようになりました。たとえば、2 または 3 などを指定できます。121 ページの「[BOM フィルタ](#)」を参照してください。

エクスポートの権限と役割

[エクスポート] ウィザードを使用するには、エクスポート権限が必要です。エクスポート権限は、次のサポートされている役割に含まれています。

- (限定) マテリアル プロバイダ
- 変更分析者
- 適合性管理者
- コンテンツ マネージャ
- アイテム コンテンツ マネージャ
- 價格管理者
- 價格マネージャ
- 製品コンテンツ読み取り専用
- ソーシング管理者

エクスポート可能なオブジェクト クラス

次の表は、[エクスポート] ウィザードでエクスポートが可能なオブジェクトのタイプの一覧です。

基本クラス	クラス
アイテム	部品
	ドキュメント クラス
製造元	製造元

製造元部品	製造元部品
価格	見積履歴
	公表価格
変更	設計変更 (ECO)
	変更要求 (ECR)
	期限付き設計変更クラス
	製造元依頼 (MCO)
	価格変更依頼 (PCO)
	拠点変更依頼 (SCO)
	出荷停止クラス
デクラレーション	均質材のデクラレーション
	部品のデクラレーション
	IPC 1752-1 デクラレーション*
	IPC 1752-2 デクラレーション*
	JGPSSI デクラレーション*
	サブスタンスのデクラレーション
	適合のサプライヤデクラレーション
ディスカッション	ディスカッション
部品グループ	部品分類
	部品ファミリ
プログラム	アクティビティ (ルート プログラムの場合のみ)
プログラム サービス依頼	不具合レポート クラス
	PR (問題レポート)
品質変更依頼	検証
	是正予防処置
含有基準	含有基準
サブスタンス	マテリアル
	サブパート
	サブスタンス グループ
	サブスタンス
サプライヤ	サプライヤ
ユーザー	ユーザー
ユーザー グループ	ユーザー グループ

* このデクラレーションクラスでは、特別なエクスポートおよびインポートコマンドが提供されます。これらのコマンドによって、サプライヤはデータを他の Agile PLM システムと統合したり、適合性リクエストフォームを Microsoft Excel や Adobe Reader などの他のクライアントで完成できます。61 ページの「[特別なエクスポートおよびインポートコマンドを使用してデクラレーションを完成する](#)」を参照してください。

エクスポート ファイルのフォーマット

Agile PLM データは、Microsoft Excel、カンマ区切りのテキスト、PDX パッケージ、または aXML パッケージの各フォーマットにエクスポートできます。次の表では、各フォーマットでエクスポート可能なオブジェクトを説明します。

オブジェクト	Excel/CSV	PDX	aXML
アイテム	はい	はい	はい
製造元	はい	はい	はい
製造元部品	はい	はい	はい
変更	はい	はい	はい
価格	はい		はい
デクラレーション	はい		はい
部品グループ	はい		はい
含有基準	はい		はい
サブスタンス	はい		はい
プログラム	はい		
プログラム サービス依頼	はい		はい
品質変更依頼	はい		はい
サプライヤ	はい		はい
ディスカッション	はい		はい
ユーザー	はい		はい
ユーザー グループ	はい		はい

PDX および aXML パッケージには、テキストデータに加え、添付ファイルとレッドラインを含めることができます。

注意 [エクスポート] ウィザードで作成された CSV ファイルには、Agile PLM の [インポート] ウィザードを使用してインポートすることのできない追加ヘッダ情報が含まれます。これらのファイルから Agile PLM にデータをインポートするには、[インポート] ウィザードの [区切りテキスト ファイル設定] ダイアログ ボックスでヘッダ行を正しく設定する必要があります。

Microsoft Excel ファイルおよびテキスト ファイルへのエクスポートに関するガイドライン

データを Microsoft Excel ファイルへエクスポートすると、单一のワークシートになります。データをテキスト (CSV) ファイルへエクスポートすると、カンマ区切りのデータファイルになります。いずれのファイル形式の場合も、Microsoft Excel で開いて、データをセル形式で表示することができます。

Web クライアントを使用してデータを Microsoft Excel ファイルおよびテキスト ファイルへエクスポートする場合は、次のガイドラインに従ってください。

- エクスポートできるのは、单一のオブジェクトまたは複数のオブジェクトです。各オブジェクトのタブは区切りテキストとして、テキスト ファイル内に順々に出力されます。複数のオブジェクトをエクスポートした場合は、エクスポート ファイルにオブジェクトが順々に追加されます。
- エクスポートできるのは、含まれているオブジェクトのタブに表示されている情報のみです。たとえば、ある BOM の 1 つの部品をエクスポートすると、エクスポートされたファイルには、その部品の [BOM] タブの情報が格納されますが、実際の BOM のアイテムは格納されません。
- 次のオブジェクトは追加できません。
 - 削除されたオブジェクト
 - 必要な権限が付与されていないオブジェクト
 - エクスポート ファイルにすでに存在するオブジェクト
- [添付ファイル] タブの情報は、テキスト ファイルへエクスポートできますが、実際の添付ファイルはエクスポートできません。実際の添付ファイルをサポートしているのは、PDX ファイルおよび aXML ファイルのみです。
- エクスポートできるのは、アイテムの [拠点] タブ、およびアイテム、製造元、製造元部品の [使用箇所] タブです。
- アイテムをフィルタする際に [製造元タブ] を選択し、BOM のエクスポート対象レベル数を選択した場合、エクスポート ファイルには、その BOM の選択したレベル数に関する AML 情報が格納されます。
- エクスポート ファイルに BOM および AML の両方のデータを含めた場合、エクスポートされたファイルには、AML データと BOM データが交互に出力されます。
- アイテムは、次に示すように、BOM 階層内での位置に関係なくレベルテンプレート フォーマットでエクスポートできます。
 - a. Web クライアントで、アイテム (部品など) を選択します。
 - b. [アクション] > [Microsoft Excel] > [Excel へエクスポート] (または [テンプレートのダウンロード]) の順に選択します。

タイトル ブロック、BOM、および製造元タブ データが格納された Excel ファイルがエクスポートされます。

aXML および PDX パッケージについて

Agile Extensible Markup Language (aXML) 形式は、Agile PLM のビジネススキーマの XML 表現です。aXML には、Agile PLM で管理されているすべての製品コンテンツが含まれます。転送依頼が発行されると、aXML ファイルを含む ZIP ファイルと添付書類が作成されます。PDX (Product Data Exchange) パッケージには、アイテムまたは変更の詳細、BOM データ、製造元情報、図面、および他の添付ファイルなどの製品コンテンツが含まれています。PDX パッケージが Agile パッケージオブジェクトと異なる点は、PDX 1.0 規格に準拠する XML ベースのドキュメントであることです。PDX パッケージは、XML フォーマットの構造化データをエンコードするための業界標準フォーマットに基づいています。この標準では、アプリケーションに依存せずに製品コンテンツを説明することができます。PDX (Product Data Exchange) パッケージには、アイテムまたは変更の詳細、BOM データ、製造元情報、図面、および他の添付ファイルなどの製品コンテンツが含まれています。PDX パッケージが Agile パッケージオブジェクトと異なる点は、PDX 1.0 規格に準拠する XML ベースのドキュメントであることです。PDX パッケージは、XML フォーマットの構造化データをエンコードするための業界標準フォーマットに基づいています。この標準では、アプリケーションに依存せずに製品コンテンツを説明することができます。

aXML および PDX パッケージを使用すると、Agile システムから他のシステムにデータを送信できます。データをコンピュータにダウンロードしたり、これらのパッケージを電子メールまたはFTP で送信することもできます。PDX パッケージの場合は、Agile eXpress などの PDX 対応アプリケーションにインポートできます。

DTD へのリンクなど、PDX の詳細は次の Web ページを参照してください。

<http://webstds.ipc.org/2571/2571.htm>

ユーザー、Web クライアント、および Agile サーバ間で伝達されるデータは(合法な場合)暗号化されており、サプライ チェーン パートナーは互いのパッケージのコンテンツを表示できないため、各 aXML または PDX パッケージ内の情報は安全に保護されます。許可されていないユーザーによるパートナー情報へのアクセスを防ぐために、Agile 管理者には、ログイン権限、ディスカバリ権限、および読み取り権限を設定できます。

注意 Web クライアントでは、aXML または PDX パッケージを作成できますが、表示することはできません。

aXML および PDX パッケージへのエクスポートに関するガイドライン

Web クライアントを使用してデータを aXML または PDX パッケージへエクスポートする場合は、次のガイドラインを使用してください。

- データを PDX パッケージへエクスポートするにはエクスポート権限が必要です。
- 削除されたオブジェクト、適切な権限のないオブジェクト、または [抽出するオブジェクト] テーブルにすでに追加されているオブジェクトは追加できません。
- Web クライアントでは、アイテムの最新リリースのリビジョンに直接アクセスできます。また、バックリビジョンまたは保留中のリビジョンにアクセスすることもできます。
- 変更オブジェクトをエクスポートすると、カスタムフィルタを使用して、レッドラインをエクスポートし、影響を受けたアイテムの BOM と AML を変更することができます。123 ページの「[対象アイテムのレッドライン BOM と AML をエクスポートする](#)」を参照してください。
- PDX パッケージには [拠点] および [使用箇所] タブ情報が含まれていますが、これらは <拠点> や <使用箇所> などの独自の要素なしで、追加属性としてエクスポートされます。
- PDX ファイルへのエクスポートを選択した場合、アイテムと製造元部品の [適合性] タブはエクスポートされません。これは PDX パッケージにのみ該当します。

- Agile eXpress は、アイテムの [拠点] タブ、またはアイテム、製造元、製造元部品の [使用箇所] タブはサポートしていません。これは PDX パッケージにのみ該当します。

[エクスポート] ウィザードを開始する

[エクスポート] ウィザードは、次のいずれかの方法で、Web クライアントまたは Java クライアントから開始できます。

Java クライアント

- エクスポートするオブジェクトを開いて、[ツール] > [エクスポート] の順に選択します。

Web クライアント

- [ツール] > [エクスポート] の順に選択します。
- エクスポートするオブジェクトを開いて、[アクション] > [エクスポート] の順に選択します。
- エクスポート可能なオブジェクトを検索し、[検索結果] ページで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択して、[ツール] > [エクスポート] の順に選択します。

注意 検索結果からは任意のオブジェクトを選択することができますが、[エクスポート] ウィザードでは、すべてのオブジェクトタイプがサポートされているわけではありません。

[エクスポート] ウィザードのステップ

このセクションでは、[エクスポート] ウィザードのステップについて説明します。ほとんどのステップはオプションです。残りのステップが完了していなくても、任意のステップでエクスポートファイルをダウンロードするよう選択できます。

ファイルにデータをエクスポートするには

1. [エクスポート] ウィザードを開始します。前述されている 119 ページの「[\[エクスポート\] ウィザードを開始する](#)」を参照してください。

[抽出するオブジェクト] ページが表示されます。[アクション] > [エクスポート] の順に選択して [エクスポート] ウィザードを開始した場合、または検索結果でオブジェクトを選択してから [エクスポート] ウィザードを開始した場合、このページにはいくつかのオブジェクトがすでに表示されています。

2. [エクスポート先] フィールドのドロップダウンリストを使用して、PDX パッケージ、aXML、Excel、またはテキスト (CSV) ファイルのいずれにエクスポートするかを指定します。
3. [拠点] フィールドで拠点を選択します。すべての拠点のデータをエクスポートするには、[すべて] を選択します。

注意 [拠点] フィールドを使用できるのは、Agile システムに拠点のサーバライセンスがある場合のみです。

4. リストにオブジェクトを追加する必要がない場合は、ステップ 6 へ進みます。オブジェクトを追加するには、[追加] をクリックします。

[オブジェクトの追加] ダイアログが表示されます。

5. 該当するオブジェクトを検索します。

6. [完了] をクリックし、エクスポートファイルにオブジェクトを追加します。
7. 必要な場合は、[リビジョン] カラムの値を調整します。
8. オブジェクトを検索してすべてのオブジェクトをエクスポートファイルへ追加したのち、[次へ] をクリックして [フィルタ] ページを表示します。
9. フィルタ機能を使用すると、エクスポートファイルに追加する情報を指定できます。フィルタの詳細は、120 ページの「[フィルタを指定する](#)」を参照してください。
 - あらかじめ定義されているフィルタを使用するには、[保存されたフィルタ] を選択し、使用するフィルタをドロップダウンリストから選択します。フィルタの詳細を表示するには、 をクリックします。
 - この処理に対してカスタムフィルタを定義するには、[カスタマイズ] を選択します。これを選択すると、この後に、ファイルの各オブジェクトタイプについてのフィルタ定義を指定するステップが示されます。
10. [次へ] をクリックして、フィルタの選択ステップから先に進みます。
11. [カスタマイズ] を選択した場合は、それぞれの [フィルタ] ページで、ファイルに含める情報を選択し、[次へ] をクリックして [見出しの定義] ページへ進みます。
12. ファイルタイプと説明を入力し、[次へ] をクリックします(テキストファイルへエクスポートする場合は、ファイル上部にヘッダ情報が表示されます)。[要約] ページが表示されます。
13. エクスポートファイルの内容を確認します。
14. すべてが完了したら、[エクスポート] をクリックしてエクスポートファイルをコンパイルおよびダウンロードします。テキストファイルにエクスポートする場合は、現在のユーザーのログインプロファイル設定に従って、エクスポートファイルのエンコードタイプが設定されます。通貨の設定は、Web クライアントまたは Java クライアントを使用して表示または変更できます。
 - Web クライアントでは、[設定] > [ユーザー プロファイル] > [プリファレンス] > [編集] の順にクリックします。
 - Java クライアントでは、[設定] > [現在のユーザー] > [プリファレンス] の順にクリックします。
15. [閉じる] をクリックして、[ファイル ダウンロード] ウィンドウを閉じます。

注意

オブジェクトの [アクション] メニューまたはグローバルエクスポートからオブジェクトを aXML フォーマットでエクスポートする場合は、エクスポートファイルを .axml.zip 拡張子で保存できます。.axml.zip 拡張子なしでファイルを保存するには、[名前を付けて保存] ダイアログの [名前を付けて保存] タイプ オプションを [すべてのファイル] に変更し、[保存] をクリックします。これによって、ファイルが .aXML フォーマットで保存されます。

16. 最後に [終了] をクリックし、[エクスポート] ウィザードを閉じます。

フィルタを指定する

フィルタ機能を使用すると、エクスポートファイルに追加する情報を指定できます。Agile 管理者によって定義されている保存されたフィルタを使用することも、カスタムフィルタを作成することもできます。

保存されたフィルタを使用する

[エクスポート] ウィザードの [フィルタの選択] ステップで [保存されたフィルタ] を選択した場合は、定義されているフィルタリストから対応可能なすべてのオブジェクトタイプを選択することができます。これらのフィ

ルタは、Agile 管理者により、Agile Java クライアントを使用して定義されます。詳細は、『Agile PLM 管理者ガイド』の「Agile Content Service の設定」の章を参照してください。

選択したフィルタの詳細を表示するには、対応する  ボタンをクリックします。[保存されたフィルタ] オプションを選択しても、使用するフィルタを選択しない場合、[エクスポート] ウィザードではデフォルトのカスタマイズフィルタが使用されます。詳細は、122 ページの「[デフォルトのカスタムフィルタ](#)」を参照してください。

アイテムと変更の[エクスポート] フィルタリストには、スーパークラス(アイテムおよび変更)のフィルタのみが含まれています。クラスに対して特別に定義されているフィルタ(部品、ドキュメント、ECO、MCO など)は、エクスポートフィルタリストには含まれていません。これは、たとえばエクスポートファイルに ECO と ECR が含まれている場合には、選択した変更フィルタが両方のオブジェクトに適用されることを意味します。同様に、エクスポートファイルに部品とドキュメントが含まれている場合は、選択したアイテムフィルタが両方のオブジェクトに適用されます。

BOM フィルタ

エクスポートファイルに BOM 情報を含める場合は、BOM 情報のレベルを次のオプションから指定する必要があります。

- [タブのみ](管理者によって設定されている保存されたフィルタ) または [BOM タブ](カスタムフィルタ)-すべてのフォーマットで、BOM タブ自体の情報、および BOM タブのアイテム(第 1 レベルのみ)に対する参照のみが含まれます。この BOM オプションのみを選択すると、BOM アイテム自体は含まれません。
- [タブとアイテム]
 - [タブとアイテム]、[すべてのレベル](管理者によって設定されている保存されたフィルタ) または [BOM アイテム]、[すべてのレベル](カスタムファイル)-PDX および aXML フォーマットの場合は、BOM のすべてのレベルのすべてのアイテムが含まれます。CSV フォーマットの場合、[BOM] タブのすべてのレベルにあるアイテムへの参照は含まれますが、アイテム自身は含まれません。
 - [タブとアイテム]、[BOM レベル](管理者によって設定されている保存されたフィルタ) または [BOM アイテム]、[BOM レベル](カスタムフィルタ)-PDX および aXML フォーマットの場合は、BOM の指定されたレベル(1、2、... 最後)のアイテムが含まれます。サブアセンブリの子コンポーネントは含まれません。CSV フォーマットの場合、BOM タブの指定されたレベルのアイテムに対する参照が含まれますが、アイテム自体は含まれません。

カスタム フィルタを作成する

カスタム フィルタでは、特定のタブを指定し、選択したオブジェクトの各タイプについてエクスポートすることができます。

カスタム フィルタを作成するには

1. [エクスポート] ウィザードの [フィルタ] ページで [カスタマイズ] をクリックします。
2. [次へ] をクリックします。
3. 選択されたオブジェクトの各タイプについて、ウィザードのページが順番に表示されます。オブジェクトのそれぞれのタイプについて、エクスポートファイルに含める情報のチェックボックスを選択し、[次へ] をクリックします。

注意 デフォルトのカスタム フィルタを使用するには、各フィルタ ページで [次へ] をクリックします。

デフォルトのカスタム フィルタ

デフォルトのカスタム フィルタは、[カスタマイズ]を選択して、設定を変更せずにフィルタの各ステップを進んだ場合に使用されるフィルタと同じです。

使用するコンテンツのフィルタを指定せずにエクスポートファイルを作成した場合、[エクスポート] ウィザードは次のガイドラインに従って作成されます。

- ウィザードのステップ1でエクスポートファイルをダウンロードすると、エクスポートされるコンテンツはデフォルトのカスタム フィルタに基づいてフィルタされます。
- ウィザードのステップ2でエクスポートファイルをダウンロードすると、そのステップで行った選択に従ってコンテンツがフィルタされます。この場合に[カスタマイズ]を選択しても、これらのフィルタを定義するステップへ進まない場合は、デフォルトのカスタム フィルタが使用されます。[保存されたフィルタ]を選択しても、使用するフィルタを選択しない場合、[エクスポート] ウィザードではデフォルトのカスタム フィルタが使用されます。

デフォルトのカスタム フィルタを使用すると、エクスポートファイルには次の情報が含まれます。

- アイテム - [タイトル ブロック] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[BOM] タブ(および[BOM]のすべてのレベルのアイテム)、[製造元] タブ(およびエクスポートファイルがPDX パッケージの場合はそのタブの製造元部品)、[アイテムの価格]、[拠点] タブ(エクスポートファイルがテキストファイルの場合)、および[添付ファイル] タブ(およびエクスポートファイルがPDX ファイルの場合は添付ファイル)。
- 製造元部品 - [一般情報] タブ(およびエクスポートファイルがPDX パッケージの場合はそのタブの製造元)、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[添付ファイル] タブ(およびエクスポートファイルがPDX ファイルの場合は添付ファイル)
- 製造元 - [一般情報] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[添付ファイル] タブ(およびエクスポートファイルがPDX ファイルの場合は添付ファイル)
- 変更 - [カバー ページ] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[対象アイテム] タブ(およびエクスポートファイルがPDX ファイルの場合はそのタブのアイテム)、[添付ファイル] タブ(およびエクスポートファイルがPDX ファイルの場合は添付ファイル)
- 価格 - [一般情報] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[価格 ライン]、[添付ファイル] タブ
- サブスタンス - [一般情報] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[組成]、[添付ファイル] タブ
- デクラレーション - [カバー ページ] タブ、[アイテム]、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[アイテム BOS(含有物質明細)]、[製造元部品]、[製造元部品 BOS(含有物質明細)]、[部品グループ]、[部品グループ BOS(含有物質明細)]、[適合性]、[添付ファイル] タブ
- 含有基準 - [一般情報] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[サブスタンス]、[添付ファイル] タブ
- 部品グループ - [一般情報] タブ、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]、[適合性]、[サプライヤ]、[添付ファイル] タブ
- プログラム - [一般情報] タブ、[依存関係の依存対象]、[チーム]、[依存関係の必須対象]、[ディスカッション]、[アクションアイテム]、[ユーザー定義1]、[スケジュール]、[ユーザー定義2]
- 製品サービス依頼 - [一般]
- 品質変更依頼 - [一般]
- ディスカッション - [ディスカッション]、[ユーザー定義1]、[ユーザー定義2]

- ユーザー - [一般情報] タブ、[ユーザー定義 1]、[プリファレンス]、[ユーザー グループ]
- ユーザー グループ - [一般情報] タブ、[ユーザー定義 1]、[ユーザー]、[ユーザー定義 2]

添付ファイルのエクスポート時にフィルタを指定する

aXML および PDX の場合、選択したタブ リストに [添付ファイル] タブがある場合は、[添付ファイル オプション] を選択できるため、[タブのみ] または [タブとファイル] を選択できます。[タブとファイル] を選択した場合は、エクスポート出力ファイルに含めるファイル拡張子のカンマ区切りリストを指定できます。エクスポートの対象をファイルタイプでフィルタすると、BOM タイプデータをサプライヤにエクスポートするときに、CAD 図などの特定のファイルを除外するオプションが提供されます。

PLM オブジェクトをエクスポートする

次の各セクションでは、これらのオブジェクトに対してサポートされている各ファイル形式のエクスポートについて説明します。

PSR、QCR、およびサプライヤ オブジェクトをエクスポートする

オブジェクト タイプを選択した後は、選択した PLM オブジェクトをエクスポートする手順とオプションは基本的に同じです。サポートされているテーブルとコンポーネントは、次のとおりです。

- 製品サービス依頼 - [カバー ページ (ページ 1)]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[対象アイテム]、[関連 PSR]、[関係]、[添付ファイル]、および [履歴]。サポートされているファイル形式は、CSV/Excel と aXML です。
- 品質変更依頼 - [カバー ページ (ページ 1)]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[対象アイテム]、[関係]、[添付ファイル]、および [履歴]。サポートされているファイル形式は、CSV/Excel と aXML です。
- サプライヤ - [一般情報]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2]、[コンタクト ユーザー]、[RFX ルーティング]、[製造元]、[部品分類]、[PSR]、[関係]、[添付ファイル]、および [履歴]。サポートされている形式は、CSV/Excel と aXML です。

PSR、QCR、またはサプライヤ オブジェクトをエクスポートするには

1. ターゲット オブジェクト (PSR、QCR、またはサプライヤ) を選択して開きます。
2. ターゲット オブジェクトに対して [アクション] > [エクスポート] の順に選択します。
3. [エクスポート先:] ([aXML]、[テキスト (CSV)] または [Excel]) > [次へ] の順に選択し、適用可能なファイルタイプを選択します。
4. [フィルタ] で、適用可能なフィルタを選択します。[次へ] をクリックします。
5. [見出しの定義] で、[タイプ] を指定し、適切な説明を入力します。これは必須ではありません。
6. [次へ] をクリックして要約レポートを表示するか、[エクスポート] をクリックしてプロセスを完了します。

対象アイテムのレッドライン BOM と AML をエクスポートする

PDX または aXML エクスポート形式を選択した場合は、変更オブジェクトのエクスポート時に [レッドライン 変更のみ] という追加のフィルタ オプションを使用できます。このオプションは、変更された BOM 要素のみが変更対象アイテムのレッドラインセクションに含まれることを示します。未変更の要素は除外されます。この後、エクスポートされた PDX または aXML ファイルは、BOM と AML 変更のサプライ チェーン パートナーへの通信に使用されます。

この機能は、デルタ処理のために設計された ERP アダプタを対象としています。エクスポートした PDX または aXML ファイルの ERP アダプタへの送信には、Agile Content Service (ACS) を使用できます。

レッドライン BOM および AML をインポートするには

1. 変更オブジェクト (ECO など) を開きます。
2. [アクション]>[エクスポート] を選択します。
3. エクスポート形式として [PDX] を選択します。[次へ] をクリックします。
4. [エクスポート] ウィザードの [フィルタ] ページで [カスタマイズ] をクリックします。[次へ] をクリックします。
5. [フィルタ変更] ページで、[対象アイテムタブ]>[対象アイテム] および [レッドライン変更のみ] のボックスがチェックされていることを確認してください。

注意 [レッドライン変更のみ] ボックスが選択され、[対象アイテム] ボックスが選択されていない場合、対象アイテムとレッドラインテーブルはエクスポートされません。

6. [次へ] をクリックして、その他の設定を設定します。
7. [エクスポート] をクリックして、プロセスを完了します。

オブジェクトの関係テーブルをエクスポートする

[アイテム]、[変更]、[製造元]、[製造元部品]、および [部品グループ] オブジェクトが CSV/Excel または aXML ファイルとして含まれている関係テーブルをエクスポートできます。aXML ファイル形式の場合は、ControlObjStatus および EffectObjStatus という 2 つの追加タグがあります。これらは関係ルールを表します。エクスポートした aXML ファイルは、同一または別のシステムにインポートできます。

関係テーブルの詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』を参照してください。手順については、119 ページの「[\[エクスポート\] ウィザードのステップ](#)」を参照してください。

同じアイテムの複数のリビジョンをエクスポートする

エクスポートでは、同じアイテムの複数リビジョンが各リビジョンリリース日の順序で出力されます。保留中のリビジョンは、出力ファイルの最初に表示されます。その後に、初期のリリースから最近のリリースまで、リリースされたリビジョンが続きます。

見出しを指定する

[エクスポート] ウィザードの [見出しの定義] ページでは、エクスポートファイルを説明するオプションの見出し情報を指定できます。[タイプ] および [説明] フィールドに値を入力します。[作成者] フィールドには、自動的に現在のユーザー名が表示されます。

ファイルをダウンロードする

[エクスポート] ウィザードの残りのステップが完了していなくても、任意のステップでエクスポートファイルをダウンロードできます。エクスポートファイルをダウンロードする前にフィルタ情報を指定していない場合に使用されるデフォルト フィルタの詳細は、122 ページの「[デフォルトのカスタム フィルタ](#)」を参照してください。

エクスポート ファイルをダウンロードするには

1. [エクスポート] ウィザードで [エクスポート] をクリックします。
2. PDX パッケージをダウンロードする場合はステップ 4 へ進みます。それ以外の場合には、テキストファイルで [エンコード タイプ] を選択します。デフォルトのエンコード タイプは Unicode (UTF-8) です。
3. [続行] をクリックします。[ファイルのダウンロード] ウィンドウが表示されます。
4. [保存] をクリックして、コンピュータにファイルを保存します。

エクスポートしたファイルを表示する

テキストファイルをエクスポートした場合は、Microsoft Excel などのスプレッドシートプログラムや任意のテキストエディタで表示することができます。PDX パッケージをエクスポートした場合は、Agile eXpress または他の PDX 対応アプリケーションを使用して表示することができます。

Agile eXpress ビューアは、次の Web サイトから無料でダウンロードできます。

<http://www.myagile.com/eservices/express/>

FileLoad を使用する

扱うトピックは次のとおりです。

■ 概要	127
■ 作業を開始する前に	129
■ プロセスの概要	131
■ インデックスファイルを準備する	132
■ 添付ファイルの処理	139
■ 結果を評価する	141
■ 却下された添付ファイルを修正して再ロードする	142
■ エラー メッセージ	143

概要

FileLoad は、ソースシステムから Agile File Manager にレガシー添付ファイルを直接ロードする際に使用するユーティリティです。ロード先では、レガシー添付ファイルが適切な Agile PLM オブジェクトに添付されます。ファイルはほとんどの Agile PLM オブジェクトに添付することができます。

Java クライアントまたは Web クライアントのメニュー バーから [ツール] > [FileLoad] の順に選択すると、FileLoad がアクティブになります。

ファイルを添付できる Agile PLM オブジェクトには以下の種類があります。

ソリューション	オブジェクト タイプ
すべての Agile PLM ソリューション	ファイル フォルダ
Product Portfolio Management	アイテム
	変更
	製造元
	製造元部品
Product Governance & Compliance	デクラレーション
	部品グループ
	含有基準
	サブスタンス
Product Cost Management	価格
	見積依頼
	見積依頼回答
	ソーシング プロジェクト

ソリューション	オブジェクトタイプ
	サプライヤ
Product Portfolio Management	プログラム
Product Quality Management	製品サービス依頼
	品質変更依頼

FileLoad では、添付の [インデックス] ファイルを使用します。[インデックス] ファイルは、添付ファイルとしてロードするファイルを特定し、添付先の Agile PLM オブジェクトを指定するために作成するものです。

FileLoad は添付されたファイルを Agile File Manager の格納庫に保存し、Agile PLM データベースを更新します。

注意 レガシー ファイルが対象の Agile PLM システムにロードされると、これらのファイルはそのまま Agile PLM オブジェクトに添付されます。また、[ファイルフォルダ] クラスの新しいオブジェクトとして再キャストすることもできます ([名前をつけて保存] コマンドを使用)。

FileLoad クライアントを選択する

Web クライアントと Java クライアントにはいずれも FileLoad ユーティリティがあります。2つはよく似ていますが、性能も提供するオプションも多少異なります。

機能	Java クライアント	Web クライアント
ファイルのロード	はい	はい
リファレンスを URL にロード (Web の場所)	はい	はい
リファレンスを [カスタム] (読み取り専用) ファイル格納庫 (INPLACE 添付ファイル) のファイルにロード	はい	
最大 40 GB のファイルをサポート	はい	はい
複数の専用スレッドをサポート	はい	
ファイルのリモートアップロードをサポート	はい	はい
ローカルコンピュータのファイルを検出 (ネットワークの場所が指定されている場合を除く)	はい	
Web プロキシサーバのファイルを検出 (ネットワークの場所が指定されている場合を除く)		はい
データを添付ファイル設定フィールドにロード可能	はい	はい
複数ファイルを 1 つのファイルフォルダにロード可能	はい	はい
指定されたバージョンが見つからない場合、最新バージョンにファイルを添付可能	はい	はい
確定アイテムにファイルを添付可能	はい	はい
指定された場所にログファイルを生成	はい	
サーバにログファイルを生成。ファイルをローカルコンピュータにダウンロード可能		はい

パフォーマンス

FileLoad は Java クライアントでより速く稼働しますが、パフォーマンスはクライアントとサーバコンピュータの性能により異なります。クライアントとサーバコンピュータがマルチプロセッサタイプの場合は、Java クライアント使用時における FileLoad のパフォーマンスが大幅に向上します。

FileLoad によるファイル検出方法

ファイルのネットワークの場所を指定した場合を除き、Java クライアント FileLoad ユーティリティはローカルコンピュータのファイルを検出します。一方、Web クライアント FileLoad ユーティリティは Web プロキシサーバ(アプリケーションサーバと同じコンピュータである場合があります)でファイルを検出します。

どちらの Agile PLM クライアントの FileLoad ユーティリティも、ネットワーク パスを通してリモートからファイルにアクセスすることができます。詳細は、130 ページの「[リモートからファイルをアップロードする](#)」を参照してください。

ファイルにリファレンスをロードする

Agile Java クライアントの FileLoad ユーティリティは追加の添付ファイルタイプ INPLACE をサポートしています。INPLACE 添付ファイルタイプを使用し、カスタムファイル格納庫にあるファイルにリファレンスをアップロードすることができます。ファイルへのリファレンスは Agile PLM データベースに保存されますが、実際の物理ファイルはカスタム格納庫に保存されます。このカスタム格納庫は読み取り専用です。カスタム格納庫に格納されているファイルはチェックアウトできますが、再びチェックインした場合は、その格納庫のプライマリ読み取り/書き込み場所にコピーされます。リファレンスをファイルに読み込もうする前に、カスタム格納庫がセットアップされていることを確認してください。131 ページの「[カスタムファイル格納庫の設定](#)」を参照してください。

注意 Agile Web クライアント FileLoad ユーティリティは INPLACE 添付ファイルタイプをサポートしていません。

FileLoad のオプション

FileLoad のユーザーインターフェースは、ご利用の Agile PLM クライアントにより異なります。FileLoad オプションの完全なリストについては、139 ページの「[添付ファイルの処理](#)」にある表を参照してください。

作業を開始する前に

FileLoad を使い始める前に、使用環境を整え、このセクションで説明されている適切な権限があることを確認してください。

ファイルサイズとバッチ制限

FileLoad は最大 40 GB のファイルをサポートしています。また、1 回のバッチで多数のファイルを処理できます。1 回のバッチ処理につき、15,000 ファイルを超えないことをお薦めします。

同期全文インデックスを無効にする

FileLoad を使用する前に、ファイルの同期全文インデックスを無効にしてください。同期全文インデックスが有効に設定されていると、FileLoad は進行状況を報告せず、長時間のアップロード時にプラウザがタイムアウトになり、ファイルのローディングがきわめて遅くなります。FileLoad の使用が終わったら、ファイルの同期全文インデックスを再度有効にすることができます。

同期全文インデックスを無効にするには:

1. Agile Java クライアントを起動し、管理者としてログインします。
2. [管理] タブをクリックします。
3. [設定] > [システム設定] > [全文検索] を選択します。
[全文検索] のウィンドウが表示されます。
4. [インデックス] リストをクリックし、[手動] または [スケジュール済み] を選択します。
5. [スケジュール済み] を選択した場合、[周期] フィールドをクリックし、ファイルロードが完了した後にインデックスを開始するスケジュールを決めてください。
6. [保存] をクリックします。

Agile PLM での全文インデックス設定の変更方法の詳細は、『Agile PLM 管理者ガイド』を参照してください。

ウィルスソフトを無効にする

ウィルス駆除ツールを使用している場合、FileLoad を使用する前に無効にしてください。ウィルス駆除ツールは新たにアップロードされたファイルをスキャンするため、ロードプロセスが遅くなります。

必要とされる Agile PLM 権限

FileLoad を使用して Agile PLM オブジェクトに添付ファイルをロードするには、Agile PLM クライアントでこれらのオブジェクトを変更する際と同じ権限を持っていなければなりません。つまり、ファイルに添付するすべてのオブジェクトに対して修正権限を持っていることが必要になります。

さらに、FileLoad 権限も必要です。

Agile PLM の役割と権限を変更するには、Agile PLM 管理者にお問い合わせください。

ローカル ドライブからファイルをアップロードする

ローカル ドライブからファイルをアップロードすることをお薦めします。これは、ネットワークに保存されたファイル、特に大きなものの場合は、FileLoad が中断されてしまい、ロードプロセスが一部不完全なままとなってしまう恐れがあるためです。

リモートからファイルをアップロードする

ローカル ドライブからのファイルアップロードをお薦めしていますが、リモートからファイルをアップロードすることも可能です。リモートコンピュータからファイルをアップロードする前に、以下の点に留意してください。

- 添付ファイルを保存する共有フォルダがあること。
- Agile Web クライアントを使用している場合、Agile Application Server (System for Windows や Root for Solaris など) を実行している OS ユーザーは、参照されたファイルへの読み取り権限が必要。
- Agile Java クライアントを使用している場合、クライアントコンピュータにログインしている OS ユーザーは、参照されたファイルへの読み取り権限が必要。

- インデックス ファイルにネットワーク パスが含まれていること。例:

```
ITEM, P00001,, ¥¥computer¥sharedfolder¥file.txt, FILE, description
```

これらの基準を満たしていない場合、ファイルをリモートからアップロードしようとすると、次のようなエラーメッセージが表示されます。

「添付するファイルが見つかりません。」

カスタム ファイル格納庫の設定

Agile Java クライアントを使用して、リファレンスをカスタム ファイル格納庫に保存されたファイルへアップロードする場合、Agile PLM 管理者はまず格納庫を設定する必要があります。Agile File Manager の管理の詳細は、『Agile PLM 管理者ガイド』を参照してください。

カスタム ファイル格納庫を設定するには:

1. Agile Java クライアントを起動し、管理者としてログインします。
2. [管理] タブをクリックします。
3. [サーバ設定] > [サーバの場所] の順に選択します。[サーバの場所] ウィンドウが表示されます。
4. [ファイルマネージャ] タブをクリックして前面に表示します。
5. エントリをダブルクリックし、[ファイルマネージャ] のダイアログ ボックスを表示します。
6.  ボタンをクリックし、新規格納庫を追加します。
7. [格納庫タイプ] のフィールドで、[カスタム] を選択します。
8. [説明] フィールドで、格納庫の説明を入力します。
9. [ベースストレージのディレクトリ] フィールドで、ファイルが保存される主な場所を入力します。このディレクトリの下に、ファイルを含むサブディレクトリを含むこともできます。
10. [OK] をクリックします。
11. Agile File Manager を再起動します。

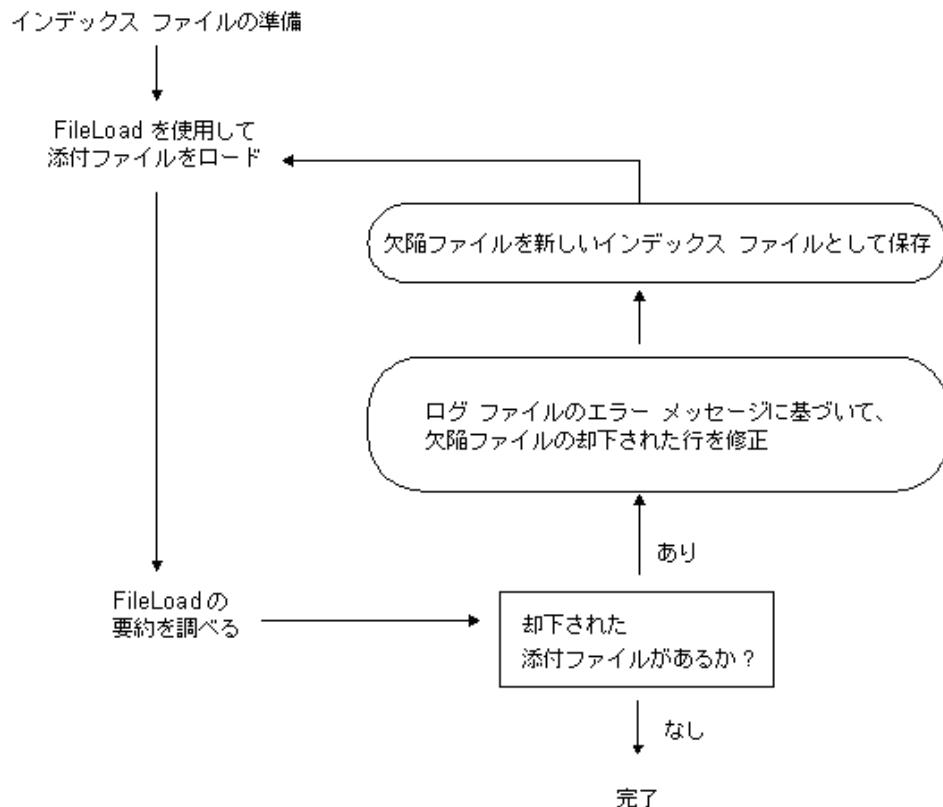
カスタム格納庫を設定した後に Agile File Manager を再起動しないと、FileLoad ユーティリティは格納庫を認識できません。

プロセスの概要

FileLoad のプロセスは、以下の段階に分けることができます(各段階については後のセクションで詳しく説明します)。

- 第 1 段階: インデックス ファイルを準備する (11-6 ページ) - 添付インデックス ファイルを準備します。
 - 第 2 段階: 添付ファイルを処理する (11-11 ページ) - FileLoad とインデックス ファイルを使用して、添付ファイルを処理します。
 - 第 3 段階: 結果を評価する (11-13 ページ) - 結果を評価します。添付ファイルが却下された場合は、FileLoad のログ ファイルを開き、エラー メッセージを確認します。
 - 第 4 段階: 却下された添付ファイルを修正し、再ロードする (11-15 ページ) - 欠陥ファイル内の却下された添付ファイル行を修正します。欠陥ファイルを新しいインデックス ファイルとして保存し、ロードします。
- 添付ファイルが正しくロードされるまで、第 3 段階と第 4 段階を繰り返します。

次の図に、FileLoad プロセスの概要を示します。

**重要**

1回の変更でロードするアイテムの数は、200～300個にすることをお薦めします。1回の変更で対象とするアイテムの数が多くなると、FileLoad ではファイルをロードするのに時間がかかり、その変更で対象とするアイテムのリビジョンを提示するにも時間がかかります。

インデックス ファイルを準備する

FileLoad を使用して添付ファイルをバッチ単位でロードするための手順として、最初に添付インデックス ファイルを準備します。インデックス ファイルはテキスト ファイルです。各行は Agile PLM 添付ファイルとしてロードする 1 つのファイルを表します。

更新された行には、カンマなどで区切られたエントリが少なくとも 6 つ含まれている必要があります。ユーザー設定 フィールドへの情報のアップロードをサポートするために、追加の属性値ペアを指定できます。

インデックス ファイルの構造

インデックス ファイルの各行は次のような構造になっています。

オブジェクト タイプ、プライマリ キー、セカンダリ キー、パス/ファイル名、
添付ファイル タイプ、説明
[, 属性 1=値 1, 属性 2=値 2, ..., 属性 n=値 n]<改行>

詳細は次のとおりです。

- オブジェクト タイプ = オブジェクト タイプを定義するキーワードです。
- プライマリ キー = 指定されたオブジェクト タイプのプライマリ キー フィールドの値です。ほとんどのオブジェクトでは、プライマリ キーはオブジェクト番号です。指定するオブジェクトはすでに存在している必要があります。FileLoad はオブジェクトを作成できません。
- セカンダリ キー = 指定されたオブジェクト タイプのセカンダリ キー フィールドの値です。オブジェクトがセカンダリ キーを必要としない場合、このフィールドは空白にしておきます。
- パス/ファイル名 = URL または完全なパスとファイル名です。
- URL を指定する場合は、正しく記入してください。FileLoad は URL を検証できません。
- INPLACE 添付ファイル (下記参照) については、指定するパスがカスタム ファイル格納庫のベース ストレージ ディレクトリと関連している必要があります。たとえば、ベース ストレージ のディレクトリが d:/files の場合、ロードするファイルは d:/files/cad/0021c.dwg に保存されている必要があります、cad/0021c.dwg のようにパスを入力します。Agile File Manager は、一致する最初のファイルが見つかるまで、すべての格納庫 (標準格納庫とカスタム格納庫の両方) を反復します。
- 注意:** Windows は円記号 (¥) のパスに対応していますが、Solaris とその他の Unix OS はこれに対応していません。このため、この章のパスの例では、スラッシュが使用されています。
- 添付ファイル タイプ = 以下のいずれかの値 (大文字小文字を区別します) を入力してください。
- FILE - ファイルを標準ファイル格納庫にアップロードします。
 - URL - オブジェクトに URL 添付ファイルを追加します。URL は、<http://www.agile.com> などの Web の場所です。FTP サイトなど、HTTP の URL ではないものも指定できます。
 - INPLACE - カスタム ファイル格納庫に保存されたファイルにリファレンスをアップロードします。読み取り専用です。
- 注意:** INPLACE 添付ファイル タイプは、Agile PLM 管理者によりカスタム格納庫が設定されている場合にかぎり、Java クライアントでのみサポートされています。
- 説明 = オプションのファイル説明です。
- [, 属性 1=値 1, 属性 2=値 2, ..., 属性 n=値 n] = データをユーザー設定フィールドにロードする際に使用する、任意の属性名と属性値の組み合わせです。属性名と値のデフォルトの区切り文字はイコール記号 (=) ですが、他の文字を指定することもできます。各属性/値の組み合わせを、カンマなどの属性区切り文字で区切ってください。

次に示すのは、インデックス ファイルの行の例です。

```
ITEM,P00010,,C:/temp/logo_color.bmp,FILE,Description="Fileload,Tes
t",Date01=12/12/00,List01>Select1,Text01="Test_Fileload",Text02=DF
SF<CR>
```

この行が正しく読み取られるためには、[説明] 属性の値が「Fileload, Test」でなければなりません。カンマがエントリの区切り文字として解釈されないように、カンマを含むテキストは引用符で囲まれています。

プライマリ キーとセカンダリ キーのフィールド内容の要求条件は、添付ファイルのオブジェクトタイプによって異なります。各オブジェクトタイプに対する特定必要条件は、135 ページの「[プライマリおよびセカンダリ キー](#)」で説明されています。

以下にインデックスファイルの構造についての基本的な情報を示します。

- すべての添付ファイルのユーザー設定フィールドは、Java クライアントの [管理] タブで有効に設定されている必要があります。インデックスファイルで使用されており、有効に設定されていないユーザー設定フィールドは、FileLoad によるエラー報告を招きます。

注意 管理者権限が割り当てられていない場合は、管理者の機能にアクセスすることはできません。詳細は、Agile PLM 管理者へ問い合わせてください。

- 各フィールドは、カンマなどの区切り文字で分離します。インデックスファイル全体で同じ区切り文字を使用します。インデックスファイルで使用されている区切り文字は、FileLoad ユーティリティで選択する [属性区切り文字] と一致しなければなりません。区切り文字オプションの詳細は、139 ページの「[添付ファイルの処理](#)」にある表を参照してください。
- ユーザー設定フィールドの属性と値は、他のインデックス行で使用されている区切り文字とは別の区切り文字で分離する必要があります。
- 区切り文字が 2つ続く場合、フィールドが空白であることを示します。カンマ区切りファイルでは、空白フィールドは「,,」のように 2つのカンマで表現されます。カンマの間にスペースはありません。
- 各行には、最低 6 つの区切りフィールドが含まれている必要があります。
- 1 つの添付ファイルを示す各行の行末には改行が必要です。
- 100 ~ 200 行の比較的小さいインデックスファイルは、動作の監視や問題の迅速な解決に役立ちます。
- Agile PLM では、ターゲット オブジェクトの確定日は変更されません。
- 一時ファイルに対応するため、FileLoad では、1 つのインデックスファイルでロードされる添付ファイルのサイズの 2 倍のディスク容量が必要です。すべての添付ファイルを同時にロードするだけの十分な容量がない場合、添付ファイルの合計サイズが小さいインデックスファイルを多数作成して、それぞれに要する容量を削減します。一時ファイルは、ロード プロセスが終了すると自動的に削除されます。
- ファイルが正常に添付されると、オブジェクトの [履歴] タブに記録されます。
- 文字の最大数は以下のようになります。
 - ファイル名 - 255 文字または [ファイル フォルダ]>[ファイル]>[ファイル名] フィールドの [MaxLength] (最大文字数) のプロパティで指定した文字数の、どちらか少ない方です。
 - [説明] フィールド - 100 文字または [ファイル フォルダ]>[ファイル]>[ファイル説明] フィールドの [MaxLength] (最大文字数) のプロパティで指定した文字数の、どちらか少ない方です。

オブジェクトタイプキーワード

下表には、FileLoad がサポートする各基本クラスのオブジェクトタイプキーワードを表示しています。インデックスファイルの [オブジェクトタイプ] フィールドでこれらのキーワードを使用します。

オブジェクトタイプ	キーワード
変更	CHANGE
デクラレーション	DECLARATION
ファイル フォルダ	FILEFOLDER
アイテム	ITEM
製造元	MFR
製造元部品	MFR_PART
部品グループ	COMMODITY
価格	PRICE
製品サービス依頼	PSR
プログラム	ACTIVITY
品質変更依頼	QCR
見積依頼	RFQ
見積依頼回答	RESPONSE
ソーシング プロジェクト	PROJECT
含有基準	SPECIFICATION
サブスタンス	SUBSTANCE
サプライヤ	SUPPLIER

プライマリおよびセカンダリキー

下表には、FileLoad がサポートする各オブジェクトタイプで必要とされるプライマリおよびセカンダリキーを表示しています。オブジェクトがセカンダリキーを必要としない場合、インデックスファイルのこのフィールドは白紙のままにしておきます。

オブジェクトタイプ	プライマリキー	セカンダリキー
変更	変更番号	[空白]
デクラレーション	デクラレーション番号 ([カバー ページ] > [名前] フィールドと同等)	[空白]
ファイル フォルダ	ファイル フォルダ番号	[空白]

オブジェクト タイプ	プライマリ キー	セカンダリ キー
アイテム	アイテム番号	リビジョン(オプション) 次の「アイテム リビジョン」を参照。
製造元	製造元名	[空白]
製造元部品	製造元部品番号	製造元名
部品グループ	部品グループ番号	[空白]
価格	価格番号	[空白]
製品サービス依頼	製品サービス依頼番号	[空白]
プログラム	プログラム番号	[空白]
品質変更依頼	品質変更依頼番号	[空白]
見積依頼	見積依頼番号	[空白]
見積依頼回答	見積依頼番号	サプライヤ番号
ソーシング プロジェクト	プロジェクト番号	[空白]
含有基準	含有基準番号	[空白]
サブスタンス	サブスタンス番号	[空白]
サプライヤ	サプライヤ番号	[空白]

アイテム リビジョン

アイテムのファイルをロードしている場合、[セカンダリ キー] フィールドでオプションのリビジョン識別子を指定することができます。有効なリビジョン識別子を使用してください。たとえば、あなたの会社は A、B、C、D などの文字を使用してリビジョンを識別することができます。以下の例では、リビジョン A のファイルをロードします。

ITEM, P00561, A, D:/dwg/00561a.dwg, FILE, Torque Widget

重要 [リビジョン] フィールドには「?」を指定しないでください。使用されている場合、FileLoad ユーティリティはエラーとなります。

初版リビジョン(新規作成され、リリースされていないもの)を指定する場合、次の例のように、[セカンダリ キー] フィールドは空白にします。

ITEM, P00545, , D:/dwg/00545.dwg, FILE, Battery Cover

保留中リビジョン(変更依頼がまだリリースされていないもの)を指定する場合、以下の例のように、リビジョンを括弧で囲います。

ITEM, P00561, (B), D:/dwg/00561b.dwg, FILE, Torque Widget

注意 インデックスファイルでリビジョンが誤って指定されると、FileLoad ユーティリティでは [指定したリビジョンが見つからない場合、最新のリビジョンに添付] という名前のオプションがこれらを処理します。

インデックス ファイルの例

このセクションでは、カンマで区切られたインデックス ファイルがどのような構造になっているかを例で示します。これらの例では、異なるインデックス ファイルで FILE、INPLACE、URL 添付ファイルタイプなどの使用を示していますが、これらを同じファイルで指定することもできます。

ファイルのアップロードに使用されるインデックス ファイルの例

以下の行は、FILE 添付ファイルタイプを使用する、カンマ区切りのインデックス ファイルから取ったものです。オブジェクト タイプはアルファベット順に配置されています。

```
ACTIVITY, PG0278,,D:/myprograms/phasecost.doc,FILE,Phase Cost Report
ITEM, P00545,,D:/dwg/00545.dwg,FILE,Battery Cover
ITEM, P00561,A,D:/dwg/00561a.dwg,FILE,Torque Widget
ITEM, P00561,(B),D:/dwg/00561b.dwg,FILE,Torque Widget
CHANGE, 25000,,D:/dwg/00561b.dwg,FILE,Torque Widget
COMMODITY, PG0278,,D:/groups/guidelines.doc,FILE,Part Group
Guidelines
DECLARATION, MD00007,,D:/docs/DecInstr.doc,FILE,Instructions
FILEFOLDER, FOLDER00042,,D:/specs/92master.doc,FILE,9.2 Master Spec
MFR, Manutech,,D:/dwg/0021c.dwg,FILE,Torque Widget
MFR_PART, WE10023-45, Manutech, D:/dwg/0021c.dwg,FILE,Torque Widget
PRICE, CONTRACT00001,,D:/pricing/price_sheet.xls,FILE,Price Sheet
PROJECT, PRJ00046,,D:/projects/dell/resources.xls,FILE,Resource
Spreadsheet
PSR, PR00004,,D:/pr/sn00241.doc,FILE,Support Notes
QCR, CAPA00001,,D:/capa/details.doc,FILE,Problem Details
RESPONSE, RFQ00001,SUP00067,D:/rfq/notes.doc,FILE,Notes
RFQ, RFQ00001,,D:/quotes/guidelines.doc,FILE,Price Quote Guidelines
SPECIFICATION, SPEC0023,,D:/specs/rohs.doc,FILE, ROHS Guidelines
SUBSTANCE, SUB0104,,D:/subs/cas_numbers.doc,FILE,CAS Numbers
SUPPLIER, DISTRIBUTOR00001,,D:/suppliers/wextronics.doc,FILE,Wextronics Profile
```

ファイルにリファレンスをアップロードする際に使用されるインデックス ファイルの例

以下の行は、INPLACE 添付ファイルタイプを使用する、カンマ区切りのインデックス ファイルから取ったものです。

重要 INPLACE 添付ファイルタイプは、Agile Java クライアントで FileLoad ユーティリティを使用しており、Agile PLM 管理者がカスタム(読み取り専用)ファイル格納庫を設定している場合のみ対応可能です。131 ページの「[カスタムファイル格納庫の設定](#)」を参照してください。Agile Web クライアント FileLoad ユーティリティは INPLACE 添付ファイルをサポートしていません。

```
ITEM, P00240,A,dwg/00240a.dwg,INPLACE,CAD Drawing
ITEM, P00262,B,dwg/00262b.dwg,INPLACE,CAD Drawing
ITEM, P00262,(C),dwg/00262c.dwg,INPLACE,CAD Drawing
ITEM, P00310,A,dwg/00310a.dwg,INPLACE,CAD Drawing
ITEM, P00337,A,dwg/00337a.dwg,INPLACE,CAD Drawing
```

URL のアップロードに使用されるインデックス ファイルの例

以下の行は、URL 添付ファイルタイプを使用する、カンマ区切りのインデックス ファイルから取ったものです。

```
FILEFOLDER, FOLDER00010,,http://www.yourcompany.com,URL,Home Site
FILEFOLDER, FOLDER00010,,http://www.yourcompany.com/Mfg/,URL,Manufa
cturing Services Site
FILEFOLDER, FOLDER00010,,http://www.google.com,URL,Google
```

複数のファイルを同じファイル フォルダにロードする

インデックス ファイルの連続した行に同じプライマリ キー値がある場合(つまり、同じオブジェクトを参照している)、FileLoad は各ファイルに対し個別のファイル フォルダを作成するか、またはファイルを 1 つのフォルダにまとめることができます。たとえば、1 つのインデックス ファイルから取った以下の行は、同じアイテム 76-2063 を参照しています。

```
ITEM, 76-2063,D,C:/load/fileload/2063P1.tif,FILE,AMP Specifications
ITEM, 76-2063,D,C:/load/fileload/2063P2.tif,FILE,
```

[各ファイルに対する個別フォルダの作成] という名前のボックスのチェックを解除すると、同じ説明が両方のファイルに対して使用され、同じファイル フォルダに追加されます。[各ファイルに対する個別フォルダの作成] のボックスがチェックされている場合、個別のファイル説明で、別々のファイル フォルダが作成されます。

同じプライマリ キー値を持つ連続した行に対して、個別のファイル フォルダとファイル説明を作成するもう 1 つの方法は、行と行の間に改行で空の行を追加することです。これは、[各ファイルに対する個別フォルダの作成] ボックスがチェックされているいないにかかわらず、機能します。ただし、同じプライマリ キー値を持つ連続した行は、同じ添付ファイルタイプを持たなければなりません。FILE と URL 添付ファイルは、同じファイル フォルダに追加できません。

ファイル マネージャによる INPLACE ファイル検出方法

ファイルを検出するために、ファイル マネージャは、一致する最初のファイルが見つかるまで、すべての格納庫(標準格納庫とカスタム格納庫の両方)を反復します。異なる格納庫に重複した名前のファイルが複数ある場合は、間違った INPLACE ファイルにリファレンスをアップロードする可能性があります。ファイル格納庫にある INPLACE ファイルを一意に識別するためには、ファイル名が一意でない場合でも、そのパスは一意である必要があります。

注意 ファイル マネージャ情報は、サーバの起動時にダウンロードされ、キャッシュされます。新規のカスタム(読み取り専用)格納庫を追加するために、Agile Java クライアントを使用する場合は、必ずファイル マネージャを再起動してください。再起動しない場合、ファイル マネージャは新規の格納庫を見つけることができません。

添付ファイルの処理

添付インデックス ファイルを作成したら、FileLoad を起動して添付ファイルを処理します。

注意 他のユーザーが、他のファイル格納庫へファイルをロードする権限を持っている可能性があることに注意してください。様々なユーザー（日中、夜勤など）について多数のファイルのロードを管理している場合は、処理で使用しているコンピュータでのログインユーザーの影響に注意してください。

FileLoad を開始するには:

1. Java クライアントまたは Web クライアントで、[ツール] > [FileLoad] の順に選択します。
2. インデックスファイルと他の FileLoad オプションを指定します。オプションの一覧については、以下の表を参照してください。
3. [OK] (Java クライアントの場合) または [ロード開始] (Web クライアントの場合) をクリックし、ファイルのロードを開始します。

次の表は、FileLoad オプションの一覧とその説明です。

オプション	説明
インデックス ファイル	[参照] をクリックして添付ファイルインデックス ファイルを検索し、選択してください。添付インデックス ファイルのパスとファイル名が表示されます。 注意: インデックス ファイルでは、.LOG および .BAD をファイル名の拡張子として使用しないことをお薦めします。インデックス ファイルの内容が ASCII エンコードであれば、インデックス ファイルの拡張子として任意のものを使用できますが、混乱しないような拡張子を選択してください。
属性区切り文字	インデックス ファイルで使用する区切り文字を選択します。[タブ] または [その他] を選択して、フィールドに他の区切り文字を入力できます。[その他] 区切り文字には、次の文字を指定できます。 <スペース> , ; ‘ [] ‘ < > ? " { } ~ ! @ # \$ % ^ & * () _ + - = ALT キーとキーパッドの文字を同時に押して作成する文字は、使用できません。英数字は使用しないでください。 注意: [属性区切り文字]、[属性名と値の分離文字]、[テキスト修飾語句]、[マルチリスト区切り文字] のフィールドでは、コロン(:)、ピリオド(.)、スラッシュ (/)、円記号(¥)を使用しないでください。これらの文字は、ファイル名やパスとして使用される場合があります。
属性名と値の分離文字	インデックス ファイルで使用する区切り文字を選択します。この区切り文字についても、属性の区切り文字で説明したルールに従いますが、他の区切り文字と重複することはできません。
テキスト修飾語句	インデックス行内のテキスト文字列を指定するための区切り文字です。有効な区切り文字であれば指定できますが、引用符の使用をお薦めします。この区切り文字についても、属性の区切り文字で説明したルールに従いますが、他の区切り文字と重複することはできません。

オプション	説明
マルチリスト区切り文字	<p>この区切り文字は、マルチリストフィールドのエントリを区切るために使用します。デフォルトはセミコロンですが、有効な区切り文字であれば指定できます。この区切り文字についても、属性の区切り文字で説明したルールに従いますが、他の区切り文字と重複することはできません。</p> <p>注意: [添付ファイル] タブには [マルチリスト] のユーザー設定フィールドがありませんが、[ファイルフォルダ] オブジェクトの [ファイル] タブにはこのフィールドがあります。このため、[マルチリスト区切り文字] は、ファイルフォルダにファイルをロードする際にのみ使用します。</p>
専用スレッドの数 (Java クライアント)	<p>1~100 の値を入力し、FileLoad プロセスの専用スレッド数を指定します。特にクライアントとサーバがマルチプロセッサ搭載のコンピュータの場合、専用スレッド数を増加すると、FileLoad のパフォーマンスも向上します。</p>
指定したリビジョンが見つからない場合、最新のリビジョンに添付	<p>Agile PLM データベースに存在しないリビジョン値を含むアイテムのファイルを、Agile PLM のオブジェクトの最新リリース リビジョンに追加したい場合に、このオプションを選択します。リリースされているリビジョンがない場合は、Fileload によってファイルが初版リビジョンに追加されます。(インデックス ファイルの [セカンダリ キー] フィールドにはアイテムのリビジョン値があります。)</p> <p>以下の状況では添付ファイルは却下され、欠陥ファイルとログ ファイルに書き込まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> このオプションを選択しない場合、Agile PLM データベースに存在しないリビジョン値を含んでいるアイテムのインデックス ファイルの添付ファイル行が却下され、後でトラブルシューティングできるように、欠陥ファイルとログ ファイルに書き込まれます。 [最新のリビジョンに添付] をチェックすると、ファイルはオブジェクトの最新リリース リビジョンに添付されます。オブジェクトが「プレリミナリ」ステータスの場合は、初版リビジョンに添付されます。 インデックス ファイルの [セカンダリ キー] フィールドが空白になっている場合、ファイルはアイテムの初版リビジョンに添付されます。インデックス ファイルの NULL のリビジョンとは、初版リビジョンのことです。 保留中リビジョンにファイルをアップロードするには、インデックス ファイルのリビジョン値を、(A) や (1.0) など、括弧で囲う必要があります。
確定アイテムにファイルを添付	<p>確定アイテムに添付ファイルを追加する場合は、このボックスをチェックします(ただし適切な権限があることを前提とします)。このボックスがチェックされておらず、FileLoad が確定アイテムにファイルを添付しようとした場合、「オブジェクト<オブジェクト番号>は確定済みであるため、この操作を実行することができません」というメッセージが表示されます。</p> <p>注意: インデックス ファイルのアイテムがすでに確定している場合、[確定アイテムにファイルを添付] がチェックされていることを確認してください。</p>
各ファイルに個別フォルダを作成します	<p>このボックスがチェックされている場合、FileLoad はファイルを別々のフォルダにロードします。</p> <p>チェックされていない場合、FileLoad は同じプライマリ キー値を持つ連続した行を別々に処理します。FileLoad は両方のファイルに同じファイル説明を使用し、両方のファイルを同じファイルフォルダに追加します。</p>
ログ ファイルのディレクトリ (Java クライアント)	<p>ログ ファイルを作成する場所を指定します。</p>

オプション	説明
OK (Java クライアント)	インデックス ファイルの読み出しと添付ファイルの処理が開始されます。
ロード開始 (Web クライアント)	
閉じる (Java クライアント)	FileLoad ウィンドウまたはページを閉じます。
キャンセル (Web クライアント)	注意: [キャンセル] と [閉じる] ボタンは、ロードプロセスが開始すると無効となります。

重要 FileLoad が完了メッセージを表示せずに終了した場合は、重大なネットワーク障害が発生してロードが完了しなかった可能性があります。このような場合は、「ロード」の最後のファイルがターゲットデータベース内にあることを確認してください。このようなファイルがターゲットデータベース内なく、欠陥ファイルに示されていない場合は、FileLoad が停止した場所を特定し、残りのファイルをロードします。

結果を評価する

このセクションでは、Java クライアントと Web クライアントで FileLoad 結果を評価する方法を説明します。

Java クライアントで FileLoad 結果を評価する

Agile Java クライアントでは、FileLoad の要約が FileLoad ウィンドウの拡張部分に表示されます。

Total 10	Processed 10
Bad 4	loaded 6
Start Time 10/28/2005 1:54:38	End Time 10/28/2005 1:55:6

FileLoad ログ ファイルは指定されたログ ファイルのディレクトリに保存されます。ログ ファイルはテキストエディタなどで開くことができます。各セッションで、FileLoad は以下のようなログ ファイルを作成します。

- インデックス ファイル.日付.時刻_BAD - FileLoad プロセス中に却下されたインデックス ファイルの行が含まれます。
- インデックス ファイル.日付.時刻_LOADED - FileLoad プロセス中に正常にロードされたインデックス ファイルで却下された行が含まれます。
- インデックス ファイル.日付.時刻_LOG - FileLoad プロセス中に却下されたインデックス ファイルの各行が、エラー メッセージとともに含まれます。
- インデックス ファイル.日付.時刻_SUMMARY - FileLoad の要約情報が含まれます。

注意 ログ ファイルの名前を変更し、.TXT という拡張子を付けると、自動的にテキスト エディタと関連付けられます。

Web クライアントで FileLoad 結果を評価する

Agile Web クライアントでは、FileLoad がインデックス ファイルの添付処理を終了すると、[FileLoad の要約] が表示されます。

添付ファイルのロード結果が [FileLoad の要約] ページに表示されます。

[欠陥ファイルの表示] をクリックし、欠陥記録のログ (LogFile.BAD) を開くか、保存します。このログには、FileLoad プロセス中に却下されたインデックス ファイルの行が含まれます。

[ログ ファイルの表示] をクリックし、ログ ファイル (LogFile.LOG) を表示または保存します。このログには、FileLoad プロセス中に却下されたインデックス ファイルの各行と、エラーメッセージが含まれます。

注意 ログ ファイルはまずディスクに保存してから表示することをお薦めします。ログ ファイルを保存する際は、ファイルが自動的にテキスト エディタに関連付けられるように、拡張子 .TXT を追加してください。

[FileLoad] ページを閉じるには、[完了] をクリックします。

ログ ファイル出力の例

欠陥ファイル内の拒絶されたインデックス ファイル行は、原因を説明するエラー メッセージとともにログ ファイルに書き込まれます。

```
CHANGE,23450,,D:/dwg/0021c.dwg,FILE,Torque Widget
< 添付するファイルが見つかりません。 >

ITEMBAD,1000-02,666,D:/dwg/0021c.dwg,FILE,Torque Widget
< オブジェクト タイプが無効です。 >

MFR,MFR_TEST1,,D:/dwg/0031e.dwg,FILE,Cap Widget
< オブジェクトが見つかりません。 >
```

却下された添付ファイルを修正して再ロードする

却下されたインデックス ファイルの各行は、欠陥ファイルとログ ファイルに書き込まれます。

- 欠陥ファイルには、インデックス ファイルから却下された行のみが含まれます。
- ログ ファイルは、却下された添付ファイル行に対して原因を説明するエラー メッセージが付加される点を除いては、欠陥ファイルと同じです。

ログ ファイルのエラー メッセージを参考にして、欠陥ファイル内の却下された行を修正します。

重要 ロードインファイルがソース ファイルの正確なコピーであることが確認できるまでは、ロードイン ファイルを使用してコミットしないでください。ロード処理で問題が発生して 1 つまたは複数の ファイルが必要になる可能性が少しでも残っている場合は、すべてのソース ファイルを保持しておく必要があります。

ログ ファイルと欠陥ファイルを使用するには:

1. 欠陥ファイルとログ ファイルを特定し、それぞれをテキスト エディタで開きます。
2. ログ ファイルのエラー メッセージを使用して、欠陥ファイル内の却下された添付ファイル行を修正します。
3. 修正した欠陥ファイルを新規インデックス ファイルとして保存し、ファイル名に数字を加えます。例: IndexBAD1.txt。これにより、元のインデックス ファイルが上書きされず、処理されたインデックス ファイルのアーカイブが保持されます。

- 新規のログ ファイルを選択して処理します。139 ページの「[添付ファイルの処理](#)」を参照してください。
- [FileLoad の要約] に欠陥レコードが表示されなくなるまで、このリビジョンと再ロードを繰り返します。

注意 すでにロードされている Index ファイルに対して再実行すると、FileLoad は、指定されたすべてのファイルをもう一度割り当てます。複数のインデックス ファイルを使用している場合は、どのファイルが正常にロードされたかを必ず追跡するようにします。重複した添付ファイルを特定して削除するのは、困難で時間のかかる作業になります。

エラー メッセージ

このセクションでは、表示される FileLoad エラー メッセージについて説明します。

[添付ファイル] タブが非表示です。

ファイルを追加するオブジェクトの [添付ファイル] タブが、管理者でアクティブになっていません。[添付ファイル] タブは、Agile PLM 管理者により、Agile Java クライアントを使用して表示状態にしておく必要があります。

添付するファイルが見つかりません。

インデックス ファイルのエントリで、添付ファイルのパスとファイル名の綴りを修正します。URL を添付した場合、サポートされるプロトコルは FTP、HTTP、ファイル、および HTTPS です。アドレスは確認されません。

オブジェクト <プライマリ キー> が見つかりません。

添付ファイルを受け取るターゲット オブジェクトがデータベースで見つかりません。行の最初の 3 つのフィールド(オブジェクト タイプ、プライマリ キー、セカンダリ キー)を組み合わせたオブジェクトです。欠陥ファイルでこれらのフィールドに正しい値が入力されていること、およびその名前のオブジェクトがデータベースに存在していることを確認します。必要に応じて、オブジェクトを追加するか、インデックス ファイルを変更します。

指定されたリビジョンが見つかりません。

インデックス ファイルのアイテムのリビジョン識別子がデータベースに存在しません。また、[FileLoad のオプション] で [最新のリビジョンに添付] が選択されていません。139 ページの「[添付ファイルの処理](#)」を参照してください。

インデックス ファイルが見つからない、もしくは空です。

インデックス ファイルのパスが間違っている(インデックス ファイルのパスを手動で入力した場合)か、指定したインデックス ファイルが空です。

リストの値が見つかりません。

ユーザー設定の [リスト] または [マルチリスト] フィールドのリスト値が、すべてまたは部分的に不正です。

添付ファイルがチェックアウトされているため、この操作を実行できません。

指定された添付ファイルのファイル フォルダがチェックアウトされているため、ファイルをアップロードできません。ファイル フォルダがチェックインされていることを確認した上で、再度 FileLoad を使用してファイルをアップロードしてください。

オブジェクト<オブジェクト番号>は確定済みであるため、この操作を実行することができません。

アイテムは ECO により確定されているため、添付ファイルテーブルは読み取り専用です。確定アイテムに添付ファイルを追加するには、[FileLoad のオプション] ダイアログ ボックスで必ず [確定アイテムにファイルを添付] をチェックします。

ファイルの添付に失敗しました。

却下の原因が不明であるか、複数のエラーが発生した場合のエラーです。データベースにオブジェクトが存在することを確認し、インデックスファイルのエントリを確認した後に再試行します。作成者の役割が必要です。

空のファイルは追加できません。

添付するファイルのサイズが 0 (ゼロ) です。

ファイル サーバがダウンしている可能性があります。ファイル サーバの設定を確認してください。

Agile File Manager サーバがダウンしています。File Manager がインストールされているコンピュータで、File Manager を起動してください。Windows では、Apache Tomcat サービスを開始する必要があります。

日付フォーマットが無効です。

ユーザー設定の [日付] フィールドがユーザー プロファイルの日付/時刻フォーマットに準拠していません。

無効な数字です。

ユーザー設定の [数値] フィールドが数値になっていません (文字列が含まれている可能性があります)。

無効なオブジェクトタイプです。

インデックス ファイルの行が有効なオブジェクト タイプ キーワードで開始されていることを確認してください。11-8 ページの「オブジェクト タイプ キーワード」を参照してください。

非表示の属性フィールド

指定されたユーザー設定フィールドの表示が有効になっていません。ユーザー設定フィールドは管理者の機能で有効 (表示状態) にしておく必要があります。

有効な添付ファイル タイプではありません。FILE、URL、または INPLACE でなければなりません。

Agile Web クライアントで FileLoad ユーティリティを使用している場合、[添付ファイル タイプ] フィールドは FILE または URL である必要があります。Agile Java クライアントで FileLoad ユーティリティを使用している場合、第 3 の添付ファイル タイプ INPLACE がサポートされます。

フィールド数が最小限必要な数に達していません。

インデックス ファイルの各行には、少なくとも 6 つの区切りフィールドが含まれている必要があります。空白フィールドは区切り文字 2 つで表します。

注意 タブを区切り文字として使用している場合、各行の最後のフィールドの後にタブがないことを確認します。

プライマリ キー (2 つ目) のフィールドが空です。

2 番目の [プライマリ キー] フィールドは必須フィールドです。基本クラスに基づき、常に有効なオブジェクト番号または名前が必要です。11-8 ページの「プライマリおよびセカンダリ キー」を参照してください。

[添付ファイル] タブでは、属性のフィールド名は見つかりませんでした。

このメッセージは、指定されたユーザー設定フィールドの名前が見つからないことを示します。ユーザー設定フィールドは管理者の機能で有効(表示状態)にしておく必要があります。また、インデックスファイル内の [属性名と値] の分離文字が不正な場合は、フィールド名を正しく特定できません。

文字の長さが最大長を超えています。

ユーザー設定の [数値] フィールドの文字長が管理者で定義した最大長を超えています。

数値が最小値と最大値の範囲ではありません。

ユーザー設定の [数値] フィールドの値が管理者で定義した最小値と最大値の範囲を超えていません。

文字列の長さが 0 と最大値の範囲ではありません。

ユーザー設定の [テキスト] フィールドの文字長が管理者で定義した最大長を超えています。

ユーザー権限が不十分です。

オブジェクトに添付されたファイルに対して、ユーザー権限が十分ではありません。

Agile Application Server に接続できません。

Agile Application Server が起動しており、チェックイン権限のあるユーザーとしてログインしていることを確認してください。

